

---

# ルイズ：ハルケギニアに還る

ポギャン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ルイズ：ハルケギニアに還る

### 【Nコード】

N4897Y

### 【作者名】

ポギヤン

### 【あらすじ】

ルイズが5歳の時、ある魔法の事故で異世界地球に渡り。色々な事が合つて漸く15歳の春先に、ハルケギニアに帰還した時から、物語が動き出して行く……

一話ルイズの地球での十年その一（前書き）

皆様のご指摘を、

受けまして

001話を編集し直して

投稿しました。

来れからも、不備等が、会ったら遠慮無く、  
ご指摘を願います。

## 一話ルイズの地球での十年その一

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール」

五歳の、ある春の日であった。

その日ルイズは、ある覚えたての呪文を唱え、召喚の鏡を呼び出すのに成功して、ハシヤギ過ぎて躓き鏡に触れて？ そのまま吸い込まれて消えて云った。

その光景を目撃した使用人がヴァリエール公爵夫妻に、至急報告して連絡を受けた公爵夫妻は、家臣並びに使用人を総動員して、城館周辺、及びヴァリエール領地内を隅々まで搜索したが、見付からず。更に探索の手をトリスティンを始めハルケギニア中に拡げたが見付からず？ そのまま、十年の歳月が過ぎ去った。

その頃、鏡の中に消えたルイズは、？

「此処は何処なのー母様、父様、ちい姉様、怖いよーお腹すいたよーうわあぁーん。うわあぁーん、あぁーん、あぁーん。あぁーん。」

辺り憚らず大声で泣きわめくルイズ。すると。

「何をそんなに泣いているのかい、可愛い顔が台なしだよ、小さなお嬢さん。」

急に声を掛けられ、びくつくルイズだったが、良く見ると。優しい笑顔でこちらを見るおじさんがいた。

来れが後にルイズを引き取り養女にした。敷島礼次郎博士との初めての出会いだった。

（ルイズ心の声）

（博士と出会ってから五年が過ぎ私は今十歳に成り、この五年間の出来事を振り返っていた。）

（色々な事があったわね、あれから博士の家。兼、研究所に入っ  
て色々な事を聴き私も知っている事、総てを話した結果。此処はハル  
ケギニアで無く、地球と言う異世界の日本国内の某都市と言う事だ  
った。）

（私は悟った、二度と母様や父様、姉様達と逢えないと。そして涙  
が止まらない程大声で泣く私を優しく抱きしめながら、博士は  
「君を必ず絶対にハルケギニアに還して見せると。」  
誓ってくれた！）

（あれから博士は、ツテを使い裏から法務局に手を廻して私の戸籍を修得して、博士の養女に成った。）

（それから博士は言葉は何故か通じ合えるけど、日本語が読めない私に、平仮名、片仮名、漢字を教えてくれて、更に算数や地球世界の知識や各種常識等を統べて教えてくれたの。良い事何だけど私は少々着いて行けなくて、パニックに成った。）

（私が此処に来て一ヶ月が過ぎた頃、私と博士はお互いに隠していた秘密を伝えあつた。

「私、才能は無いけど魔法が使えるの。」

「僕もね、たいした事じゃ無いけど超能力者なんだ。」

私と博士はそう言い合つて笑つたけど、後に博士の力を見せて貰つたら謙遜だつたとう事が判つた。だつてサイコキネシスは、風のスクエアより強力だし、パイロキネシス何か、火のスクエアを超える威力だし、テレポーションはコモンマジックや四系統魔法でも出来ないし、伝説の虚無は出来たらしいけど。でも一番凄いのは予知能力よね、あれで株式で儲けたり各種ギャンブルで稼ぐのよね。）

（日本に来て1年ぐらひは驚きの連続だつたわね、馬より速くて乗り心地抜群の自動車や火竜と同じぐらひのスピードで、一度に千人位の人を乗せて走る電車に、風竜より遙に速くて高く飛ぶ飛行機等あと空は飛ばないけど、ハルケギニアのフネより遙に大きな海を走る船等、驚く事ばかりだつた。）

（でも博士のこの話を聞いたときは哀しかった。博士は生まれた時から強大な力を持ち、それゆえ親兄弟に恐れられ淋しい子供時代を過ごして、中学を卒業し、東京に出て来て働きながら高校、大学、大学院を卒業して各種の資格や博士号を修得した博士は凄いなと思っ  
た。）

（私の戸籍上の誕生日は三月三日なので、日本に来て一年がたった頃。小学校に入学する事に成りました。）

（最初は平民の学校何てと思いはしたけど。そう、地球世界は王様は居るけど貴族は殆ど居ないのよね。）

（私が通う所は研究所の近くの小学、中学、高校、大学まで有る一貫教育の女子校のお嬢さま学校だった。）

（此処は創立百年以上を誇る伝統の名門お嬢さま学校だけに、学業とスポーツの所謂、文武両道をモットーに、二十一世紀の日本では珍しい。淑女としての各種厳しい常識や嗜み及び道德観を叩き込む、恐ろしい学校でした。それに比べたら後にハルケギニアに還ってから入学したトリスティン魔法学院等は、生徒に甘く、規律が無いに等しい、馬鹿学校でしか有りません。）

（此処の地球世界の月はハルケギニアの双月と違い一つで一回り小さくて色も黄色い月ですが、此処の人類はその月にロケットを飛ばして行ったのですから、物凄い事です。）

（私が魔法の訓練をしたいのと言うと、博士は某県、奥秩父の更に奥にある博士所有の別荘を使いなさいと、週末の休みに、二人で良  
く行くように成った。）

（そこは近くに小さな溪流が有り、閑静で緑豊かなとても良い場所  
で、私のお気に入りでもある。）

（博士が私の魔法を使うのを見たり、私から聞き出したハルケギニアの魔法の知識を知って出した結論は。失われたと言われる伝説の虚無だと。私なんか虚無等であるはずが有りません。そう言っ  
て博士を見ると、哀しい瞳をして

「ルイズ、人は誰でも無限の可能性を持っているんだよ！　ここで諦めたらそこから先は何も進まないんだよ。」

（そう言いながら私を、そっと優しく包み込む様に抱きしめてくれる、博士）

（後に成って思うと、とても恥ずかしかった）

（あれから博士のアドバイスも有り、爆発魔法の制御も出来る様になり、そしてフライやレビティション等の各種コモンマジックが出来る様になった。嬉しい。）

（魔法が使える様に成って自信が付き、学校でも友達が出来たり。部活で柔道部に入りとても充実した日々を送っていたら季節は巡り。）

（十歳に成った私は博士の奨めも有り、紹介である道場に剣術を習いに通い出した。道場で一つ上で11歳に成る生涯に渡る、運命のパートナーに成る？　平賀才人に会った。春の淡い陽射しの午後  
の出来事だった。）



（後から考えると運命の出会い何だけど、最初の印象は最悪だった。口は悪いし、女の子の前で平気でオナラをする無神経さには、はらがたち、気づいたら右のストリートパンチをあいつの顔面に叩き込んでいたのよ。その後はお互い取っ組み合いになって、早瀬平八郎先生に怒られたのは良い思いでになるのかな。）

続く。

一話ルイズの地球での十年その一（後書き）

只今、002話を執筆中です。

二話ルイズの地球での十年その二（前書き）

最初の001話を

皆様方のご指摘を請けて、

編集し直し、再投稿しましたが

まだ、システムに慣れて無くて、

皆様方に頂いた

感想文を消して仕舞い

誠に申し訳ございません

来れからは、気をつけて行きますので

宜しく願います。

## 二話ルイズの地球での十年その二

東京都内某剣道場内

「ああああ…なんだ此処は？ ボロボロな所だなあ…まともに、剣道を教えてくれんのかあ。」

「あんだねえ〜此処は剣術場よ！ 剣術場！」

「そんなの、どっちでも一緒だろ。」

「一緒の訳ないでしょ…あなた、なんにも知らないで来たの〜脳天気ね〜呆れるわ…。」

「べべ、別に、良いだろ〜それより俺は、あんだじゃあねえ、平賀才人と言う立派な名前があんだよ。」

「逸れは悪かったわ？ 私は、ルイズ・フラン…いえ、敷島ルイズよ！ 宜しくね。」

相違つて握手を求める、ルイズ

「なあルイズって呼んでいいか

「良いわよ！ 馬鹿正直そうだし、特別に呼ばせてあげられる！」

「なんだあゝ偉そうな、上から目線は？」

「これでも！ あんたの事、一応褒めてるのよ！」

「だから、あんたじゃねえよー才人って言ってんだろーがあーこのピンク頭があー。」

「何ですってー！」

「こんな生意気な女はこれでも喰らえー。」

そう言うと才人は尻をルイズに向けて、屁を放つたのでした。毒ガス攻撃を喰らった後のルイズはあまりの腐さに失神しかけるがなんとか立直り、才人がけて渾身の右ストレートパンチを顔面に叩き込むのであった。その後は取っ組み合いになって早瀬平八郎に二人とも頭にゲンコツをくらって止められたのでした

（ルイズ心の声）

（そう、最悪の出会いだったのよーあの時コテンパンに叩き潰して

あげたもんだから！ 本当は次から来る気は無かったけど、私にリベンジするために来たのよねえ〜サイトは。）

（あの日から土日の週末は、剣術の早瀬平八郎師匠？ の所に通うのが嬉しくって、ウキウキしてたのはサイトに逢えるからなのよ。）

（そりゃあサイトは、馬鹿でスケベだし、あと、オツチヨコチヨイで、すぐ気が抜ける奴だけど〜頑固な程真っ直ぐで熱血漢の正直者だし、そうゆう処があいつの長所なのかなあ〜と思ったのよ。）

（剣術練習が終るとお腹が空いてるから、サイトが好きなマツクの照り焼きバーガを二人して食べに行ったり、その次は私の好物の吉牛の牛丼大盛を食べたりとか、更にはカラオケやボーリング、映画等を楽しんだり？ していたわねえ〜）

（そう有れば小学校の修学旅行先が沖縄で、初めてジェット旅客機に乗ったときは、感動したわねえ〜そんな日本での楽しい日々が、終りに近付いていたなんて気付きもなかったのよ。あの頃の私は！。）

（博士にとても深刻な事を打ち明けられたのは、中学の修学旅行先のオーストラリアから帰って来た翌朝の事でした。）

早朝ルイズが起きてリビングに行く

「おはよう博士。」

「おはようルイズ、とても大事な話があるからソファアに座って、黙って聞いてくれないか。」

ルイズは静かに博士の話しを聞いていた。

「ルイズ、結論から先に言つと。このまま君が地球世界に居続けると、この地球とルイズのハルケギニア世界が異次元空間の歪みに依つてあと、五年以内に内部崩壊を起こして消滅することがわかつた！。」

「そ、それは、どう言つた事ですかー博士！。」

博士がルイズに語つて聞かせた事は、ルイズ自身の膨大な魔力がハルケギニア世界を構成する力の源の一部分で有り、ルイズが長期間不在の為、バランスが崩れラインが繋がつて要るルイズを通して、此、地球世界の力の源に過剰なエネルギーが送り込まれて、地球世界全体が活性化して内部崩壊を起こすと言う事だった。

一方のハルケギニアもエネルギーの流失でバランスを崩して同じく内部崩壊を起こしてまう事だった。

「だからルイズを一年以内にハルケギニアに送り返そうと思つてい  
る。」

「又、其が君に誓つた約束事だったが、ルイズ自身は今、どう思つ

「ているんだい。」

「……わ、私は、今、そんな、重大な事、きゅ、急に言われても？」

「重大事を急に言われてルイズにも、戸惑うが事が色々有るのは判  
つてはいるが決心して欲しい。其に魔力制御がまだ不安定だから、  
努力して完全に安定させて欲しい。時間が掛かると思っからその間  
に結論を出せば良しさ、慌てて決める事は無いよルイズ。」

そうルイズに優しく語る礼次郎だった。

（ルイズの心の声）

（博士に重大事を聞かされた私は、暫く茫然としていたけど、はっ  
として気付き来れからの事を色々と考えていた。）

（今まで夢に見る見る程逢いたかった、愛しい家族の元へ還れると  
判ったのに。本当は嬉しい筈なのに、胸の奥がズキ、ズキ、して痛  
かったのはサイトの明るい笑顔が心に想い浮かんで？ いたからな  
の……。）

博士がルイズに重大事を告げた日から一月が過ぎた日の

（ある街の喫茶店内）



「どうしたんだあゝルイズ、映画館に入る前からボくとしてたし、今も心、此処にあらずし！」。

「別に……………」。

「別につて、今日だけじゃねえ、最近のお前！ どうかおかしいんじゃないのかあ。」

「べ、別に、おかしく無いわよ！ ふ、普通よ、極普通。」

「いや！ でつたいに、違う！ 良く溜め息ばっかしつくし、飯を食いに行つても残すし、今までのルイズじゃ！ 考えられねえーんだよ。」。

「何よ、それ、私だつてゝ溜め息ぐらいつくし、調子が悪ければ、ご飯だつて残すわよ。」

「なあゝルイズ。」

「なによ。」

「何か悩み事があるなら相談してくれ無いか、俺じゃ頼り無いかもしれないが、俺ルイズの事が凄く心配なんだよーふつと何処かに消えて仕舞いそうぞ。」

そう才人に言われてギクつとしたルイズだった。

「そそそんな事有るわけ無いわよ！　。」

「そうか其なら良いんだ、でも、もしも悩み事が出来たら俺に相談してくれたら、俺凄く嬉しいんだ。」

「……判ったわ、もしも悩み事が出来たら、一番先にサイトに相談するわ、来れでいい。」

「有り難う、絶対に相談してくれ！　。」

そう言っただけで安心する才人であった。

研究所への帰り道のルイズ

（サイトが凄く私の事を心配してくれてたなんて……とっても嬉しい……。）

（だからこそ、絶対に！　サイトにはこんな重たい秘密を知られる訳にはいかない、知れば心が真っ直ぐな人だから悩んで、悩んで、

苦しむわ。)

(…其に後先考えない処があるから、二人いしょっに行こう何て言  
い出しかね無い人だから…) )

才人には、真実を告げずにハルケギニアに還ろうと、思っていたル  
イズで有った。

それから日にちは立ち、ルイズと博士はハルケギニアへの帰還準備  
に向けて、各種装置の製作や魔力制御の向上に勤しむ日々を過ごし  
ていた。

(明日は地球世界での私の誕生日を迎えるのね、ふふ……博士に重  
大事を告げられて一年近く経つのね、あれから色々な事があつたわ、  
サイトの受験勉強の面倒を見たり、海へ泳ぎに行った時なんて、初  
めて見る私の水着姿に顔を少し朱くして照れていたときは可愛いか  
つたわ)

才人との想い出を作る為に方々に出掛けた日々を思い出していた、  
ルイズだった。

(……サイトとの楽しい日々も後二日で終るのね……)

ハルケギニアへの帰還の儀式は、三日後の早朝に奥秩父の博士の別

莊で行う事に成っていた。

（博士にはこの十年、何処の誰ともしれない、見ず知らずの私を育ててくれて、学校に通わせてくれたり、各種知識や常識、道徳観等の人としての生き方を教えてくれたし、其だけで無く私をハルケギニアに還してもくれるし、本当に博士には感謝仕切れ無い程の恩を請けたのに、其を返す事が出来ない何てトリステインの貴族としては、忸怩たる思いだわ。）

（その事を博士に言うと

「僕が好きでした事だから、ルイズは気にする事は無く、堂々と胸を張ってハルケギニアに還ると良いよ。」

そう言ってくれた博士に私は抱き着いて涙を流しながら静に泣いていた、何時までも……。）

続く。

二話ルイズの地球での十年その二（後書き）

次で地球編を終わらせたいと、

思いますが

どう成るのは

作者もまだ判りませんか？

三話ルイズの地球での十年その三(前書き)

漸く書き上げました。

### 三話ルイズの地球での十年その三

ルイズの地球世界での誕生日を明日に控えた日のある街のファミレスの店内

「なあ、ルイズもう喰わねえのか」

「チヨット食欲が無くて。」

「残すのならそのパン喰っても良いか」。

「もう、サイトたっら行儀悪いわよ！でも、まあ、食べても良いわよ」。

「へへへ〜〜悪いな〜ルイズ。サンキュ」。

「それにしても良く食べるわね〜感心するわ！」。

「そりゃあ師匠に、あんだけやられちゃあなあ〜腹がすくつてもんだ！」。

「私達だって  
決して弱くわないけど。」

「そりゃなあ、俺達のレベルは高校のトップレベルとかわらねえからな。」

ふたりとも気づいていないが、実は高校トップレベル処が世界トップレベルなのであった。

「そうよね先生が強すぎるのよ！。」

「あれは化け物だ、一瞬にして詰め手来る足捌き、剣速の凄さ何て人間技じゃ無いからな。」

「そうそう知ってるサイト、先生って若い頃武者修行と称して世界中を放浪して暴れまくり、各地で伝説を遺したらしいのよ！。」

「とんでもねえ〜オッサンだな〜。」

「全くそうよね〜歩く人間火薬庫だわあれは！。」

そう言って笑い合うルイズと才人。



(ルイズ心の声)

(その早瀬平八郎先生は博士の親友で、私の事を博士以外で知っている唯一の人であり、剣術の師匠でもある先生に五年間の稽古の御礼を申し上げてハルゲギニアに還る事を告げたの。)

(そう言つと先生は

「還るのか、向こうに行つても剣術の修行は怠るなよ！ あの馬鹿には告げずに行くのか。」

そう言つた先生の顔は少し淋しそうだった……。)

「おおい、ルイズ聞いているのかあ。」

「……えっ、何か言つた、サイト。」

「何だよ俺の話しを聞いてなかったのかあ！。」

「ごめんね、考え事をしていたから。」

「何だよせつかく明日はルイズの誕生日と俺達の高校入学を祝つて、何処かに遊びに行こうかとおもつて聞いてみたのに！。」

「悪かったわ、そのお詫びにどうせ遊びに行くなら、おおお奥秩父に在る。博士のの、別荘に來ない、土日のととと泊まりがけで、ももも勿論、二人切りよ！」

「ルル……ルイズさんそれって……まさか、あ、あれをコウシテ、ナ、ナニヲ、くんずホグレッツ、OKの、アレの事ですか？」

「もう、声が大きいわよ、周囲に聞こえてしまっじゃないのよ！」

「ほ、本気なんだな！ 今更、ダメでしたなんて事は、無しだからなあー。」

「……うううるさいのよ！ だから、大声で喋るなあーと言ってんでしょうが！」

「このーおお馬鹿工口犬がああー。」

そう叫び、全身を不死鳥さながらの紅蓮の炎のオーラを纏いしルイズが、物凄くテンションを上げて喜んでいる才人に襲い掛かり、まずはドロップキックを鮮やかに決め、才人を床にはいつくばらせ、そこを素早く四のじ固めに持ち込み更には、コブラツイストやキン肉バスター、キン肉ドライバー等、数々の技を繰り出し才人を阿鼻叫喚の地獄へと叩き込むルイズさんであったのでした。

(女を怒らせると怖い)。

〳〵翌日のある街の駅前の広場〳〵

「おおい、コッチ、コッチ。」

「何よサイト、朝早くから情けない声出して、もっとシャキッと  
なさいよ！シャキッと。」

「何言つてやがる、これは昨日お前が俺を地獄のフルボッコにして  
くれた後遺症じゃないかあー。」

「な、なによ、あれはサイトが悪いんだから！。」

(店をメチャクチャにした私達は、あれから店の人達に物凄く叱ら  
れ弁償する嵌になり、博士に事情を話してお金を払って貰い、その  
事で御免なさいと謝ると

「別に気にする事はないんだよルイズ、次から気をつけてくれれば  
良い事だから。」  
と、笑ってそう言ってくれる博士だけど、私は申し訳なさでいっぱ  
いなのに、

コイツときたら朝から能天気な顔して少しも反省してないわね！。  
)

（昨日はやり過ぎたと思っていたのに、こんな事ならもつと徹底的にすればよかったわ！。）」

そう思うとルイズは不機嫌になり、奥秩父に向かう電車の車内でギヤアギヤア、周囲の迷惑も考えずうるさい二人だった。

まだ不機嫌だったルイズは、才人を連れて奥秩父の名勝地を散策して歩き昼には秩父の名物料理を食べた頃には、機嫌も直していたルイズさんでした？。

食後のデザートを食べて店を出た二人は、目的地の敷島博士の別荘目指し歩いて行くのでした。

春先のまだ少し寒い中、木漏れ日の陽射しを浴びて歩く小道近くに流れる小川のせせらぎを聴きながら歩いていると、小さな坂道を登る先に、周りを緑豊かな景色に囲まれた、普通より少し大きくて瀟洒な建物それが敷島博士の別荘であった。

「へえ、此処が敷島博士の別荘なのかあ。」

「そうよ、ステキな所でしょう。」

そういつて、前よりも少しだけ成長したが、まだまだペタンコの胸を張って誇らしそうにしていたルイズさん。

(ムムム……何か非常に失礼な事を言われた気がするわね！。)

ルイズが才人を伴って暖炉のある広いリビングのふかふかのソファに二人仲良く座ると才人が。

「スゲーなあ、敷島博士の別荘はく歩く度に沈むジユウタンなんて俺、初めてだよ！ このソファくだって、ふかふかだしなあ。」

「そうよ！ 別荘の建物自体は博士が設計図を引き、それを国内の一流メーカーが建てたのよ。」

実は博士は建築士の免許を所持していて、それで設計図を引けたのであった。

「内装はヨーロッパの有名インテリアデザイナーに頼んだし、暖炉を筆頭に家具や寝具、キッチン、照明等も北欧の一流メーカーから輸入したんだからく良いでしょう。」

そういつてまたもやペタンコの胸を張って、別荘の事なのか博士の事なのか、わかりにくい物が凄く自慢していたルイズさんであっ

た。

(……また、物凄く失礼な事を言われた気がするわ!。)

それからルイズは才人を連れて別荘内を案内して廻ると、リビングで二人でお茶を飲み午後のひと時を楽しんでいた。

(……もう何をしているのよ! 私たっら此処まできながらーあと一歩の決断がつかないなんて……。)

此処まできながらまだ、決心できないルイズ……。

(もう! サイトたっら、何時もはしつこいくらいにキスしようとしたり身体を抱きしめてこようととして来るくせにーさっきから顔を赤らめてモジモジして! 意気地が無いのよー男のくせに!。)

才人のヘタレぶりに、ルイズの心の中は強風が吹き荒れようとしていたのですが。

(……このままじゃ何時までたっても埒があかないわね、シヨウガナイか。)

）（サイトはヘタレだし私の方からアプローチするしかないわね〜）

「ねえ〜サ、サイト〜、おおおおおお風呂ににに、ははは入らない二人切りで！」

頬を朱く染め恥ずかしそうにしながら才人にそう言ったルイズさん！

その言葉を聞いた才人は。

「ほほほ本気ですか〜ルルルルイズさん？」

顔を真っ赤にしてルイズに聞き返す根性無しへのタレの才人だった。

「こここんな恥ずかしい事、おおおおお女の子の方から言わせないでよ、いいいいいい一緒に入るのが嫌なら別、別に良いのよ、わわわ私としてわね？」

「いはいえ有り難く二人一緒に入らせて頂きますルイズ様。

コウシテ一人は風呂場に向かうのであった……やれやれ。

続く。



三話ルイズの地球での十年その三（後書き）

恋愛部分を書き上げるのは、  
難しい。

## 四話ルイズの地球での十年その四（前書き）

こんな駄文でも、楽しみにしていた方達に、四話を楽しんでください。

（今回で地球編は終了します。次回からハルケギニア編です。）

#### 四話ルイズの地球での十年その四

「〜心臓をドキドキさせながら、風呂場への廊下を静かに歩いて行くルイズと才人〜」。

「ル、ルイズさん、ささ先にはいつておく、おくんなまし〜さな…」。

「もう、サイトたつら変な話しかたして！ 緊張してるのかしら〜？。」。

「いや別に、キキキンチヨウなんかしてね〜よ？。」。

そう強がり言いながらも。肩は震え脚もガクガクブルブルなヘタレで、情けな〜い才人であった。

結局はルイズが渋る才人を強引に引きずって、脱衣所に入ってしまった。

「あの〜ルイズさんマジマジと見られると。恥ずかしいんですがあ〜」。

「…別に良いでしょうコレカラ二人一緒に入るんだから、ね。」。

「そうおっしやいまするルイズさん。まだ服を脱いでいないんです  
が。」

「ああああああなたが脱いだら、私もすぐに脱ぐわよ！ だだだ  
から最後に残った、そのパンツ！ さっさと脱ぎなさいよー！」

そういつて、眼を血走らせて才人の履いているパンツを脱がせるル  
イズ。

これだから女は怖い怖い。

才人を後ろ向きにさせて、服を脱いで生まれたままの姿に成るルイ  
ズ。

「ルルルイズ、もう前を向いても良いか？」

「…ええ前を向いても良いわよ。」

そう言われて才人が見たのは、流れるようにウェーブがかったピン  
クブロンドのしなやかな髪に、鳶色の潤んだ瞳、朱く染めた頬に整  
った鼻筋に小さな薄紅色の可愛い唇と、まるでフランス人形のよ

うな顔。

更に両手で隠す形の良い小さな胸に可愛いお臍。下に行くと髪と同じピンク色の若草にアサリのスジ、スラツとした細くて長い脚と身体全体が華奢な物凄い美少女がそこにいた。

「き、綺麗だあ……ルイズ。」

「あああああまり見ないでよ〜はは恥ずかしいんだから！」

「……そそそれよりも。サササイトの方こそ隠さなくて良いの、ブ、ブラブラした物が見えているのだけど……。」

「おおおお前〜み見てんじゃあねえよー！」

「別に良いじゃ無い。か、可愛いらしいの持っているのだから。」

「ハア〜フウ〜。」

ルイズに股間が可愛い良いと言われ。落ち込む才人。

気を取り直してルイズと一緒に風呂場に入る才人。

「うわあ〜俺ん家のフロと違って広くて天井が高く明るくて。それに凄くきれいだ〜。」

「ウフフ〜説明口調有難う。2年前に改装して浴槽は大理石で大人6人が余裕で入れる程広いし。それにオール電化だから24時間何時でもすぐに入れるのよ〜。」

それからルイズと才人は、二人で身体を洗いあって〜ウフ、キャアキャアな事を繰り広げたのであった〜チクシヨウ〜羨ましい。

たっぷり楽しんだ二人は。風呂場を出てリビングのソファで寛ぐのだが、突然 才人が？。

「あのなあ… ルイズ。」

「なあに、サイト改まって何かあるの〜。」

ごくつと、唾を飲み込み、覚悟を決めた才人は。

「今日はルイズの誕生日だから、俺今までのお年玉や冬休みのバイトして貯めた金でルイズのバースデープレゼント買ったんだ〜。」

「

そうやって才人は

綺麗な包みにピンクのリボンを施した品物をルイズに手渡した。

「これを私に買ってくれたの。」

「そうだルイズ早く開けて見てくれ。」

早速、品物の中を開けて見ると金の鎖にプラチナの台座に嵌め込まれた、粒は小さいがキラキラ光り輝く綺麗なピンクダイヤがあった。

「……凄く嬉しい……有り難うサイト。」

そうやって、才人の胸に飛び込み少し嬉し泣きの瞳でサイトを見つめるルイズだった。

「こんなに喜んでくれるルイズを見て、俺もスゲー嬉しいんだ！」

そうやって抱きしめあって。キスをする二人だった。

( サイトが私にこんなにも、ステキなピンクダイヤのペンダントを

買ってくれた)

(踊り出しそうに成るくらい物凄く嬉しい。サイトから貰ったこのペンダント肌身離さず一生手放さないわ!。)

ルイズに取っては想定外の嬉しいサプライズでしたが、あとは……。

「オオオオオレ、ルルルイズのことが好きなんだ。いやマジで、真剣にお前の事が大好きなんだー! 今からルイズの大切なモノを貰うから、覚悟してくれ!。」

「……いいいいいいわ、私も覚悟していたし、…私の初めてをサイトにあげても良いわよ! ……………。」

「ルイズー。」

そう言つて才人はルイズを抱き上げて、所謂・お姫様ダッコをして。寢室に向かう才人であった。

寢室に入ると一先ずはルイズをベッドに座らせ。着ていた服と下着を脱がせ、生まれたままの姿にすると。才人も同じ様に脱いで裸になり、ルイズを抱きしめながら、ベッドの上に押し倒す才人であった。



ディープなキス等。色んな下準備をしてさあコレカラ大事な事に及ぼすと、例のアレを使おうとしていた才人にルイズは、……？。

「チョット待つてサイト…。」

「怖じけづいたのかルイズ！ 此処までして、今更止まらないぞ！俺の怒り棒は！。」

「違うの〜今日は〜超〜安全日だから〜大丈夫なの〜私〜肌が弱いから〜アレを使わないで欲しいの〜お・ね・が・い・ね。」

普段と全く違う程の可憐な仕種と声に才人は…？。

「本当に良いのか、生でしても。」

「うん、良いの〜。」

そう言って頷くルイズ。

（ごめんね騙して。本当は超危険日なの、明後日にハルケギニアに

還つたら、サイトには二度と逢えないと思う。それだからこそ私はサイトとの確かな愛の絆がどうしても欲しかったの。

）

（そうしなければコレカラー生、愛しいサイトに逢えなくなると思うと、気が狂う程辛くて生きて行けそうにないから……。 ）

ルイズの思惑も知らない憐れなサイトは、ルイズと朝方までとても深く激しく愛おしむ様に愛しあっていたのだった。 ……。

仲良く抱きしめあう様に眠っていた二人が起きたのは、もう夕方頃であった。

熱いシャワーを浴びた二人はルイズが簡単な？ 夕食を用意して二人楽しく食べた後は……。

「俺は今から家に帰るけど、ルイズはどうする？」

「私は、あした此処で用事が有るから今日も泊まるわ。後で博士も来るから心配しなくても大丈夫だからね。」

そう言つてルイズは才人を安心させて送り出す様にする。

別荘の門のところまで才人を見送りにきたルイズは……。

「気をつけて帰つてね。それから途中寄り道して遅くなつて、お父さんに心配かけては駄目だからね！ サイト。」

「バー口。ルイズに言われなくても、チャント判つてるよ。俺も子供じゃ無いんだからな。」

「うふふ……確かに、アソコは子供じゃ無かつたわね。」

「女の子がそんな言葉をいつちや駄目なんだよおー。」

「そんなに怒らないで〜冗談よ。冗談。」

「冗談なら良いんだけどな？」

「二三日の内に連絡するからな〜入学式までは、まだまだ遊べるかな、じゃあなルイズ。」

（その頃には私はハルケギニアに還つていてこの世界には居ないの

よ。サイト……。)

「サヨナラ……。サイト。」

そう言っつてサイトの姿が見えなくなる迄見送つた後。

別荘に入りリビングのソファで静かに涙を流し、声を押し殺して泣いていた、ルイズだった……。

ルイズが泣き止み。暫くすると、いつの間にか敷島博士がリビングに着ていた。

「博士……。いつの間に……。」

涙を拭きながら博士に問い掛けた、ルイズだった。

「才人君との別れは済んだのかい。ルイズ……。」

「……そうです……終わりました……」

未練が無いと言ったら、嘘に成るけども……覚悟を決めたつもりでしたけど……けど……こんなに苦しいなんて……私……。」

今にも泣き出しそんな顔をしながら、博士に苦しい気持ちを打ち明

けたルイズに、博士は静に近寄りそつと手を握り、真っ直ぐに優しい瞳をして、穏やかな声でルイズに……。

「ルイズ、泣きたいときは我慢する事は無く、泣きたければ泣けば良いんだよ。そして明日は良い笑顔でハルケギニアに還つて欲しいと思つているんだ。ルイズには！」。

「…博士…。」

そう言つて博士の胸を借りて、泣きつづけるルイズでした。

く早朝の奥秩父く

三月上旬の春先とはいえ、まだかなり寒かったが、今日は雲ひとつ無い快晴の青空が広がっていた此処、敷島博士の別荘ではある特別な儀式を行う為の準備をしていた最中であつた。

「博士！ この支柱はこの場所に設置して良いですか。」

「いや、ルイズその支柱はあと北へ二センチ程動かしてくれないか。」

「判りました。あと二センチ北ですね、博士。」

こうしてルイズと敷島博士は。別荘の裏庭一帯を使って、ハルケギニアに帰還する為の簡易型の魔法の結界を築く為に必要な、各種装置（所謂増幅装置）を、ルイズと博士は設置していったのである。

「これで統べて準備は整いましたね。後は、ルイズとハルケギニアに持って行く荷物は全部リヤカーに積み込みましたか。」

「はい！ 博士と荷物は全部頑丈に梱包してリヤカーに積み込みましたから。」

そうやって博士に返事していた。ルイズの荷物のリストはと言うと……。

各種。技術書 医学書 薬学書 各学術書等の書籍や。ルイズが地球に来た時の服と靴そして大事な杖。小型の太陽光パネル六枚に小型充電器二台 小型発電器二台、サンプルのガソリンと灯油ふた瓶、各種医薬品セットのケース一つ 各種調味料多数 魚。肉。フルーツ等の缶詰セット多数 インスタントカレー五十個 インスタントの牛丼五十個 チョコラーメン二ケース 真空パックのご飯百個 各種お菓子（大好きなチョコレート等）缶ジュースが二ケース、缶ビールが二ケース、日本酒2？が五パック、各種焼酎五本、高級ブランドデー五本、高級ウィスキー五本、高級フランス産ワイン五本、おまけにウォッカ二本、テキーラ二本、各種類の酒の摘み（燻製のハム、サラミ、各種のチーズ、さきいか、いかくん、チーズ鱈、カ

ワハギ、各種豆類）、煙草二百カートン、使い捨てライター二百個、小型マツチ箱二万個、各種スキンケアアセット多数、高級化粧品十セット、その他日用品多数、カセットコンロ二台、小型CDラジカセ一台、デジタルオーディオプレーヤー三個、カセットボンベ多数、塩と砂糖と胡椒が多数、上質小麦粉と魚沼産コシヒカリ多数、ルイズの服と下着とパジャマと靴が多数、各種筆記用具多数、高級万年筆十本、更にお気に入りの漫画本や恋愛物文庫小説、秘密の写真集等？ 小型折りたたみ自転車一台、ノートパソコン二台、デジタルビデオカメラ一台、一眼レフデジタルカメラ一台、コンパクトデジタルカメラ一台、小型プリンター一台、ポータブルブルーレイプレーヤー一台、ポータブルDVDプレーヤー一台、携帯電話一台、映画。アニメ。ドラマ等のブルーレイやDVDソフト多数（極秘ソフト有り） 特注高級機械式腕時計一個、ソーラ電波腕時計十個、（特殊な品物・ウルサーPPK一丁。九ミリ32ACP弾一千四百発日本刀一本・備前長船雪風）等の品物が多数……ルイズさん。できるだけ欲張りなんですか？。

「今、私の悪口を言われた気がするわね？」

アブナイ・アブナイ……。

統べての準備が完了して後はハルケギニアへの帰還の儀式を残すだけだった。

ルイズと博士は、最後に別れの挨拶をしていた。

「博士…十年もの長い間育てて頂き、更にこの地球世界で生きて行く為の知識や常識等も教えてくださり、数々の思い出も下さり幸せでした。最後に博士の娘 敷島ルイズとして、本当に有り難うございました……。」

「ルイズ……親が娘を育てるのは当然の事なんだよ、僕の方こそこの十年君が側にいてくれてどんなに幸せだったか、だから僕こそ言いたい有り難うルイズ……。」

「はか…いえ、お父さん……。」

そう言って涙ぐみ。博士の胸に抱き着くルイズであった。

最後の別れも済まして。帰還の儀式を始めるルイズと博士。

「これから帰還の儀式を始めるから、用意して下さいルイズー。」

「はい！判りました博士。」

敷島博士に言われて用意していた。リヤカーを繋いだ特注のマウンテンバイクに跨がり杖として契約した。金の装飾を施した頑丈な造りの万年筆を取出していた。



「良いですかルイズ、僕がカウント・スリーから始めるから、カウントゼロで増幅装置のスイッチを入れる時にルイズの持っている魔力を最大で上空に向けて放って欲しいー。」

「はい！ 博士何時でも始めてくださいー。」

「…では。始めます…スリー・ツー・ワン・ゼロ・開始…………。」

敷島博士のカウントゼロの声でルイズは。全精神力を込めて魔法を上空に向けて放つ。

増幅装置のスイッチを入れた敷島博士も。ルイズと同じタイミングで上空に向けて超能力の力を放っていた。

結界の内に有る・増幅装置によりルイズの魔法の力と敷島博士の超能力の力が増幅されて合わさった時。奇跡が起こりルイズの目前に光り輝く鏡のようなゲートが現れた。ゲートの向こうは。九十九・九%の確率？ でハルケギニア世界のヴァリエール公爵家に繋がっている………筈である。

「ゲートが何時閉じるか判らないからすぐにゲートを潜りなさいルイズ。」

「元気で暮らしてくださいルイズ……。」

そう言った敷島博士は。サヨナラは言わず、ただ優しい瞳でルイズを見つめるだけだった。

「有り難う博士……さよなら……愛してるサイトオオオオオオオオオオオオオオオオ……。」

最後に愛しい才人の名前を叫んで、リヤカーを繋いだマウンテンバイクに乗っていたルイズは。光り輝く鏡に吸い込まれる様に消えて行ったのでした……。

続く。

## 四話ルイズの地球での十年その四（後書き）

漸く地球編が、終わりました。次からは、ハルケギニア編を書き上げていきます。

五話ヴァリエール家に選<sup>が</sup>って来たルイズその一(前書き)

今回からハルゲギニア編<sup>が</sup>、始まります!。

## 五話ヴァリエール家に還って来たルイズその一

くくく 此処はハルゲギニア：トリステイン王国・ヴァルエル公爵邸に在 池の辺

小鳥達が囀る声がする。

何時もと同じ朝が始まる筈であつたが、突然辺り一帯を眩しい光が覆い隠したと思つたところ。

バシュツと大きな音が鳴つたところから、忽然と光の中からハルゲギニアでは物凄く奇妙な形をした。

後ろに大量の物を積んだ荷車を繋いだ乗り物？が現れた。くくく

乗り物？には、人が跨がっていた。

その女性らしき人を見てみると。

服装は薄い水色のシンプルなブラウスに淡いベージュの上着を羽織り、雪の様に真っ白な丈の短いスカートを履き白のニーソックスに赤のラインを施しピンクの紐が有る白い靴を履いている。

髪はウェーブがかつた流れる様なピンクブロンドな長い髪に、つぶらな鳶色の瞳スーと、整つた鼻筋、小さな薄紅色の唇と。

凄く綺麗な顔立ちに細い首筋、胸は標準より少しだけ小さめ。

長い手足に、少しクビレた腰、小振りなお尻と。

(上からT161B80W55H79) 極上の部類に属する。

歳は14か15才頃のフランス人形の様な、美少女だった。

『……此処は……。』（ルイズ心の声）

（十年ぶりだから、確信は出来ないけど……）。

確かに此場所には見覚えが在わね〜え〜と、あっちに見えるのが池よね〜）

（まだあるのかしら小さな頃まだ。

魔法が上手く出来なくて、母様達にしかられては、上から毛布を被り隠れていたあの小さなボートは……。）

（そうして隠れていると、必ずあの優しい笑顔をした男の人が捜しに来てくれたのよね〜）

ルイズが昔の色々な出来事を思っで感慨深げにしていた所：

池の辺りに突如強力な光が輝き、すぐに消えたのを訝しんだ。

一人のメイドが近付いて見てみると？そこには、荷物を積んだ怪しげな乗り物らしいのに跨がって、辺りを見回している？見知らぬ少女がいたのを気付いたメイドは大声で……。

「だ、だ誰かあああああああああー！此処にいいいいーあ、怪しい者がいますー誰かー早くー来て下さいいいー。」

突如近くから大声がして、ビックリしたルイズは。

声が聞こえて来る方を見ると、一人のメイドがルイズを指差して、何やら酷く失礼な言を、大声で喚いているのを聞いたルイズは大きな声でそのメイドに向けて、大きく怒鳴っていた。

『チョットーそのメイドー何失礼な言を言っているのよーこの、私を誰だと思っているのよー。』

綺麗な顔を赤くしながら、こちらに向かって怒鳴っている少女に。

メイドは気後れして、今にも泣き出しそうに為りながらも、弱々しい声でルイズに……。

「そそそうは、い、言われましても、あ、ああ貴女見たいな人？見たことも無ければ聞いた事も、あああありません……。」

『何ですってーこここここのメイドはーあああんた何て、話しにならないわねーあんた見たいなシタツパでは無い、此处で一番偉い人を呼びなさい。』

さあ早く行きなさいよ!。』

そうしてルイズに、物凄い剣幕で怒鳴られたメイドは。

涙を流して、泣きながら、館の方へ走り去って行った。

『…全く、十年ぶりに漸く還って来たと思ったら！メイドの質も、下がったわね。』

その頃ヴァリエール家邸内では、今日も。

何時もと同じ様に、朝早くから使用人達が起き出し、邸内の清掃をする者と。

広大な庭を清掃する者がテキパキと仕事をしていた。

後はメイド達が邸内の各室を廻り、各種衣類等の洗濯物が入っているカゴを回収したり。

公爵夫妻を粗相がない様に静かに起こし、身支度を整えさせていた頃に。

何処から聞こえて来るのか分からないが、若い女性が大きな声を出して、助けを求めている。

その声が聞こえる範囲内に居た使用人及び家臣の警備隊員達が何事が起きたのかと。

すぐに声が聞こえて来る場所に向けて、大勢の者が駆け付けていった。



先頭に立って駆け付けている或若い警備隊員が、前方から凄い勢いでメイドが走って来るので、止めて事情を聞いてみる。

「おい、何が有ったんだ！」

「いいいい池の辺りに、ひひ光が、大きな光が輝いていたので、行って見ると、そそそこに、変な荷車と見知らぬ少女が居たんです。」

「それでお前は何もせずに、逃げてきたのか！」

そう言って怒鳴る、若い警備隊員にメイドは……。

「いえ、逃げてきた訳では無いんです。

その少女に何者かと聞きましたが、シタツパ何かに様は無い、此処で一番偉い人を呼んでこいと。

喚いていて、もうこれは無理だと思い誰かを呼びに行く途中でした……。」

「何だとー！此処で一番は公爵様ではないか！そんな誰とも分からない、怪しげな者を逢わせられる訳は無いー！」

そう言った、若い警備隊員はどうするか思索していると。

そこに追い付いた警備隊副隊長が若い警備隊員とメイドから事情を聞くとメイドには邸内に居る、執事長のジェロームに事情を知らせに行かせると。

若い警備隊員と更に追い付いて来た他の隊員達を連れて、怪しい少女が居る場所に向かって行く。

警備隊副隊長の指示で邸内の何処かに居る、ジェローム執事長を漸く捜し出したメイドは池の辺りでの出来事を包み隠さず、総て話した。

それを黙って最後まで聞いていた。

ジェローム執事長は今聞いていた話しに、何か気になる事が有りメイドにその部分を詳しく尋ねる。

「その少女は確かに歳は14か15で、容姿はピンクブロンドの髪を腰まで伸ばし、鳶色の瞳をした華奢な美少女だったと…。」

メイドに詳しく聞いたジェロームは、何かを確信した様な顔をして…。

「お前は今すぐにカリー又奥様の寝室に向かい、池での出来事とくに少女の歳と容姿を詳しく話さない。」

そう言つてメイドを至急に、公爵夫人の寝室へ伺わせたジェロームは。

ヴァリエール公爵にこの重大事を知らせる為に足早に、公爵の寝室へ歩いて行くのであつた……。

その頃、池の辺ではルイズを確認した警備隊達は副隊長の指示の下、静かに杖を抜いて何時でもすぐに、魔法を放てる様に準備してゆくりとルイズに向かつて、

近付いて行くのだった。

メイド以外に、漸く話しが判りそうな者達が来たと思つていたが、近付く者達全員が杖を抜いて、隙が無く構えているのを見たルイズはビクツトして、少し慌てる様に近付く者達に、大きな声で呼び掛ける。

『チヨ、チヨツト待つて、ななな何よ、杖を向けて！わわ私は決して、ああ怪しい者じゃあ無いわよー？だだだから、杖を仕舞つてくれないかしら、ね、お願いだから。』

そう言つたルイズでしたが……。

この場所に一番先に駆け付け様としていた。

若い警備隊員がルイズに向けて大声で……。

『何を言っただがるー！何処の世界に！自分で怪しく無い何てー  
ー寝言を言う奴が居るんだああ！馬鹿も休みやすみに言えええ  
えよ！このペタンコのーチンチクリンの！小便臭い小娘がー！』

そう言った若い警備隊員（実はマザコンの上に、大の熟女好きなのでルイズは全くの守備範囲外だから、容赦をしなかった）の罵倒にぶちギレそうになるのも。

何とかギリギリ迄我慢して、ルイズを罵倒していた若い警備隊員に向けて、ルイズは大きい声を出して言ったのでした……。

『ああ貴方、いい今、わわ私に向かって言った、ぶ無礼な事も、きよ、今日は機嫌がとても良いので、ゆ許して差し上げますわ〜。』

ルイズにそう言われた。

若い警備隊員はまた、ルイズに向けて……。

『何を言っただがるー！何処の貴族のご令嬢見たいな！口ぶりでー言っている！この、平民の小娘がーいい加減にしやがれー！』

また、暴言を吐かれたルイズは今度こそ、我慢の限界を超えていた。

眼は血走り髪は波打ち、身体全体からほの暗い蒼い焰のオーラがゴウゴウと逆巻きながら、立ち上っていた。

その時……。

ルイズを罵倒していた若い警備隊員以外の、何かを思案中の副隊長を除く残りの警備隊員達は、たとえ平民の不審者とはいえ、どう見ても十代前半の少女に向けて大声で罵倒を浴びせる。

同僚に唾然としていた。

今まで何かを思案していた副警備隊長が、ルイズに罵倒を浴びせていた。

若い警備隊員に向けて大声で……。

「いい加減にしないかーアラン！何時も言っているだろう。」

汚い言葉や態度は改めると。

お前一人で済む問題では無いのだ。

我々警備隊員全体の、いや、この大恩が有るヴァリエール公爵家の品位が問われるのだ。

お前は公爵様に恥をかかせても、良いと思っているのかー！。」

警備隊副隊長に厳しく叱責された、  
アランは言い訳を言おうとしていたが、警備隊副隊長の更なる叱責により、がっくと肩を落として警備隊員達の後ろに廻り大人しくしていた。

アランへの叱責が終った。

警備隊副隊長はルイズに向けて……。

その頃ルイズは。

(ルイズ心の声)

(……あっちの失礼な奴に、あの人が私の言いたい事を言って、叱ってくれたから何とか怒りが収まってきたから、後はあの人にフルネームを告げたら、信じてくれそうだし。)

ルイズが色んな事を思案していると、ルイズに警備隊副隊長が語りかけてきた。

「お嬢さん、先程は部下の隊員がとても失礼な、暴言を吐きまして申し訳有りません。」

部下に代わってこのポルトス・ド・レイノーが、心よりのお詫び申し上げます!。」

『いえ、もう私は気にはしていませんから。』

「そう言っただけだとこちらと仕手も有り難いことです。」

お嬢さん失礼ですが、お名前を教えてくださいませんか。」

『私の名前をですか、ミスターレイノーになら教えてくださいても宜しいですよ。私もこの名前をハルゲギニアで名乗るのは。』

十年ぶりですから緊張します。

では今から名乗らせて頂きます。ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールと申します。』

そう言っただけでフルネームを名乗ってすぐに、警備隊副隊長のポルトス・ド・レイノーを含めた警備隊員に向かつて、それは見事に完璧な貴族達にする（ルイズは日本で暮らしていた、十年の間にルイズがハルゲギニアに還った後に恥ずかしい思いをしない様に。）」

ヨーロッパの上流階級者が使う挨拶を含めた総てのマナーを、敷島博士が厳しく教え込ませていたのでした。（正式な挨拶をしたルイズであった。）

ルイズが、それは見事な位、優雅にして華麗で鮮やかな、挨拶をしたのを見た、警備隊員達の中から、

「ほう、中々お目にかかれ無い程、見事な挨拶では無いかー。」

名の知れない、警備隊員からの称賛に、ルイズは。

『お褒めの言葉を賜り、ルイズ・フランソワーズ、嬉しく思います。

』

そう言って、警備隊員達に向けて、極上の微笑みをして見せた、ルイズでした。

それを見た、約一名を除く警備隊員達を魅了させたルイズ様（これが、後にハルゲギニア中に名を轟かせた、熱狂的なルイズ・フランソワーズ親衛隊と言う、ファンクラブが誕生した瞬間であったと、同時に才人の死亡フラグの確定でもあった？。）でした。

ルイズの微笑みにより、半分任務を放り出し掛ける。

警備隊員達（一名除く）を置いて、警備隊副隊長のポルトス・ド・レイノーはルイズの前まで来ると、ひざまずき、恭しく話し掛けた。

「…や、やはり……ルイズ・フランソワーズ様に、ございましたか



「いい、生きてよく、ご無事で何よりで、このレイノー嬉しく思います。」

先程ルイズ様を見たときには、まさかとは思いましたが、あまりにも、幼い頃の面影が有りました。

それで、お名を伺ったのでございます…。」

そう言って、レイノーは感極まり、涙ぐむ（むさ苦しいオッサンで有った）それを見たルイズは、顔が引き攣り少し後ろへ退いていた…？。

『そんなに、小さい頃の顔立ちが残っているの！チョット複雑な気分よね〜ハア…………。』

少し落胆するルイズだった。

（チョットだけ、シヨックなのよね〜顔立ちって、十年過ぎてても変わらないモノなのかしら〜私としては、立派なレディーに成長したと思っていたのよね〜。）

ルイズが自分の顔について、心中で色々考え事をしていら、レイノーが…………。

「ルイズ様―漸く十年ぶりに、ヴァリエール家に還って来られ、お疲れとは存じますが、今暫くのお待ちを申し上げます。」

先程、使いの者を送りましたので、すぐにジエローム殿が駆け付け参りましょう。」

『え、ジエロームだけなの！母様や父様それに、姉様達は来ないの……。』

そう言っつて、淋しそうなルイズですが。

「いえ、ジエローム殿ならすぐに気付き、公爵様とカリーヌ奥様に連絡されましょう。」

そうなれば、すぐに来られましょう。」

その頃、ヴァリエール邸内の在場所では……。

此処は地獄の閻魔様より、恐ろしい 烈風カリン ことヴァリエール公爵夫人、カリーヌ・デジレ・ド・マイヤールの寝室で在。

「何か物凄く失礼な言を、言われた気がします。」

此処は一つエアカッターをお見舞いして上げましょうか。」

そう言っつて、満面の笑みをして何処かを見つめ、杖を向けよ様とされています、それだけは、御勘弁を……もう二度と申しませんので、

平に平にご容赦を……。

「さてと、冗談は此処迄にして。」

怖い冗談ですねカリン様……。

「何か胸騒ぎがして、今日は何時よりも早く起きましたが、私に取って重要な事が起こる気がします。」

私の勘は外れませんから。」

独り言を言うカリーンの寝室にノックの音が響き渡る。

「…入りなさい。」

入室を許された、メイドが慌てる様にして入って来たのを見た。

カリーンは眉をヒソメきつい口調でメイドに……。

「何ですか！朝早くから、騒々しい！常日頃から言っていますね。ヴァリエール家のメイドとして、誇りを持って沈着冷静に行動しなさいと！。」

カリーンに叱責されたメイドは。

目まぐるしい程の出来事の連続で、限界を超え掛けていた処に、カリーヌの叱責がトドメと為り憐れなメイドは、カリーヌの目前で涙を流して泣き出しの有る。  
これには流石のカリーヌでも……。

「……もう、泣くのは止めなさい、一体何が有ったのです、まずは涙を拭いて落ち着いて、ゆっくり話しなさい。」

そう言つてカリーヌは、メイドを落ち着かせてから、話を聞いていたのです。

「……………と言う訳なのです、  
奥様。」

メイドは、池の辺に現れた怪しい少女の事から、その少女に関連した話しが有るので執事長のジェロームが、カリーヌに池の辺迄来て下さいという言でした。

話しの中の少女の歳頃と、身体の特徴を聞いてカリーヌは確信したと同時に、素早く行動して窓を開け放ち、そこからフライの呪文を唱え。

物凄い速さで池の辺目指して、すっ飛んで行った（母の愛は凄…）。

カリーヌがメイドに話しを聞いていた頃

ヴァリエール公爵の寝室では。

此処はヴァリエール公爵の寝室前の廊下に、執事長のジェロームがいて、今からノックをして入室しようとしていた。

「公爵様、ジェロームでございます。」

「入れ。」

ヴァリエール公爵に入室を許されて、寝室に入るジェロームだった。

寝室に入ると既に公爵は身仕度を整え。

椅子に座り優雅に紅茶を嗜んで、朝の一時を過ごしていた。

「お早うございます公爵様。」

「うむ、ジェローム今朝は少し来るのが早いな、何か有ったのか。」

以外にも鋭い公爵でした。

「先程、庭園の池の辺に怪しい者が居ると、或メイドが言いに来ましたので、その事を、公爵様にご報告申し上げに、罷り越した次第でございます。」

「その怪しい者を、確認させに誰かを行かせたのか。」

ジェロームに事の仔細を聞いている公爵でした。

「はい、公爵様、警備隊副隊長の、ポルトス・ド・レイノー殿と配下の方達が、確認しに行っております。」

「そうか、レイノー達が向かったのなら安心して、任せる事が出来るな。」

すぐに終らせて、報告に来るだろう、心配する事は無い。」

そう言った公爵は、たいした事は無いだろうと思っていた。

ジェロームの次の言葉を聞く迄は……。

「その事なのですが自分で確認した訳では、無いのですが初めに見た、メイドが言うには怪しい者は少女で、歳は14か、15、髪は腰迄で有るピンクブロンドの華奢な身体の、美少女だと言っておりますので、もしかしたらと思ひ独断で、カリーヌ様に先程のメイド

を知らせに、いかせました。」

ジェロームのその言葉を聞いていた、公爵は少しずつ顔色が変わって最後は、  
驚愕した顔つきに成っていた。

「……ジェ、ジェローム、そ、それはまさか！ルルルイズの事なのか。

信じられん。」

「公爵様、レイノー殿からは、まだ報告が来ておりませんので、確かだとは？申せません。」

ジェロームに、そう言われた公爵は…。

「ならば、わたし自身で確かめに行くまでだ！」

公爵は、ジェロームにそう告げると、窓を開けてフライの呪文を唱え飛び立ち、池の辺へ向かって行くので有った。

（似た者夫婦であった）

池の辺で両親を待ち侘びる、ルイズ…。

(ルイズ心の声)

(ああ、早く母様と父様に逢いたい。

残念な事に、レイノールの話しだと姉様達は此処では無く、別の所に住んで居ると言う……。)

色々な考え事をしていたルイズでしたが、突如その上からゴウオ―と、轟音が鳴り響いたと思つたら、物凄い衝撃とともに、ルイズの直前に降り立った者は。

ルイズが夢に見るほど逢いたいと願つた、愛おしい母様が……。

(母様が、有れ程逢いたかつた母様が、手を伸ばせば届く所に居た……。)

全力でフライを使い、池の辺の上空迄来たカリーヌが下を見ると、そこに居たのは、捜して捜して捜し尽くして、トリスティン、更にハルゲギニア全域や、

ツテを使い東方のロバ・アル・カリイエ、果てはエルフの住むサハラ  
の砂漠迄捜したが見つから無かつた、ルイズがそこに居た。

カリーヌは迷う事無く、直前に降り立ち真っ直ぐにルイズを見つめて……。



「あ、貴女は、ル、ルイズ…ルイズ…なのですか…私の小さな…小さなルイズなのですか……。」

そう言って、涙が堪えきれなくなって、言葉が詰まったカーリーヌでしたが、その時ルイズが…。

『か、母様、あ、貴女の、小さな、私が貴女の小さなルイズです母様！。』

そう言って、目の前に居るカーリーヌに涙を流し、泣きながら飛び付く様に抱き着いていたルイズ…。

「私の愛しい…小さなルイズ…ルイズ！…。」

涙目をしながらそう言った、カーリーヌはルイズの身体を包み込む様に、きつく抱きしめていた。

今までの空白の時を取り戻す様に、何時までも抱きしめていたかった、カーリーヌでしたが……。

ルイズとカーリーヌが母と子の感動の再会をしていた所に、少し遅れてヴァリエール公爵が到着した。

「ルイズ！ルイズなのか、君は！ワタシの小さなルイズなのか！」

そう言う、公爵にルイズは…。

『そうです、私が貴方の小さなルイズですわ、父様』

父に笑顔でそう言ったルイズであった。

「ルイズ、ワタシのルイズ、もっと近くに来て父にお前の可愛い顔を見せて欲しいのだー！」

公爵はルイズに、自分の胸に飛び込んで来て欲しかったのだが。

『あの、私も父様の顔をよく見たいのだけど、母様が抱きしめたまま離してくれないの。』

「ず、狡いでは無いか！一人占めはワタシにも。」

そう、妻のカーリーヌに抗議した公爵でしたが……。

「…だめです！例え貴方でも、いえ、誰で有れルイズを私から、引き離せる者などおりません！二度と離すものですか！今離せば又この子が消えて仕舞いそうで、離せません。」

ルイズを強く抱きしめたまま、そう言ったカリーヌに公爵は何も言えなかったのです…。

「あの母様、私は何処にも行きません。消えもしません。」

だから父様にも、無事に還って来た私を見て貰いたいの〜ね、お願い。」

ルイズが懸命に、カリーヌに頼んでいるのを見た公爵は感激して涙ぐむのです…。

（ルイズ心の声）

（私の事をとても深く思っていてくれた。

母様には凄い嬉しいのだけど、更に力を込めて抱きしめるのは、止めてーか身体がぁぁあー。）

実はこの時ルイズはかなり危なかったのですが…。

「ルイズの頼みなら仕方が有りません。貴方、特別に許可します。近くでルイズを見ても宜しい。」

カリーヌの許しを貰って、喜ぶへタレな公爵で有りました。

それを見ていたルイズは、小さな声で……。

『ハア、相変わらず父様は母様に尻に敷かれているのね。でも是が家に還ってきた実感がするのよね。』

ハルゲギニアに還って来て、初めてホットしたルイズでした……。

続く。

五話ヴァリエール家に選って来たルイズその一（後書き）

書き上げるペースが落ちてきた。

六話ヴァリエール家に選って来たルイズその二(前書き)

今回は最後の方に

エレオノールが

少しだけ登場します。

## 六話ヴァリエール家に還って来たルイズその二

〵〵用事を片付けて池の辺に来た。

ジェロームが見たのは、シンプルな服装をしたピンクブロンドの十代前半の美少女をカリーヌが抱きしめていたのと、公爵は空に向けて始祖ブリミルに感謝の言葉を述べていた。

更に警備隊副隊長のポルトス・ド・レイノーは、感極まり涙ぐむし、周りの警備隊員達は（一名除く）何故か落ち着きが無いのと、思わず空を見上げ溜め息をつくジェロームで有ったが、何時までもする訳にもいかないので、カリーヌの所に向かい挨拶をしたのでした。

「おはようございます、カリーヌ様。。」

「おはよう、ジェローム。」

挨拶をするカリーヌでした。

「カリーヌ様、お隣におられる方は、ルイズ・フランソワーズお嬢様なのですか。」

確信が持てず、失礼だとは思いながらも、尋ねずには要られなかった、ジェロームであった。

「久しいわ〜ジェローム……」。

十年ぶりに成るのかしら、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。

本日無事にヴァリエール家に還って来ました、是からは宜しくね。』

そう言つてルイズはカーリヌに代わつて答え、更に顔を少し下げスカートを摘み上げて華麗な挨拶をして見せた。

ルイズの完璧な挨拶を受けたジェロームは感銘して……。

「立派な挨拶でございました。」

「ご無事に戻られ、このジェローム嬉しく思います。」

是からは使用人一堂、ルイズ・フランソワーズお嬢様に誠心誠意仕えさせていただきます。」



ジェロームの言葉にカーリー又は…。

「ジェロームのその言葉嬉しく思います。」

「それから、アカデミーに居るエレオノールとフォンテーヌ邸のカトレアに、至急に梟便を送り出しなさい、今日の晚餐は何時もより少し豪華にするように厨房に命じる様に。」

「はい承りました、それからカーリー又様、朝食は何時もの様にテラスでお召し上がりになりますか。」

「何時もの様にテラスで用意しなさい。  
勿論ルイズの分もです。」

判りましたと言って恭しく頭を下げ、その場を辞したジェロームでした。

是からの事をどうして行こうか、思案していたカーリー又は先ずは…。

「貴方！何時まで始祖に感謝しているのですか！そんな事よりも、ルイズの是からの事を考えてください！…全く…。」

カーリン様には、始祖へ感謝を捧げるより、ルイズの将来を考える方

が凄い大事な事でした。

「済まんカリヌ、テラスで朝食を食べながら、ルイズの是からの事を考えていこう。」

そう言って、邸内に行こうとしていた公爵でしたが…。

「少し待ちなさい貴方、ルイズこの奇妙な乗り物と荷車は何なのですか。」

カリヌの指摘に説明するルイズ

『この品々は異世界地球から持って来た、私の荷物や母様、父様や姉様達へのお土産の品々ですわ。』

ルイズの説明を受けても余り判らないカカリヌでした。

「テラスで朝食を食べながら話し合っていた、公爵夫妻とルイズ」

「ルイズ、十年前に何があったのか、話して貰え無いか。」

そう、ルイズに聞く公爵。

『ええ、お話ししますわ…。』

十年前偶然に、呪文を唱え成功した。

サモンサーヴァントの鏡に躓いて吸い込まれた先が、異世界地球だったと恥ずかしそうに語ったルイズでした。

それを聞いた公爵夫妻は、少し呆れていたが…。

「ルイズ、その異世界とは何なのか、それにこの十年間のお前がどうしていたのかも、教えてくれないか。」

『今から良います。』

私がこの十年どう暮らして来たのか。』

鏡に吸い込まれて気付いたら、異世界地球の日本と言う国に居たと。

初めて出会った人が敷島礼次郎博士で、敷島博士はルイズを養女に

して育ててくれて学校に通わてくれた。

更に敷島博士が持っている知識に常識や各種マナーなど、総てを教えて貰った事等。

最後に敷島博士の助言でルイズの魔法の系統が、伝説の虚無であった事が判り、十年間魔力を磨きその力を使って、漸く十年ぶりにハルケギニアに還って来れた事を。

「ル、ルイズお前は、その地球と言う異世界に居たと……。」

ルイズの語った驚愕の事実には公爵夫妻は驚いていた。

「異世界に居たのでは、ハルケギニア中を隈なく捜しても見つからない筈ですね、貴方。」

「うむ。」

納得する公爵夫妻でした。

更にルイズの系統が伝説の虚無でコモンマジックなら使える事が分かること、喜ぶと同時に虚無の力を政治に利用されない様に、家族だ

けの秘密にすることを決めた公爵夫妻でした。

「是からのルイズの事は、どうしたら良いと思うカーリヌ…。」

ルイズの将来を妻のカーリヌに相談する公爵ですが。

「まずはルイズに聞いて見たいのですが、

ルイズはどうしたいのです。」

カーリヌに聞かれたルイズは。

『母様、父様、私！学校に行きたいのです。

どうしても…。』

「学校と言うのは魔法学院の事かい。」

『はい！魔法学院の事です父様。』

元気に返事をするルイズでしたが…。

難しい顔をして、暫く黙ったままの公爵だった。

「貴方、今年の入学式はもう一月も有りませんが、今から申し込んで間に合うのですか。」

「無理だろう今からでは。」

断られるのは間違いない筈だ。」

そう答えるしかない公爵でしたが。

諦めないルイズは更に何回も頼むのでした。

「ルイズ、何でそこまで学院に行きたいのかね。」

父にそう尋ねられたルイズは…。

（ルイズ心の声）

（それはアレの事があるから、此処に居たらまずいのよー超危険日だったから、八割いえ、九割の確率で宿している筈？だから、此処に居たらバレタ場合、世間に秘密が漏れない内に水の秘薬で流せられるはず、学院では人目があるからそれは出来ない筈よ。

何としても学院に入るのよー私は!。) )

本当の事は言え無いルイズは、両親にはごまかす事にした。

『母様、父様、私ハルケギニアに今日還ってきたばかりだから、他の貴族の子女達に比べたら教養等が遅れていると思うの。』

それに魔法の練習もしたいし、今までは人前で出来なくて、隠れてしていたのだから早く他の者達に追い付きたいので、それが今年に学院へ行く理由です。』

話しの中に聞き捨てならない事があつたカリー又は…。

「まさか、ルイズが居た異世界には魔法が無かったのですか!。」

『はい、そうですわ母様。』

それどころか王様は居ても貴族は居ませんでした。』

ルイズの言葉に公爵夫妻は驚き言葉も無かったが…。

「それでは、魔法や貴族が無いのではどうやって、生活や政治をしていたのだ！」

『それは、政治は平民の中からみんなが選んだ者がして、生活は科学を使っていました。』

お土産にも科学を使った物があるから、後で見せるわ。』

フーと溜め息をつく公爵だった。

「そんな貴族も魔法も無い異世界に十年も居たルイズが、焦って早く学院に行きたくなるのも判る話だな、此処はワタシが何とかしよう十年ぶりに逢えた可愛いルイズの為だ！」

そう言つて、任しておけと言つたような顔をしている公爵？。

「貴方、本当に大丈夫何ですか、ルイズの将来が決まるのですよ！」

「何、通常の寄付金の二倍いや、三倍も積みめば良いだろう、それで駄目ならワタシが学院に乗り込み、オールドオスマンに直談判すれば決まるだろう。」



父のその言葉を聞いてルイズは喜んだ声で、

『父様大好き!。』

と言って公爵に抱き着いたのでした。

そうして久しぶりの楽しい朝食の一時が過ぎて

ルイズ

に取っては十年ぶりのヴァリエール家での晚餐が始まるのでした…。

此処は、トリステイン王国の首都トリスタニアに在。

魔法アカデミーその一室でアカデミーの一研究員である、この腰の先迄ある見事なストレートなブロンドの髪に、キツメな眼がねの奥は知的なチョット釣りぎみの瞳、スーとした鼻筋に気の強さを現す唇と端整な顔立ちをして、細い首筋から肩、クビれた腰、細長い両手両足とスレンダーな身体。

上からT172B72W56H78とモデル並の見事なプロポーシヨンである（大草原を除けば）。

「ムムムム……。」

「何してるのよ、天井に向けて唸る何て。」

「…何処かで凄く失礼な言われた気がして…。」

「そんな事よりもエレオノール、実家からの手紙には何て書いてあったの〜それ特急便でしょう。」

「それがすぐに、帰って来なさいって。」

竜籠を手配したからそれに乗って来なさいと、重大事だからアカデミーも二週間の休暇を取りなさいだって。」

「何よそれって。」

「だから、すぐに支度して帰らないとね。」

時間が無いからオードリーからゴンドラン議長に、休暇願い言っ  
てね〜。」

「あたしがー自分で良いなさいよ!?!。」

「そんなこと言わずにお願い、お土産持って来るから〜。」

「…しょうがないわね。」

「お土産絶対だからね!。」

オードリーが物凄くビックリする程のお土産であった。

「ハイハイ、じゃあもう行くわね。」

後は宜しくね。」

そう言って足早にアカデミーを出て行くエレオノールでした。

今から帰るヴァリエール家で衝撃の再会が、待っている事をまだ知らないエレオノールだった。

続く。

六話ヴァリエール家に選って来たルイズその二(後書き)

次回はカトレアの登場です。

七話ヴァリエール家に選って来たルイズその三(前書き)

漸く007話を書き上げました。

### 七話ヴァリエール家に還って来たルイズその三

くく時間は少し遡ったくく。

テラスでの朝食を終えたルイズと公爵夫妻の三人は、まだまだ話しが有ったので公爵の執務室で話し合ったのですが、公爵夫妻はルイズに十年分の出来事を事細かく聞いてきたのです。

昼食の時間になったので中断になったが、昼食の後に再開しそうな雰囲気だったので、これにはルイズも堪らず。

公爵夫妻には朝早くから虚無の魔法を使い、とても疲れているので昼食後に少し眠りたいからと言って、十年ぶりに自分の寝室で眠る事にしたルイズでした。

まだルイズに色々聞きたかった公爵夫妻でしたが、流石に疲れているルイズに無理をさせる訳にはいかないので、休ませる事にしました。

その代わり後でルイズの成長記録である、アルバムと言う物を見せて貰う事になった公爵夫妻でした。

十年ぶりに自室での短い睡眠を取って、気力を少しだけ回復したルイズは。

異世界地球から持ち込んだ、身の回りの持ち物や両親と姉達へのお土産等の品々の仕分けをしていた。(ヴァリエール家の発展に役立つ為に持ち込んだ、各種物品はマウンテンバイクとリヤカーと一緒に空いてる倉庫に置いている。)

(ルイズ心の声)

(え〜と何から、整理しようかな? …… 先ずは、日記帳にノート、鉛筆、シャーペン、ボールペン、鉛筆削りに、消しゴム、筆箱、下敷き、万年筆、インクかな。)

ルイズは先ず、大切な日記帳と各種筆記用具等を、布製鞆に入れ、鍵付きの筆筒にしまい込む。

(次は、服と下着ね〜あれ、これは…昨日博士に誕生日プレゼントとして貰った物ね〜。  
ワクワクしながら箱を開けるとパーティー等に着る正装よりの洋服でした。)

『何よーこれ、色は白一色だけど、胸元を強調し過ぎだし、背中は開きすぎよ!博士一体何を考えて注文したのよー?』

お子ちゃま体型のルイズさんには、荷が重いのでした。

(…また、誰か失礼な言っている奴がいるわね!。)

眼を釣り上げ何処かを睨むルイズさん。  
アブネー。

服をクローゼットに、下着は筆筒にしまったら後は、武器とフォトアルバムとお菓子?だけを残して、中断してお茶を飲みたいと思いいメイドを呼ぼうとした時に、扉をノックする音がした。

「ルイズお嬢様、ポルトス・ド・レイノーで有ります。少しお時間を頂け無いでしょうか、よければ入室を許可して頂きたいのです。」

『良いです、入りなさい。』

そう言つてレイノーと他一名の入室を許可したルイズでした。ルイズの寝室に入って来たのはポルトス・ド・レイノーと今朝ルイズを罵倒していた警備隊員のアランだった。

『何の用かしらレイノー？。』

日本にいた時と違い、早くもヴァリエール公爵家三女としての態度を示していた。

（大貴族の娘に相応しい態度を取ら無いと、家の恥に成るから仕方なくしているのだった。）

「今朝ルイズお嬢様様に、自分の横にいるアランが大変失礼な言を申し上げたので、深く反省して自ら謝罪の言葉を述べに来たのでございます。」

レイノーがそう言つとアランがルイズの前でひざまずき、謝罪の言葉を述べるのだが、誠意のカケラも無い言い訳ばかり述べるので（これにはレイノーも呆れていた。）流石にルイズも聞いていて嫌に成り、これからは気をつける様にと許し、寝室から下がらせた。

寝室に残らしたレイノーにルイズは…。



『アランと申す者の眼は濁っているわね、ああいう者は又同じ事を繰り返すわ。』

後ほどの事を思えば辞めさせるのが良いのかも知れ無いわね。』

ルイズの言葉を聞いた、レイノーはそればかりはと言って、必至に執り成すのでクビにするのは止めたルイズだったが、アランは後にヴァリエール家を出奔して傭兵に成り、ルイズの敵として現れるのだった!。

話しは終りレイノーが退室して、ルイズは残りの荷物の整理を始める前に、何かを思い出した様に、倉庫の中に有るリヤカーに積まれていた。

或品物を取って来てお菓子と一緒に頂こうとした時に、ノックの音と同時に扉を開けて公爵夫妻が、部屋に入って来たのであった。

「ルイズ、もう起きているのでしょうか。フォトアルバムとやらをこの母に見せてくれるのでしょうか。」

「うん、ルイズそれは何なのかね。」

ルイズが手に持っている物を見た公爵は思わず尋ねていた。

『母様、父様、こここれは、に、日本から持って来た。』

「チヨ、チヨコレートと言うお菓子に、缶珈琲と缶ジュースです。」

急に部屋に来た両親にチヨットビックリした、ルイズだった。

「チヨコレートとは、食べ物なのですか。」

そう聞くカリヌ。

『チヨコレートは甘くて美味しい食べ物なのですのよ。』

「異世界の食べ物かあゝ物の試しに、ワタシ達も食しても良いかね  
」。

『どうぞご賞味下さい』。

ルイズがOKしたので、公爵夫妻はチヨコレートなるハルケギニア  
では見た事も無い、透明の紙みたいな袋に入った、色んな種類のチ  
ヨコ（某製菓フ〇タの徳用）の一つを選び、口にいれると……。

「オオー何だあーこの甘さは！」。

「本当に甘く美味しくて、とろけるようですね。」。

そう言って、絶賛しながら食べる二人でした。

『もう、美味しいからと言って、チヨコばかり食べてゝアルバムを  
見に来たんじゃあ無いのー！。』

チョコレートの美味さに、当初の目的を忘れていた公爵夫妻。

「そうでした。ルイズの十年間の成長を記したアルバムを見に来ましたのに、貴方ときたら夢中になって！しっかりして貰わ無いと、困ります！」。

当然の如く旦那のせいにするカリン様。

「ちょ、ちょっと待て、カリィヌーおおお前も、……。」

そう言つて、奥さんに抗議しようとする公爵でしたが、その途端にカリィヌーが物凄く怖い顔をして、公爵を睨みつけて……。

「あ・な・た！何か言いたいことでも有るのですか！！」

「……い、いや何でも無い……ワタシが悪かった。」

そう言つてカリン様に謝る。

本当に情けなくて、ヘタレでどうしようも無い公爵でした。

それを見ていたルイズは小さな声で、

『ハア、本当に情けない……』

と言つて、チョコレットだけ父に幻滅したのです。

ちよつと雰囲気が悪く成りかけたので、ルイズは自分のフォトアルバムを見せて場を和ませる事にした。

『これが博士と暮らし始めた頃の私よ、5歳位かな。』

そう言つて両親に見せる。

一枚の写真には水色のフリルのワンピースを着てニッコリ微笑んでいる（口〇コ〇野郎が見たら、間違いなくお持ち帰りする程の、）物凄く可愛い幼女が写っていたのでした。

その写真を見た公爵は。

「何だこの絵はーこれではまるで鏡に写つた様では無いか！ここ迄精巧に描いている絵を見たのは、初めてだ？。（実はトリストニアの別邸には、公爵秘蔵の精巧な裸の女性が描かれている。場違いな民芸品と呼ばれている本が有つたのだ。）」

「貴方、此処に描かれているのは間違いなく、十年前の小さなルイズですね。」

写真を初めて見るカリーヌと公爵？は、凄く驚いていた。

『母様、父様、これは絵では無くて写真とって、人や物や風景を

カメラと言う機械でそっくりに、写し取るのですよ。』

ルイズは両親に、カメラと写真の事を説明するのですが……………。

「ルイズ凄いぞ、この写真と言うマジックアイテムは！」

「そうですね。」

他にも可愛い小さなルイズの写真がたくさんありますわ〜これ何て、正装みたいな服を着て緊張しているわね〜ウフフ、何て可愛いのかしら。」

小さな頃のルイズの写真を見て、独り悦に入っているカリン様であった。

「…………ルイズ、この写真を貼付けたアルバムを、この母に無期限で貸して貰いたいのですが…………。」

『え〜と、それはちょっと…………。』

そのアルバムは、ルイズの十年分もの生きてきた証であるので、いくら母とは言え、それを渡すのは躊躇するルイズだった。

「カリ〜ヌ、それはいくら何でも、無い…………。」

「いいえ貴方、私が小さなルイズの可愛い姿を収めた物を、欲しがらないと思って！」

『母様、そんなに私が写っている物が欲しいの〜。』

「母親としては、十年間のルイズの成長が解るこのアルバムを傍らに置いていたいのです。」

『そんなに私のことを、思っていてくれた何て……う、嬉しいわ。母様……私に取っては、大切な品だけど、母様になら持っていて貰いたいの〜。』

「ルイズ〜有り難う、大切に扱わせて貰わね。」

そう言つて、抱き合う母と娘でした。

その横では、独り淋しくイジケていた公爵だった。

『父様も、そんな処で肩を落としていないで、元氣を出して〜父様にも素敵なお土産を、用意しているからね。』

こんなヘタレで、駄目な父親にも、氣を使って優しく接する何て、

何て良い子や〜ルイズさんは〜。

「うおおおおールイズはああああー何てー優しいんだああああー。あー。」

涙を流し、大きな叫び声をだしながら、物凄い勢いで、妻と娘に抱き着こうとしてくる、公爵を見たルイズは思わず顔が引き攣り。

カリーヌの方は、背中を向けていながら一瞬で杖を抜き、呪文を唱え、エアハンマーで公爵を壁側に吹き飛ばしたのだった。

（恐ろしい・恐ろしい。）

「グオ、ハア、ゲホ、ゴオハア、な、何を、のだ、カリーヌ……。」

吹き飛ばされ、壁に衝突した公爵は、髪はクシャクシャに、服はマントがずたずたのボロボロに成り、シャツやズボンも、スタボロと原型を保っていなかった。

「貴方こそ、凄く激しく抱き着こうと、飛び込んで来て、私とルイズに怪我でも負わせるつもりですか！！！」

抗議する公爵に対してカリーヌは、逆に物凄い剣幕で叱り付けるので有った。

「……いや、しかし、だな、……………」

言い訳しようとする公爵でしたが、カリーンの身体全体から今にも襲い掛かりそうな轟音渦巻くような凄いオーラを、纏っているのが見えたので、それ以上は何も言え無かったので有った。

公爵が情けない事をしているうちに、時間は過ぎて、晚餐を迎えようとしていた……………。

#### 此処は公爵の執務室

今日は早朝から、嬉しい出来事が有つてとても、仕事にはならず。

普通なら書類が貯まって行く筈ですが、執事長のジェロームが大半の書類を処理していて。

残りは少しだけで、後は書類の確認と承認する為に必要な、公爵のサイン及び印章を押すだけなので、晚餐の直前迄それらの仕事をこなしていた公爵でしたが、扉がノックされ、ジェロームが報告が有ると言うので、

「入れ。」と言って入室を許可していた。

「何の用だ。」

「公爵様、フォンテイーヌからの馬車がご到着しております。」



「カトレアにしては早過ぎるのでは無いか。」

そう言って、訝しがる公爵でした。

「いえ、そのカトレア様でございます。」

「カトレアが、もう来たと言っのか。」

「応接室にお通し、しております。」

「うむ、ワタシも今から向かうとしよう、カリーヌとルイズにもカトレアが、到着して応接室にいることを知らせよ。」

そう言って、公爵はジェロームに指示を出して、自身は急ぎ足で応接室に行くのであった。

ルイズはメイドからの知らせで、カトレアが応接室にいることを知ると、寝室を出て応接室に向かう為、廊下を、考え事をしながら歩いていた。

(ルイズ心の声)

（ちい姉様に逢うのは、十年ぶりだから凄く嬉しいのよね）十年前は今の私よりも、歳が下だったけど、もう成人して二十歳を超えているはね、凄く綺麗に成っていると思うとチョット、ドキドキするわね、病気は治ったのかしら、それとも……………。）

ルイズは、考え事をしているうちに、気づけば応接室の前にいるので、気を取り直して部屋の中に入ると。

応接室のソファーには、カリーヌと公爵が座っていて、ルイズの正面には、少し緩めの純白のドレスを着た。

上から（T168B92W59H89）腰の先迄有る鮮やかなピンクブロンドの髪に、整った顔立ちにスタイル抜群のプロポーションながら、ほんわかしした癒し系の雰囲気をした。

ルイズが逢いたかった、美女が満面の微笑みをして出迎えていた……………。

（一方その頃、ヴァリエール公爵家に向かって、飛行を続けている竜籠の中では、エレオノールがワインを飲みながら独り言を呟っていたのだった）。

「もう、お父様はー急に家に帰って来い何て、どれほどの重要な話しが有ると言うのかしら？もしかして、バーガンディ伯爵様との婚約の事で、何か有ったのかしら？何か気になるわ？それともルイズの事に関して、何か進展でも有ったのかしら、それこそまさかよね

「お母様達も、口にこそ出さないけど半分以上諦めてる様だし、もし家に到着してルイズが、還って来ていたなんて事が有ったら、それこそまさかよね？いえ、奇跡だわ……………」。

後少しの時間で、奇跡の再会が待っている事をまだ知らないエレオノールであった。

続く。

七話ヴァリエール家に遷って来たルイズその三(後書き)

次回はヴァリエール公爵家の家族が勢揃いします。

八話ヴァリエール家に選って来たルイズその四(前書き)

今回は書き上げるのが、なかなか進みませんでした。

## 八話ヴァリエール家に還つて来たルイズその四

十年ぶりに、カトレアを見たルイズは瞳に涙をためながら感極まり、声も出せずにいたのでした。

そんなルイズを見たカトレアは、物凄い笑顔をして嬉しそうにルイズを抱きしめるのでした。

いきなり、抱きしめられたルイズは。

『あ、あの、ちい姉様……その、そ、……。』

「ルイズールイズ。」

ルイズ、ああ、私の可愛い、小さいルイズ、ルイズ〜ああ、良く無事に還つて来たわね〜私の小さいルイズ、ルイズー……。」「

嬉し涙を流して、何度もルイズの名を呼びながら、抱きしめるカトレアでした。

『その、ねえ、ちい姉様、喜んで下さるのはとても嬉しいんですけど。お身体の具合は良いのですか、無理をされてはいませんか私、心配何です。』

ちい姉様のことが。』

「私の身体の事を気遣ってくれて、有り難うルイズ。」

でもね、心配は要らないの、今日はとても気分が良いのよ。」「

穏やかな笑顔をで、心配は要らないと言うカトレアでした。

『本当にご気分は良いようですね、それでは、ご挨拶をさせていただきます。』

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール、今日ある処より還って来ましたは、ちい姉様。』

今日一番綺麗な挨拶を、姉カトレアにしたルイズでした。

『ちい姉様あああ、私、私、ちい姉様に再び逢えて、ううう嬉しいのおお！一時は二度と逢え無いのかなと思っていたから、ううう、うあああああああー。』

カトレアに逢えて、心のリミッターが外れたのか。

心の中に溜まっていたものを総て吐き出す様に、顔をクシャクシャにして大声を上げて、カトレアに抱き着いて泣いているルイズだった…。

そんな状態のルイズを髪を撫で、優しく包み込む様に抱きしめていた。

カトレアでした。

溜まっていたものを総て吐き出して、スーとしたのか、清々しい気分  
で姉のカトレア、両親達と少しだけ談笑して、晚餐用の服装に着  
替える為に自室にもどるルイズであった。

(ルイズ心の声)

(フウ、ちい姉様には敵わないな〜全部分かってる見たいだし、隠  
し事何て出来ないな〜。)

(……サイトのこと隠しきれないかも……クヨクヨするのも私らし  
く無いし、ばれたらその時は、その時よ?うん、そうしよう。)

そう、カトレアには嘘や隠し事が、通じなかった。

初めて会った人でも見た瞬間に、本質が解ると言っ  
勘の良さでは済まない程の凄い能力でした。

晚餐の用意が出来たからと、メイドが伝えに来たのでその前に、ル  
イズは大きな鏡の前で身嗜みのチェックをしていた。

(ルイズ心の声)

(……うん、地味かな〜シンプルな白のブラウスに紺色のスカート  
何て……。)



晩餐の席に着て行く服の事で、色々考えているルイズだった。

色気無しのお子ちゃま体型のルイズさんには、考えるだけ無駄なんですが〜。

『何ですってー！何が無駄なのよ！！この見事なボディーの何処があああああー！』

次元を超える絶叫をするルイズさん。  
ソロソロ、ヤバイ、ヤバイ。

（最近、外野の声が五月蠅いのよ！全く！ま、そんな事より……。）

（後はサイトがくれた、このピンクダイヤのペンダントを付けるだけね。）

才人から貰った、大切なペンダントを身につけて、食堂に行くルイズでした。

ルイズが食堂室の前まで来ると、メイドが恭しく頭を下げて扉を開ける。

メイドが扉を開けたので、中に入ったルイズが十年ぶりに大食堂を

見て、小さく呷くのです。

『考えてみるとうちって、トンデモナイ所よね。』

此処の食堂に匹敵するのって、日本じゃあ赤坂迎賓館や一流ホテル位しか無いわよ！。』

ルイズが言う様に、ヴァリエール公爵邸の大食堂は。

長方形の長いテーブルに約百名分の椅子を配した物でした。

普段は使わず。

晩餐会等の特別な時だけでしたが、今日はルイズが帰って来たのを祝うので、特別に使われるのだった。

最後に到着したルイズが着席して、始祖プリミルへのお祈りを済ませると、久しぶりの明るい晩餐が始まるのです。

「ルイズ、久しぶりの我が家の晩餐はどうかね。」

『ええ、どれもとても美味しいけど。』

チヨット量が多いし、それにこの時間に脂っこいのは、太るから普段は食べないのよ。』

日本では基本的に、朝、昼、晩の食事は敷島博士が  
（敷島博士は調理師免許と栄養士の資格を持っている）  
ルイズの健康を考えて和食を中心に作っていたのです。

「ハハハ、ルイズ此処は異世界では無いのだ。

遠慮する事は無い、好きな物を好きなだけ食べれるのだから  
。

」

公爵の言葉に少し反感を持ったルイズは……。

『私が言いたいのそんな言じゃあ無くて………。』

ルイズは、父や母、カトレアに自分が十年もの間暮らした。

日本と言う国の食事にたいする考え方が、身体の良いと言う事  
を伝えるのでした。

カトレアは総て解っていたので黙っていたが、カーリー又は納得しな  
くて再度ルイズに聞きます。

「ルイズは異世界の料理は、身体に良いと言いますが、どこが、ど  
う言うふうに良いのか具体的に述べていませんね。」

『そ、それ程母様が言うのなら、具体例を言えば納得しますか  
』。

ルイズに取っては十年間の生活が、否定された様で哀しかったので  
すが、気を取り直して言うルイズでした。

『私の今のスリーサイズは上からB80W55H79ですが、母様  
の今のスリーサイズを教えてください。』

「……………。」

無言で黙ったままのカーリヌに対してルイズは。

『黙ったままでは、判りません。』

答えてくれますか、母様。』

ルイズに言われて、仕方なく答えるカーリヌ。

「……………B77W62H76……………こ、これが…いい世界の…食事  
と何の関係が有るのですか……………」。

小さな声で絞り出すように答えたカリーヌ。

『まだ解りませんか、私は十五歳ですが、母様は〇〇歳であのサイズでしたよね。』

それが答えです。』

『因みに十五歳頃のサイズは、母様。』

』

ルイズが最後に言った言葉はカリーヌに取ってトドメの一撃に為り、顔は朱く染まり身体はブルブルと震わっていた。

(ルイズ心の声)

(しまった、やり過ぎたあ！これじゃあ母様が恥をかいただけだわ。

素直に謝ろう。)

『母様、ごめんなさい。』

言い過ぎました、でも言い訳じゃあ無いけど、母様や父様それに身体の弱いちい姉様に、何時までも健康でいて欲しいだけなの……。』

そう言って涙ぐむルイズでした。

「ルイズ、私の方こそ貴女の想いも知らず、  
否定することを言って、母親失格ですね。」

ルイズを哀しませたと思っていた、カリィヌですが。

『そんなことは、有りません。』

母様は私の為を思って、言ってくれただけです。』

今まで黙っていたカトレアでしたが。

「母様、ルイズ、二人とも相手の事を思って、言ったことでしょう。  
仲直りしたから、この話しは終りにして、後は楽しい話しをしまし  
よう。」

そうカトレアが言い出したので、ルイズも此は気分を変えるために  
エレオノールが来てからしようと思っていたのを早めて、カリィヌ、  
公爵、カトレアに用意していた物を取りに自分の寝室に向かった。

ルイズでした。

暫くして、ハルケギニアでは珍しいデザインをした、鞆を持って来たルイズは、開けて中から綺麗な紙にリボンを掛けた箱を出して、両親と姉に手渡すのでした。

「ルイズ、この二つの箱には何が入っているのかね。」

ルイズに聞いてみる公爵だったが。

「貴方、開けて見れば解ることです。」

横からカーリーヌがそう言うので、それもそうだと思い開けてみる公爵でした。

「何だコレはああああ！一応時計みたいなのだが。」

「貴方、コチラは、ペンみたいなのですが、とても鮮やかなゴシック模様を施した、六角の形をした金属の棒みたいですね。」

箱を開けて中の物を手に取り、驚く二人でしたが。

「これはルイズが住んでいた世界のペンと時計ね。」

瞬時に理解して言い切った、カトレアでした。

『ええ、ちい姉様の言う通りです。』

時計は腕時計と言って、こうやって左腕に巻くように嵌めます。』

そう言ってルイズは自分の腕時計を使って、説明するのだった。

『後で私がハルケギニアの時間に調整しておくから。』

「ルイズこれはどうやって動いているのかしら、ハルケギニアの時計みたいに音がしないけど。」

『ちい姉様、この腕時計はソーラ電波時計と言って、地球と違って電波は使えないけど。』

中にソーラ電池と言う物が入っていて、太陽の光りを浴びせて充電して動いています。』

固定化の魔法を掛ければ、半永久的に動くわね。』

「うむ、光りで動くとは。」

マジックアイテムみたいだな。」



まるで分かっていない、父に説明するのを諦めたルイズでした。

「ねえルイズ、このペンはキラキラしていて、とてもキレイだわ。」

そう言ったカトレアが、手に持っていたのは、スイスの某一流メーカーの万年筆でした。

「そのペンの名前はラグーンと言って、真珠母貝をすり潰して、ぬりこめた物だからキレイなんです。」

「ルイズ私達の物もこつた作りなのですね。」

「はい、そうですわ母様。」

そう言って両親達に、異世界のスグレタ技術で作られた。

ハルケギニアの職人では、絶対に作れない物だというルイズでした。

「そんなに凄い物なら、良い値段がしただろう。」

公爵に値段をきかれて、チヨット返事に困るルイズでしたが…。

「いえ、それが、父様がだいたい25エキューで、母様のは50エキューに、ちい姉様のは20エキューでした。」

ルイズから教えられた値段を（1エキューは一万円です）聞いた三人は凄く驚いたのです。

「……こ、これほどの品物が、たったの25エキューで買えるのかあー信じられん。」

ルイズは、低品質の物でも職人が一つずつ、手作りで値段が高くなるハルケギニアの品物と、何千、何万も大量生産で作っても。

高品質の異世界地球の品物ではくらべることが出来ないと、説明するルイズでしたが、何となく判るカトレアと違い。

まったく理解していない両親には、これからヴァリエール家の領地改革を進言しようとするルイズとしては、頭がいたい事でした。

色々話しているうちに、晚餐も終わろうとしましたが、ジェロームがエレオノールが到着したことを報告に来たのです。

「……大事な話があるから急いで帰ってきたのに、出迎えてるのは使用人だけじゃ無いのよ!!!」

両親の出迎えが無かったので少し癩癩をおこしている。  
エレオノールだった。

此処で怒っていてもしょうがないので、家に入ったエレオノールだったが、廊下の奥の方から弾丸のような速さでこちらに向かって、人らしきモノがやって来るを見ていたら、懐かしい声と一緒に飛びついて来た者を見て、驚愕したのだった。

『エレオノール姉様あああああああー!』

「あ、あああああなた、ももももしかして、ちびルイズなのおー!」

そう言って、叫び声をあげるエレオノールに後から来たカリヌが、あさのキセキの出来事をかんとんに説明するのでした。

「なんで!手紙に書いてくれないのよ!!!」

私がどれだけ、この十年ルイズのことを想っていたのか、知っているくせに!。

よくもこんな酷い事ができるわねえー。」

エレオノールが怒るのもむりも無いことだった。

もともと彼女が、王立魔法研究所

(通称、アカデミー)

に入ったのは、カトレアの病気の事もあったが、なによりも忽然と消えたルイズをさがす為でした。

『違うの、母様達をせめないで、私が姉様には家に帰って来るまで知らせないように頼んだの、だから怒るのなら私に……。』

真相を話すルイズにエレオノールは。

「ねえ、どうしてそんな事を頼んだのルイズ。」

『……だって、私をずっと捜してくれていたんでしょ。』

その為にアカデミーにも入った姉様が、私が帰って来たと思ったら、急いで帰ろうとしてケガするのが嫌だから。

それで頼んだの、だから悪いのは私なの、ごめんなさいエレオノール姉様。

自分の事を心配してやってくれたのを、怒れる訳がないエレオノールでした。

「そうなの、私のことを心配してくれて有り難う。

でも、よく無事に、かあ……えつ……て……うう……ひい……つく……ぐす……うああああー」。」「

ルイズの無事な姿をみて、心のなかに抑えていたものがセキを切り、流れだすかの様に泣きだした。

エレオノールだった。

「エレオノール姉様これからは、無理をすることは無いのです。気を楽にして良いのですから。」

そう言ってカトレアは優しくエレオノールを抱きしめ、慰めるのでした。

「そうです。

エレオノール、貴女は小さな頃から思いつめて、無理をしすぎなのです。」

カリーヌが軽く小言を言うのですが、いわれたエレオノールは…。

「うう、そんなことを言うお母様だって、ルイズを心配して一時期やせすぎて。」

私がどんなに心配したと想っているのですかあ！」

ズボシを言われたカリーヌは。

「あ、あれは、……その、……なんです……。」

顔を朱くしてモジモジする。  
可愛いカリン様でした。

「それにお父様や、カトレア貴女だって……。」

エレオノールの言葉をさえぎり。

「お姉様！ルイズの前では……。」

エレオノールにそう言って、人差し指を口に当てそれ以上はダメとジェスチャーで示すカトレアでした。

エレオノールのその言葉を聞いてカリーヌに尋ねるルイズでした。

「ちがうですよコレは、……。」

ごまかそうとするカリーヌ。

「カリーヌの言うとおりなのだ、ルイズ。」

言い訳にもなっていない公爵。

「ルイズが気にすることは無いのよ。」

そう言うカトレアです。

（ルイズ心の声）

（良く見ると母様は、十年すぎたとは言え、あんなに肌のはりが有ったのに、今は見る影も無いわ。）

（父様も昔は見事な金髪だったのに、今は所々白いモノが混じっているし。）

（ちい姉様は先程は大丈夫だといっていたけど、よく見ると青白い顔をしているわ。）

（それにエレオノール姉様は、決して人前で弱音をみせることはしなかったのに。）

ルイズが心のなかで想っていた様に、公爵。カリヌ。エレオノール。カトレア。

ルイズの事でそれぞれが、心の傷を負っていたのでした。

（私がいなかったのが、みんなを苦しめて居たなんて、これからは心配かけ無い様にしないと…。）

（思っているけど、心配かける心当たりがあるから、先にあやまつておくわね。

ゴメンナサイ、これで良いのよね〜。）

心のなかで謝っても何の意味もありませんよ、ルイズさん。

しんみりした雰囲気を変えるために公爵は。

「その、だな、此処に、こうしている訳にもいかないし。

応接室で積もる話もあるから、みんなでお茶でも飲みながら、ゆっくり過ごそうでは無いか。」

公爵の提案にみんながうなずき、夜遅くまで十年ぶりに家族全員が揃って、十年分のいろいろな出来事を楽しく話しあったのでした。



ヨカッタ、ヨカッタ。

続く。

八話ヴァリエール家に選って来たルイズその四（後書き）

次回は、魔法学院に入学するために色々なことをします。

九話魔法学院へ入学する？ その一（前書き）

シリアスな話しは、中々前に進まない。

## 九話魔法学院へ入学する？ その一

此処はヴァリエール公爵邸の庭にある。

池の辺に あさ早くから一人の美少女が、鉛入りの重い木刀でもう何千回もすぶりをしていた。

汗をかきながら懸命に木刀を振るう姿は。

美少女だけに綺麗なのだが、平均以上の少女なら激しくすぶりをすれば必ずブルンブルンとなるのですが この美少女のある一部分はまったく揺れるすぶりも無いのです。

まあ、当たり前かゝ洗濯板が揺れるわけ無いよなゝハハハハゝゝ。

「うるさいのよおー！ その外野！ ひとが黙って聞いてれば！  
！誰があゝ洗濯むねですって！」

違いますよ、ルイズさん。

洗濯むねでは無くて洗濯板ですよ。

「そんなことは訂正しなくて良いのよおー！」

若い頃から怒って、ばかりいると。

コジワになりますよルイズさん。

「ウツサイー！もう、許さないわ！！早瀬平八郎先生直伝の、時空斬であの世に逝かせてあげるわ！！！」

えくと、そんな技設定したかな。

ルイズを見ると木刀を下段に構え息をととのえハァーと言つと。

「時空斬ー！」

その掛け声と、ともにルイズの右腕がにぎる木刀が下から斜め上方に、音速をも超えた神速の速さで 時空をいや、次元をも超えて

『ズシャーん・シューシュー』

うあー後2センチズレていたと思うと。ナンマンダブ。

もう ルイズからかうのヤメヤメ、命がいくつ有っても足りないよ。

「ふう〜チツ、はずしたわ〜この技もまだまだ精度が甘いわ〜。もつと練習あるのみね〜。」

必殺技を放った直後で、気を抜いていたルイズの後ろにいつの間に来たのか 烈風カリンが、微笑みをした顔で立っていました。

「見ていましたよルイズ変わった技ですが、かなりの威力とみました。

今から鍛練場に行きこの母と手合わせしましょう。」

その母の言葉を聞いたとたんルイズは、身体から冷や汗をかき、手足はガクガクブルブルふるえていたのです。

「か、母様、私なんてまだまだ。

風のスクウエアである、母様の相手などできない未熟者ですから失礼させて頂きます。」

そう言うが早いか、ルイズは超光速で此処から逃げようと思いました。が、いつの間にかルイズの肩をガシツリ掴んで離さないでニツコリと微笑んでいるカーリヌでした。

「さあ、逝きましようかルイズ。」

「か母様、字が字がちがうわああーまだ死にたくないよー誰か誰かああー」

モチロン死地に飛び込む無茶な者のなどいませんでした。

この後ルイズは全力を出してカーリヌと死闘を繰り広げて 何とか死ぬのだけは免れたが、服は

(日本からもってきたブランド物ジャージ)

スタボロになり身体は筋肉痛になって、水メイジの治療を受けるまで地獄のくるしみを味わいました。

追伸。

この手合わせと言う名の地獄の鍛練は。

ルイズが魔法学院に入学するまで続くのでした。

ルイズがヴァリエール家に帰って来て、一週間がすぎた日の午後、公爵の執務室では。

公爵がソファアールに座りタバコを吸って落ち着いたのか、さきほどの話の続きを妻のカーリヌとしていた。

「それでは貴方、ルイズの魔法学院入学は、むずかしいですね。」

再びタバコを吸って気分を変えてから話しをする公爵だった。

「せっかくワタシが、マリアンヌ王妃殿下とアンリエッタ王女殿下に頼み込んで。」

特別に推薦状を書いてもらったのに。

それを無視しよって、なあにが王宮の圧力に屈しないだど！オスマンの爺めえええー！！！」

話しているうちに、また興奮してきた公爵は。

ライクと書いてある箱から一本のタバコを取って、マッチを擦って火を点けるのだった。

「フウーやっぱり旨いなこのタバコと言うものは、  
イライラする時に吸うと気分が落ち着くのが良い。」

「そんなに落ち着くのですか、タバコと言うのは。」

そんなに良いものなのかと考えるカリヌ。

「そうだ、やはりルイズが勧めるのだから我が領地でタバコの栽培  
を試してみよう。」。

後にヴァリエール公爵家の領地は、  
タバコの大生産地になります。

「タバコの件は貴方が決めたから良いですが。  
問題はルイズをどうやって、魔法学院へ入学させるかですね。」

ルイズの魔法学院入学が中々決まらないので少し焦っているカリ  
ヌ。

「色々やってはいるが肝心なことは、  
オスマン学院長にウンと言わすことだ。」。



それが出来ないから話し合っているのにと、心の中で思うカリヌだった。

「あなた、ルイズの意見を聞きませんかあの娘なら異世界の知識があるから、何か解決策が有るかも。」

打開策がなくて困っていた公爵はさっそくメイドに命じて、ルイズを呼びに行かせたのだった。

暫くするとルイズが来て、どうしたらオスマン学院長から魔法学院入学の許可を貰えるのか 何か良い解決策がないか聞いた公爵だった。

父親に解決策を問われたルイズは。  
オスマン学院長の人柄や性格等 両親に事細かに聞くのでした。

ルイズにオスマン学院長の人柄等を尋ねられた公爵は  
「いや…あれは…やる時は…やる男…だが…」  
そう言っただけでなく要領を得ない公爵でした。

それを横で聞いていたカリヌは一言  
「セクハラばかりする。」

スケベな変態爺です。　」

そう述べたのだった。

カリリーヌからオスマン学院長の評価を聞いたルイズは解決策を考えていたのだった。

（ルイズ心の声）

（変態が学院のトップ何てなんだか嫌だ！これが日本なら懲戒免職の上　刑務所行きよ！まあ　そんな変態ならあの写真集が使えるかもしれないわ。）

実はあの写真集とは、ルイズが何かに使えるかと思いつて来た某有名女優の○アー○ード写真集だった。　日本から持

「父様　また学院に行かれるのですか　。」

ルイズに尋ねられた公爵は、心配しなくても大丈夫みたいな顔をして「明日行くが今度こそ承知させる積もりだ　。」

そう言い切った父親にどこか頼りなさを感じたルイズは、ある本を切り札として持って行くように頼んだのだった。

「その本はどんな種類なのだルイズ。」

父に本のなかみを尋ねられたルイズでしたが、まさか中身が女性の裸が載っているとは言えないので学院長が好みそうな本だと言つことになりました。

明日父親が魔法学院へ行く直前に梱包した状態で渡す事にしますが、一つだけ約束事を言い渡したのだった。

「父様 さきほど話した本をオスマン学院長に渡す条件は。私の魔法学院入学許可証に学院長のサインと 学院の印章を押させてからにして下さいね。」

たかが本一冊で上手くいくとは思えない公爵でしたが。

「ここはルイズの言うとおりにするか。」

「オスマン学院長が噂通りの人なら上手くいくわ 必ず。」

そう言って、確信していたルイズだった。

話しが終わって、父の執務室を出て自室へ行こうと 廊下を歩いて  
いたルイズを呼び止める人がいました。

「ルイズ、お父様達との話しは終わったの。

なら私の部屋に来てお茶を飲みながらゆっくりしない、聞きたいこ  
とも有るから。」

大好きな姉カトレアからのお誘いにルイズは

「喜んで受けるわちい姉様。」

そう答えて二人仲良くカトレアの部屋に向かうのでした。

扉を開けてカトレアの部屋に入ると 色んな種類の動物達が二人の  
方に

『ズドドドー』

と、凄い勢いで向かって来るのを見た瞬間に姉の前に立ち 素早く  
スカートのポケットから 杖として契約した愛用の万年筆を取り出  
して、すぐに魔法を使える様に構えたルイズだった。

「大丈夫だから、この子達は私を出迎えてくれた。

ただそれだけなの、だからそれを仕舞ってルイズ。」

カトレアに言われたルイズは万年筆をポケットに仕舞うのでした。

「あいかわらずですね　ちい姉様は」

「でもねルイズ、傷ついたこの子達を見つけたら　どうしても助けたいと思うの。」

身体だけで無く、心も癒してあげたいと、それはルイズ貴女もよ。

「

突如カトレアに言われた　ルイズは少し身体がビクツとなり手が震えていた。

二人は暫く無言のままでしたが、部屋の扉をノックして

「失礼します。」

と言ってメイドが紅茶とお菓子をワゴンに載せて、入って来るのでした。

カトレアは気分を変える為に　ルイズとお茶やお菓子を楽しむことにしたのでした。

「ねえ、ルイズこのクッキーいつものと違って形も四角に味もほど好い甘さで　サクサクしていてとても美味しいわ。」

カトレアが絶賛したお菓子は某製菓メーカーのチョコスと言うビスケットで、ルイズが日本から持って来たのでした。

「ええ、ちい姉様…そのお菓子はクッキーじゃ無くて……ビスケットと言つのです…。」

先程の言葉を気にしていたルイズは。

カトレアにお菓子の説明をしている間も何処かいつもと違い元気が無かった…。

お茶とお菓子を楽しく頂いた後に、カトレアはルイズが想っていること聞き出すのでした。

「ねえルイズ、ズバリ聞くけど、貴女本当はハルケギニアに還つて来るのを迷っていたんじゃないの。」

カトレアから衝撃の言葉を言われたルイズは。  
顔が蒼白に成り、イスから立ち上がり唇をブルブル震わせていたのだった。

「やはりズボシだったのルイズ。」

再度のカトレアの言葉に対して、気を取り直したルイズは……。

「ちい姉様が何を言いたいのか判りませんが！ 私は十年もの間

夢を見る程 此処ハルケギニアに還りたかったのだからああああ  
ー。」「

そう絶叫するルイズだった。

「では、何で夢に見る程のハルケギニアに還って来たのに、時々。  
空や双月を見上げて涙を流して声も出さずに泣いていたのアナタは。  
」

カトレアの指摘にルイズは言葉も無く立っているだけだった。

(ルイズ心の声)

(隠れて泣いていたのを見られる何て、それも一番知られたくない  
ちい姉様に！。)

(これが、母様やエレオノール姉様ならごまかせるけど。  
やっぱりちい姉様には隠しきれないのか、魔法学院入学もあとチヨ  
ットなのに。)

頭の中で色々考えていたルイズだった。

「ヴァリエール家に還って来るのを迷ったことを責めている訳じゃ  
無いのルイズ。」「

カトレアの言葉を聞いたルイズはその真意を尋ねました。

「じゃあ、どう言った事ですか。」

「迷っていたのは、日本にとっても好きな人がいたのでしょうか。」

カトレアに言い当てられたルイズは、  
顔が朱く染まっていたのでした。

動揺しているルイズを見て更にカトレアは言い続けるのでした。

「ルイズの性格なら 私達のが気になるとしても、  
最後は好きな人を選ぶんじゃないや無くて。」

本心を言い当てられ茫然自失に成りながらも、キツとした眼をカト  
レアに向けて自分の想いをぶちまけるのだった。

「いくらちい姉様とはいえ！ この仕打ちはある限りじゃ無いの！  
私の本心を知っているみたいだけど。」

人は誰だっ—一つ位家族にも内緒にしたい事が有るのよ！

まくし立てる様に言ったルイズは息もあらく興奮状態になっていた。



部屋にいる動物達も何かを感じて騒ぎ出したが、何事も無かったかの様に、興奮しているルイズに近づくカトレアでした。

ルイズの正面に立ちそつと手を握り 優しく瞳をみつめた。

カトレアは

「興奮させてごめんなさい、ルイズを困らせる為に言った訳じゃ無いの。」

本当のことをしりたかったの。」

(ルイズ心の声)

(ちい姉様に隠し事を言われて、焦ってパニックに成ったけど。

これ以上は無理みたい、サイトとの事を総て話すしか無いわ。

)

恋人がいたにも係わらず、ハルケギニアに還つて来た本当の理由を才人の事も含め 総てを話す決心が付くルイズだった。

ルイズが話したさうしたら、手で口をふさいだカトレアは扉に向けて

「エレオノールお姉様、廊下に立っていたら寒いですから 部屋に入ってくださいお茶とお菓子も用意して有ります。」

カトレアは気づいていた、先程から姉が部屋の外にいた事を(所謂盗み聞きをしていた悪い子のエレオノールさんでした)。

バツの悪そうな顔をして、扉を開けて部屋の中に入って来たエレオノール。

「エレオノール姉様盗み聞き何かして！ 恥ずかしく無いの！！！」。

┌

大事な話しを無断で聞こうとしていた。

エレオノールに腹がたち、怒った様に言うルイズだった。

続く。

九話魔法学院へ入学する？ その一（後書き）

今回の話しは途中で切っており、次回に繋がっているのでご了承ください。

十話魔法学院へ入学する？ その二（前書き）

なんか無理やりに、おさめた感じの今回です。

## 十話魔法学院へ入学する？ その二

ルイズにきつく言われたエレオノールは、さっきまでのバツの悪そうな顔は何処へいったのか、眼を鋭くした顔で反論を述べるのだった。

「別に好きで聞いた訳じゃ無いわ。廊下を通っていたら聞こえてきたの？」

それに聞かれたく無い大事な話ならば、サイレントを掛けなさいよ！サイレントを。」

それに対してカトレアは

「あら ごめんなさいお姉様、サイレントを掛けるのを忘れていました。」

あっけらかんと言うカトレアに エレオノールとルイズはさっきまで睨み合っていた事も忘れたかの様に。

最初は口を開けてポカーンとしていたが、少し経ってから声をあげて仲良く笑っていたのでした。

笑って少し落ち着いたのかエレオノールは、先程の話しのなかに気になる処が有ったので、それをルイズに尋ねるのでした。

「ねえルイズ、さっきの話しで聞き捨てならないとこ有るのよ。異世界に恋人がいて、それで此処に還って来るのを迷っていたと言う事を詳しく教えてく・れ・な・い！」

椅子に座るルイズを見下ろして、少しだけきつい口調で言うエレオノール。

「……今から、総てを話します。」

それを聞いて、総てを話そうとするルイズを止めたカトレアは。エレオノールに大事な約束をさせようとしています。

「エレオノールお姉様 約束してください。」

今からルイズが話す秘密を、絶対に誰にも言わないと。

始祖ブリミルに誓って下さい。

誓えないなら この部屋から出て行って欲しいのです。」

強く誓いを求められたエレオノールは、少しムツトして反論するのだった。

「お母様やお父様も含めての事なの、だったら話しの内容次第に成るわ。」

それで無ければ 軽々しく始祖にちかえないわ。」

話し次第だと言うエレオノールに対してカトレアも一歩も譲るきは

なく、二人は互いにじつと眼を見つめ合うだけでしたが、先に折れたのはエレオノールの方でした。

「……フフフ…貴女には勝てないわ。

ふだんはポワーンとしているのに、こういう時は、絶対に退こうとはしないのだから、誰に似たのかしら。」

「お姉様の妹ですから。」

何事も無かったかの様に言うカトレアに少し呆れたエレオノール。

「まあ、良いわ。

今からルイズが話すことは誰にも言わないことを。

エレオノール・アルベルティヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエールが、始祖ブリミルに誓うことを此処に宣言します。

これで良いかしら。」

始祖に誓いをすませスッキリした顔をしているエレオノールは、ルイズが早く話したすのを待っていた。

「お姉様も秘密は守ると。始祖に誓ったのだから、話してくれないルイズ。あっ、忘れていたわ、エレオノールお姉様、サイレントを掛けてください。」

カトレアに言われてサイレントを掛けるエレオノールでした。

(ルイズ心の声)

(ちい姉様が良いと言うし、もう話しても良いのよね。でもこれから話すことを聞いたら 卒倒しかねないわ。エレオノール姉様なら。)

話しの内容が過激なだけに、お嬢様育ちのエレオノールが取り乱しはしないかと 思ったルイズだったが、開き直ったのか話し始めた。

「私がハルケギニアに還って来た。

真の理由は信じられ無いかと思うけど

.....  
.....と言う事なのです。」

衝撃の事実を聞いた二人の反応は全く違っていた。

カトレアが普段通りのおっとりした、態度だったのに対して エレオノールの方は

「そんな事は絶対に有り得ない

..... ルイズが居ないだけで  
..... ハルケギニアと異世界が

..... 崩壊するなんて  
..... 信じられ無いわ

..... 証明がつかないわそんな事。」



取り乱すかの様にルイズが語った事実を、大きな声をあげて否定するエレオノール。

(ルイズ心の声)

(ちい姉様が動じないのは流石だけど、エレオノール姉様はこう成ると思っっていたけど。

博士の説が否定されるのはムカツクからここは私が言い聞かせるしか無いわ。

「エレオノール姉様は敷島博士の説を疑うのですか！ 博士は見ず知らずの私を拾って、十年もの間育てくれたのに あまつさえハルケギニアに送り返してもくれませんでした。

ヴァリエール公爵家に取っては、大恩人では無いですか！ それでも誇り高いトリステイン貴族と言えるのですか！」

まくし立てる様に言うルイズですが、貴族の誇りとか世話になった恩人と言ったことに弱いエレオノールに。

搦手から訴えて、強引に押し切るうとする。ルイズだった。

「でも、時空間とか 素粒子何て言われても ハルケギニアではそんなの、今まで聞いた事も無いわ。 」

最後まで反論するエレオノールですが、ルイズの更なる言葉に何も

言い返すことが出来なかった。

「そう言う事は、私の様に円周率や整数、分数、連立方程式などが出来てから、言うて欲しいわ！　。」

エレオノールがアカデミーの연구원とはいつても、魔法だけが重視されていて、数学等は発達していないハルケギニアのレベルと。日本で小、中の義務教育プラス敷島博士による高等な知識を授かったルイズでは次元がちがうと言うのだ。

「お姉様、ルイズもそんなに熱くならないで　少し休憩してお茶にしましょう　。」

そう言うて、カトレアは魔法のベルで呼びだしたメイドにお茶が冷めたので、新しいのを用意させた。

「ルイズが持ってきた　このお菓子もそうだけど、腕に巻き付ける小さな時計や見たこともない材質で出来たペン等、異世界の技術がすぐれているのは認めるわ。悔しいけど。」

お茶を飲んでおちついたのか、お土産のペンや腕時計を評価するエレオノール。

「さっきは話しが途中で終わったけど、姉様達が一番しりたかった事をこれから話すわ。」

そう言っただけで、才人とのあいから、別れるまでを話したルイズ。

「最初のころは、ガサツで礼儀しらずのいやな奴だと、思っていたけど……。」

最初であいは最悪だったと言うルイズに対して、カトレアは先読みしたかの様に。

「最初はきらっていたけど、そのうち彼の優しさやまっすぐな程熱い心に少しずつ惹かれていったのね。」

「なっ、なんで…そそそれを…知っているのぉー。」

これから話そうと、していたことを、なでカトレアが知っているのか、驚愕したルイズ。

「あら、そんな事くらい判るわ。ルイズの性格からしたら、不器用だけどまっすぐで熱い心を持った人を好きになること位。」

（違ったこともないサイトの性格を言い当てるなんて、ちい姉様って、人間なの。）

才人の人となりを言い当てたカトレアに驚きつつも、話しを進めるルイズ。

「最初のころサイトとは、剣術のけいこ帰りに一緒に食事をするだけの仲だったのだけど、段々となが深まっていくうちに、キスしたり、抱き合うようになったの。」

ルイズと才人の色事の話しをきいても、落ち着いているカトレアに比べて、顔を真っ赤にして手をつよくにぎりしめ、肩をふるわせていたエレオノール。

「ち、ちびルイズ…な、なななんてーハ、ハレ…。」

「お姉様！だまってさいごまで。ルイズの話しを聞きましょう。」  
カトレアに咎められ、しづしづ話しを聞くエレオノール。

（一時はどうなるかと思ったけど。  
流石はちい姉様だわ、エレオノール姉様の扱いはこころえたもの  
ね〜。）

ウン、ウンと小さくつぶやきながら、独りなつとくしているルイズ。

「うみに泳ぎにいったり、遊園地であそんだりとか、色んな所でデートを楽しんだわ。」

「意味が判らないことばが出てくるけど、彼とルイズはなかよく過ごしていたのね。」

カトレアのことばに、才人との日々を想いだして少し頬を染めるルイズ。

「そして、私がハルケギニアに還れる日取りが判ったとき、もう二度とサイトに逢えなくなると想ったら、ある計画が頭のなかに浮かんだの。」

ルイズのそのことばに、まさかと思いつつも、ある一つの事が浮かんだ、カトレア。

更にルイズの告白は続いていった。

「このまま、ハルケギニアに還ったら、一生サイトに逢えないと想ったら、彼との愛の絆ながほしくて、ヴァリエール家に還る二日まえの超危険日な夜に、私の初めてを捧げたの。」

「やはり、そうだったのね。」

そう言って、困った顔をしてルイズを見つめているカトレアなのでした。

「ル、ル、……ルイズ、な、なんて事を……した……のか、判っているの！ も、もう、オシマイだわ。」

「こ、この事が、せ、世間に露顕したら、このヴァリエール公爵家の名譽があああー」。」

婚礼前に男と女が関係を持つのを、汚らしいと考えている。

トリステイン貴族の女性筆頭である、エレオノールからすれば 頼にもよって、ヴァリエール公爵家の三女であり、妹のルイズが、そのような事をするのは。

青天のへきれきなのであった。

「落ち着いてください。エレオノールお姉様。」

とりみだした姉をなだめるカトレア。

「こ、これが落ち着いて、いられる訳なんてないわよ！」

「私はこちらはしない。好きなひとと、結ばれたのだから。」

更に、火に油を注ぐようなことを言うルイズに対して、エレオノールは

「なまいき！　いつてるんじゃないわよ！　おちびーあんたの恥さらしな行為がどれだけ、母様や父様に。めいわくかけると思っているのよおー」。

「そんなことは判っているの、母様、父様や姉様達にめいわくを掛けることは。それでも確かなものが…ほしかつたのよ！　サイトがない人生なんて、そのつらくて哀しくて、とても独りで生きていけないの……。」

ルイズは二人の姉に、心のなかにある　色々な想いをぶつけるのだった。

「ごめんなさい、誰にも言いたくなかったんでしよう。」

それなのに言わせてしまつて……でもね、ルイズこれからどうするつもりなの。赤ちゃんを宿しているかもしれないのに。」

衝撃的なカトレアのことばに、めまいを起こしかけて　椅子から落ちそうになるエレオノール。「お願いよ。この事は、母様や父様にはだまつていてほしいの。」

エレオノール姉様、ちい姉様。」

両親には秘密にするように頼むルイズ。

「でもねルイズ、いずれは判る事になるのよ。その時のことは考え  
ているのかしら。」

はつとした様に何かに気づいたエレオノールは、ルイズに問い質す  
のであった。

「総て判ったわ。あのお父様のことだからこの事を知ったらルイズ  
の将来を考えて墮胎させようとするのを、阻止するために、別に行  
きたくもない魔法学院に、無理してでも入りたいのは。これが理由  
なのね!。」

エレオノールに言い当てられても、まったく動揺しないルイズ。

「そうよ、それが悪いことなの。」

開き直るルイズにア然としているエレオノール。

「先程の質問にまだ答えてもらっていないわ、ルイズ。」



「もし赤ちゃんを身ごもっているのが判り。おろさせ様としたら貴族の名を捨てて、ごどもと一緒に生きていくわ。」

ばれた時は子とふたりで平民として生きると言うルイズ。

「そこまで考えているのね。もう、わたしは何も言うことはないわ。ルイズが決心しただから。」

自分で決めたことだから後はすきにしなさいと言ったカトレア。

「カトレアはそれでいいと言うの！ わたしは反対よ。大事な妹が不幸になることが判っていて見過ごす事なんて、できないは！」

まるでルイズの人生がメチャクチャになると決めつけている。エレオノール。

「ねえ、お姉様、まさかとは思いますが、始祖に誓ったことを忘れてはいませんかよね。」

極上の微笑みをした顔でエレオノールを見つめながら、問い質すカトレア（眼は笑ってはいなかった）。

「も、もちろん。」

始祖への誓いを忘れてはいないわ。」

カトレアから立ちのぼる、黒いオーラがみえて、ビクついていたエ  
レオノール。

この後も、まだ納得できないエレオノールがルイズと言いついて合  
っていたのをカトレアが間にはいり、姉をなだめて承諾させたのだ  
っ  
た。

続く。

十話魔法学院へ入学する？ その二（後書き）

次回は、オールドオスマンが登場します。

十一話魔法学院へ入学する？ その三（前書き）

話しが中々前に進まない、このペースで行くと才人の召喚はまだまだ後になる。

## 十一話魔法学院へ入学する？ その三

此処は、ヴァリエール公爵家の邸内

「父様、これが切り札になる本です。」

そう言って、ルイズが渡したのは嚴重に梱包された物でした。

「おお、これが例のモノか、この本があればオスマンの爺もくびを縦にふるだろう。」

喜色満面の公爵。

「あなた、お願いしますわ。ルイズの将来のためにも。」

ルイズのことを思っているカーリーヌでしたが、母のおもいは娘には届いていなかった（何かあれば家をとびだして、シングルマザーになるのを躊躇しませんから）。

「行ってくる。吉報を待っていないさ。」

「がんばって、父様。」

「うむ。」

愛しいルイズの声援をうけて、表情は普段通りだったが、こころのなかには嬉しさで、フニャフニャになっていた公爵。

「いつてらしゃいませ公爵様。」

ジェロームを筆頭に家臣や使用人総てに見送りされて、魔法学院へ向かう公爵でした。

父を見送るルイズは、心のなかで考えていた。

（父様、私のために絶対にOKをもらってきてね〜親不孝な娘だけど。）

いろいろ考えていたルイズさんでした。

### トリスティン魔法学院

此処は首都トリスタリアから、東へ馬に乗って約2時間の所にある。

本塔を始めとして、火の塔、風の塔、水の塔、土の塔と五つの塔を  
囲む。高い石の壁から成り立つ、トリステイン魔法学院である。

本塔にある、学院長室にヴァリエール公爵が、入室して来た。

「また、来られたかの〜ヴァリエール公爵殿。何度きても無駄じゃ  
というのにお〜。」

ブチッと、公爵の前でも、平気で鼻毛をぬくデリカシーのかけらも  
ない。オスマンの爺であった。

「オスマン殿、今日こそルイズの入学許可を認めて貰いますぞ  
。」

「じゃから何度も言うてる様に、今年度の受付は おわとつるのじ  
ゃ。いい加減にしてくれんかのお〜。」

今年募集を締め切ったから、もう来るなと言うオスマン学院長。

「なにも、ただで入れてくれと言うわけでもない。モチロン入学金  
や三年間の授業料は全額 前払いでおさめるし。寄付金もそちらの  
言い値どおり払おう、更に、オスマン学院長個人には、とくべつな  
本を一冊進呈したいのだが。」

ヴァリエール公爵が寄付金をだすと言ったら、それまで顔に手をつけてボケくとして興味なさそうに聞いていたオスマン学院長は、急にいをただして眼を光らせるのだった。

ミスタ・ヴァリエール。本当にこちらの言い値で、寄付金を貰えるんじゃないかのおくそれに儂個人に凄い本をくれるとは、豪勢じゃのおく。」

「うそは言わん。だが、それもルイズをこの魔法学院入学を認めてくれるのが絶対条件だ！」。

ただではお金を出さないと言う公爵。

それに対してオスマン学院長は、もうひとつオマケをつけると言った。

「仕方がない。実はルイズが入学してから、頼もうと思っていたのだが。余っている場所があれば貸して欲しい。娘がいろいろ研究するための施設があるのだ。」

それを聞いたオスマン学院長は「場所は余っているが、何に使うのじゃ。」



「ルイズの研究品をヴァリエール家出入りの商人達を使って、量産して売ろうと思っている。  
そのためには、サンプルと言う物を作る設備と広い倉庫がいるのだ！。」

それを聞いたオスマン学院長は、不思議そうな顔をするのだった。

「それがこの学院と何の関係があると言うのじゃ。」

学院長が食いついてきたと思い、内心ニヤリとしていた公爵だった。

「オマケをつけると言っただろう。ルイズが開発した製品の年間売上金の5%がそれだ。」

こ娘が作った物の利益など、たかがしれてると思っていた  
(後にルイズの開発した物が爆発的に売れて、利益が転がり込むと百八十度態度を変えるのだった) それよりも特別な本の方が、気になるオスマンだった。

「のお、ヴァリエール公爵殿、儂に比べると言う本をチョットだけ見せてくれんかのお。」

見せると言った、オスマン対して公爵は「まだ、貴方のものではないのだが。」と、切り返していた。

「中身も見ないで決める者も、おらんじやろ。のおく公爵殿。」

本の中身を確かめさせないと、入学はできないと。公爵を脅すオスマン学院長だった。

脅しに屈するのは抵抗があったが、これも可愛いルイズのためだと思ひ、梱包を解いて本を渡した。

本を受け取り。さっそくページをめくって見た、オスマンは。

『ブツシューー』

「な、ななななんーとおーとんでもないのじゃーこの本はー。」

大量の鼻血を出しながらも、驚愕していたオスマン（モチロン大切な本は汚さない様にしていた）。

本の中身を知らない公爵は、オスマン学院長が突如 鼻血を出しながら喚くので、イカレタカと思ひ本の中を確認した公爵は……。

「ル、ルイズは、何と言うものをワタシに持って来させたのだ！」

トンデモない本を持たせたルイズに怒る公爵だが、それは表面だけで、顔はもの凄く嬉しそうにしていた。

「こ、公爵殿、こ、これは…所謂…場違いな民芸品なののおくそれにしても、まるで本物のおなごを見ているようじゃー。」

鼻血をハンカチで押さえながら、目尻をさげた だらし無い顔で、裸の女性が写っているページをジーと見ていた。  
スケベ々な。オスマンの爺だった。

(ダメダこりゃー)

「オスマン殿、もう確認もしただろう、さあ早くこの入学許可証に、オスマン殿のサインを書いて魔法学院の印章をおして欲しいのだ。

だらし無い顔をしていないで、サッサとしろと言う公爵。

「はあくなんのことじゃーワシゃーまだサインを書くとも、印章を押すともいつとらんよ。」

あくまで惚ける気のオスマンに対して公爵は、怒りだした。

「ここまでしているのに駄目だと言つのかああーオスマン殿！！  
」。

公爵の激しい怒りを浴びても、平気な顔をしているオスマン。

「余り、カツカしなさんな公爵殿。 血圧が上がるぞ。」

誰せいだと、思っているこの爺め！と、心のなかで呟く公爵。

「なにもルイズ嬢を入学させんとはいつとらんよ、ワシヤ。」

「なにか思惑があるのか？」。

こいつは何を考えているのか、そう思う公爵だった。

「察しが良いのあーヴァリエール殿は、ようはもう一つオマケを付けて貰いたいのじゃ。」

それを聞いた公爵は

「人の足もとを見をって、この強欲爺め！」

と、小さな声で呟くのだった。

「オスマン学院長、ひとつ言いたいことがある。魔法学院は此処だけではなく、ガリアのリユティス魔法学院も有れば、気が進まないがゲルマニアのヴィンドボナ魔法学院だって有るのだ！」

オスマンの返答次第では、こちらにも考えが有ると、イスから立ち上がり言った、ヴァリエール公爵。

「まあ、まあ、そういきり立ちなさんな、公爵殿。先ずはいすに座りおちついて話そうのお。」

まだこれでは不十分だと思い、座りながら次の手を考えた公爵。

「ルイズがトリステイン魔法学院に入学しないのなら、寄付金も払わない。」

モチロンその本も進呈しない！」

大事そうに抱えている本を、くれないと 言った途端 情けない顔になるオスマンの爺だった。

「いやじゃ、いやじゃ、こんなに素晴らしいお宝を、後生じゃあ老い先短いこの儂から取り上げんでくれ。たのむ、このとおりじゃ、な、な、公爵殿。」

駄々をこねて、最後にはプライドもなく。皺くちな顔を更にしわくちやにして、両手を合わせ 深く頭を下げて、公爵に頼む  
(こんなジジイいらねー誰か海に棄ててくれと言っ程の)  
情けないオールド・オスマンなのでした。これを見た公爵は、こんなプライドのかけらも無い奴に頼んでいたのかと思い、自分自身にハラガタツ公爵。

「誰も、オスマン殿からその本を取り上げはしない。ただし、これにサインと印章をしてくれたらな。」

そう言って、学院長の目の前に入学許可証をさしだすと、引つたくる様にサインを書き、印章をおすオスマンだった。

これで漸く肩の荷がおろせる公爵は、オスマン学院長と握手をしながら、しばらく大きな声で笑っていたのでした。

場面が変わって、こちらはヴァリエール公爵家屋敷内のテラス

カリーヌ、エレオノール、カトレア、ルイズの四人で午後のひと時をお茶とお菓子で楽しんでいた。

「おちび、これはどう使うのかしら。」

ルイズにもらった、ソーラ充電のミニ計算機を持って、使い方を尋ねるエレオノール。

「エレオノール姉様、ハルケギニアと日本では数字がちょっと違うの、だけどコツさえ覚えたら、どんな複雑な計算でもできるの。」

「ルイズその計算機と言うものはよく判りませんが、テーブルの上に置いて有るのは、短銃と剣ですね。どちらも変わった形をしますが。」

ルイズは母の興味を引いた銃と刀を詳しく説明するのでした。

「これはワルサー PPK という自動拳銃で、この九ミリACP弾を七発入れた弾倉を拳銃のグリップ底部から挿入して押し込みます。後は安全装置をはずしスライドを手で、てまえに引いて初弾を薬室に押し込んで照準をつけ、引き金をひくだけです。」

弾丸の装填から撃ち方まで、ワルサー PPK を使ってみんなに見せたルイズでした。

「ずいぶん物騒なのね、拳銃と言うのは。」

カトレアの問に対してルイズは、物騒な品物でも四人のメイジを相手にしても互角に戦える。拳銃とはそういうものなのです。

「銃のことはよく判りませんが、こちらの剣からは この母の眼から見ても、膨大な魔力みたいなものを感じるのです。」

カリー又はルイズの愛刀である、備前長船 雪風を初めて見たときから、尋常でわかない力を秘めていると、見抜いたのだった。

「母様の言う様に、この雪風はもの凄い力を秘めているの。」

私も、余り詳しい経歴は知らないけど、雪風を授けてくれた敷島博士が言うには、昔戦乱の時代 日本国のある地方に有力な貴族がいて、その者にはやつと授かった一人娘がいたのよ。でもその娘は生まれつき変な力を秘めていたのよ、だけどその力のせいで身体が弱く、しかも、魔のものを引き寄せる体質だったの、それでその貴族は愛娘に、魔のものを寄せ付けない護り刀として有名な刀鍛冶に、作らせたのがこの雪風の由来なのよ。」

「話しどおりの強力な力を秘めているから、ヴァリエール公爵家の恩人、礼次郎敷島殿が、ルイズの護り刀として持たせてくれたのですね。」

先程から、瞳をキラキラ輝かしているカリー又は、時折ルイズの方を見てなにか言いたそうにしていた。

（さっきから母様が私をチラチラ見ているのは、気のせいよね……）



まさか、雪風を持ったわたしと手合わせしたいなんて事は、ない……  
わよね……たぶん。)

ルイズの悪い予測が当たったのか、不意にイスから立ち上がったカリリーヌが、手合わせと言う名の死合を申し込んできたのです。

「あ、あの、母様、手合わせはいつもやっているから、新たにする必要なんてあるのですか。」

ルイズは、手合わせと言う名の地獄を回避しようと思ひ、必死になつてカリリーヌにやめさせ様と、しましが、モチロンそんな事が通用するわけも有りませんでした。

なにを言っているのですか、ルイズ。普段は木刀しか使ってくれませんが、一度その剣、雪風を持ったあなたと全力を出し合つて、手合わせをしたいのです。

様はこつちも、全力全開でいくから、お前も死ぬ覚悟でこいと、死刑宣告を告げるカリリーヌなのでした。

その言葉を聴いたルイズは顔は蒼白になり、全身は小刻みに震えていた。そして助けを求める様にカトレアを見たのですが……

「私に助けを求めても無駄よ、お母様は一度こうと決めたら撤回しないわ。」

諦めていつてきなさい、後は任せて水メイジのひとを待機させてお

くからね。」

(なにが、ね、よ。ちい姉様の裏切り者。こうなったらエレオノール姉様に縋るしかないわ)

そう思つて最後の誓、エレオノールを見つめるルイズでしたが……。

「あ、そうだ、わたし、用事があるの、忘れていたわ、お先に失礼しますわ。」

余りにもわざとらしいことを言つて、この場所を立ち去ろうとするエレオノール。

「私をみすてるの！エレオノール姉様ー！」

藁にもすがる様にエレオノールへ助けを求めたルイズだったが……。

「わ、わたしじゃ無理、無理なのよー死なない様に、祈っているからーあきらめて、ね。」

あの母に逆らえるわけがないので、期待するなと言つたエレオノールなのでした。

(エレオノール姉様も駄目だったわ、なんか母様はいつもより、力

がはいってる感じだし。ああ、いや、いや　なんで私がこんなめにあつたのよ〜普通十年ぶりに再会した娘を、全力で叩き潰す母親が何処にいるって言うのよ！　本当なら今頃サイトと、うつぶ、キヤキヤのあまい関係になつていのにー。」

強い者を見ると、手合わせ　せずにおれない。困った母を持ったと思ひ、諦めるしかないルイズだった。

カリィヌに連れられ鍛練場に来たルイズは、母に尋ねるのだった。

「母様、ほんとうに、手合わせするのをお〜正直に言つと、やりたくないんだけど。」

ぶつちやけやる気がないルイズ。

「ルイズ、この母が一度きめたことを、やめると思いますが。」

そう言つて、ニッコリ微笑むカリィヌなのでした。

「お、おもわないけど、私の身体が持ちません。」

いっぱい、いっぱいだから、止めてと言うルイズですが…。

「ひとの身体は、そう簡単には壊れませんよルイズ、それにあなたは異世界でかなりの修行をしていたのでしょう。だから大丈夫です。私の娘ですもの。」

そう言つて、杖を構えるカリーヌ。

「さあ、ルイズ、手合わせをはじめから、何時でもかかつて来なさい。」

今から始めるから、全力を出せと言つカリーヌだった。

もうこうなつたらやるしかない。思ったのか、愛用の万年筆又は杖を左手に持ち、右手で愛刀雪風を持つて構えるルイズ。

「ルイズ、やっと踏ん切りがついたのね。」

そう言うが早いのか、素早く呪文を唱えエアハンマーをルイズに向けて、放つたカリーヌ。

風の塊がルイズめがけてやってくるが、大気の流れの中心点を瞬時に見抜いていたのか、そこへ向けて雪風を抜き手も見せず、音速のような動きで水平に振り払い魔法を消滅させた。

「やはり、その剣はかなりの力を秘めていたのですね。それともあなたの力ですか。」

カーリー又は素直に雪風とルイズの能力を認めるのだった。

「母様、私達の力はまだまだこんなものじゃ無いから。」

私達はこの程度じゃないのよと言うルイズに対してカーリー又は……。

「そうですね、ルイズはまだやる気十分なのです、力の片鱗を見たので今日はここまでにしようと思いましたが、あなたがやる気ならこちら全力でやらして貰いますよ。」

ギッタギタにしてやるから、覚悟しろと言うカーリー。

その言葉を聞いたルイズは茫然としていた。

(えっ、なによこれ、もしかして私が余計なことを言わなきゃ、さっきで終りだったのにいーわたしのバカバカカーハア〜どうしよう)

余計なことをいった自分の馬鹿さに、落ち込みそうになるルイズなのでした。

それからカリィヌの容赦がない訓練と言う名の攻撃を受け続けて、身も心もボロボロになりながらもなんとか 気力だけで立っていたが、それも後一回位の攻撃をする分しか残っていないのだった。

「ハア、ハア、ルイズ、お互い後一回位の力しか残っていませんね、勝負は次の一撃で決まります。だから悔いなくやりましょう。」

ボロボロになっていたカリィヌも次で最後になると言うのでした。

「ええ、良いわ母様、最後に私の奥義を見せてあげるから。」

そう言うルイズも、次の一撃に賭けているのだった。

カリィヌは残っている精神力の総てをだして、カッタートルネードを放つのだった。

それに対してルイズも、旋風稲妻切りを繰り返すのでした。

『ズゴゴゴゴオオoooooooooo』

と、凄まじい轟音とともにカッタートルネードがルイズに襲い掛かれば、『ビシューーンズバズバガラガラガシャーーン』  
と、奥義旋風稲妻切りが炸裂したのだった。

ちょうど、ルイズとカリーヌの真ん中の上辺りで、衝突した二つの力は触れた瞬間に、炸裂してかなりの大きさのクレータを作りだした。モチロン、ルイズとカリーヌも無事に済むはずもなく、両方の力がぶつかった時に発生した衝撃波をまともに受けて、二人とも気を失って倒れていた。

大きな音がしたので、少ししたら警備隊員や使用人が来て、ルイズとカリーヌをそれぞれの寝室に運び、寝かせるのでした。

続く。

十一話魔法学院へ入学する？ その三（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。これからはストーリー上、ネタバレになる質問は受付出来ないのでご了承下さい。



十二話魔法学院へ入学する？ その四（前書き）

なんか、キャラのイメージが中々浮かんでこない。

## 十二話魔法学院へ入学する？ その四

あさのまぶしい光りが白いレースのカーテンを通り抜けて、照らしている場所は。ヴァリエール公爵家三女、ルイズ・フランソワーズの寝室でありました。

「ううん、あれ、此処は……私いつの間に自分の部屋に戻っていたのかな？ たしか、旋風稲妻切りを母様に放って以後の記憶がないわ。」

ルイズが独り言を呟いていると、コンコンとノックの音とともに、扉を開けて入って来た人物はカーリー又ななでした。

「か、かあさま。」

チョットびっくりしたルイズ。

「おはようルイズ。」

「おはようございます母様。」

「昨日は嬉しかったのですよ。あなたの力を見て。」

それを聞いたルイズは、少し嬉しくなっていた。

「まだまだ私なんて、母様にくらべたらたいした事ないから。」

「謙遜しなくて良いのです。この母とあそこまでやり合えるのですから。」

烈風カリンと互角に闘えるから、誇っても良いと言うカリィヌ。

「朝早くからなにか様なの、母様。」

用件を尋ねられたカリィヌは…。

「昨日夜遅く、あのひとが魔法学院から戻ってきました。朝食の席でルイズにお話があるそうです。」

テラスで朝食を取るヴァリエール公爵家の人達。

「喜ベルイズ、魔法学院入学が決まった。」

「本当なの〜父様。。」

「ハハハ、嘘を言っただうする。ほらここに書いてある様に、オスマン学院長のサインもしてあるだろう。」

確かに入学許可証にはサインと、学院の印章がしてあった。

「これでわたしも学院に入れるのね。」

最初の難関を突破して喜ぶルイズ。

「入学おめでとうルイズ。」

「先ずはおめでとうと言いますルイズ、学院にいつても精進を怠らない様に、良いですね。」

「おめでとうおちび、これで漸くトリスティン貴族としての教養を受けられるのね。頑張りなさい。」

「ねえルイズ、これから進む道は、困難が待ち受けているけど、それでもあなたは突き進んで行くのでしょう。本当はいつて欲しくないの、家族だから心配なのよ。」

両親と二人の姉に色んな励ましの言葉を貰い涙ぐむルイズでした。

テラスでの朝食も済まして寝室に戻り、暫くぼ〜としていたルイズ

ですが、急になにかを思いだして倉庫からある物を持ってきて、準備してボタンを押すとハルケギニアでは有り得ないメロディーがながれていた。

それを廊下を歩いていったエレオノールが聴き、発生源をたどっていくと、ルイズの部屋から聞こえていたので扉をノックして入っていたのでした。

「おちび、それは何なのかしら。」

そう言ったエレオノールが見つめる先にあるのは、ハルケギニアではお目にかかれないCDラジカセと言われる物だった。

「エレオノール姉様、この機械はこれの中にいれて有るところを押すと、音楽が流れてくるの。」

ルイズがCDラジカセの使い方を説明しますが、なにがどうなっているのか、判らないエレオノールなのでした。

「これって日本と言う国で作られた物なの、変わった材質を使っているみたいだし。」

コンコンと叩いたり色んなところを触りまくったりして、興味津々

のエレオノールなのでした。

「姉様、余り叩いたり弄ったりしないでー壊れるから！」

そう言っつて抗議するルイズだったが、まったく取り合わないエレオノールでした。

「ルイズ、これはどうやって動いているの、教えなさい。」

（なんて、強引なのよーこれは説明しないと、此処から動かない気ね。しょうがないか。）

ルイズは教えないと、居座る気満々のエレオノールに仕方なく説明するのだった。

「これはCDラジカセと言って、円形のひらべったい板を、あるボタンを押すと中からトレイみたいなものが出てくるから、その上にのせてさっきの同じボタン押せば準備完了で、後は、こっちのボタンを押せば音が聞こえるの。」

更にルイズは説明を続けて、ハルケギニアに電気は通っていないので、今は乾電池と言う物をセットして動いている事を言っつのでした。

「ねえ〜ルイズ〜お願いが有るのだけど〜聞いて、く・れ・る・か・し・ら。」

可愛い仕草をして猫撫で声をだすエレオノールに、それを見たルイズはゾワ〜と、身体全体に毛虫が這うような悪寒を感じているのだった。

「お、おねがいつてな、なんですか、ね、姉様。」

嫌な予感がしたルイズ。

「たいした事じゃないのよ、そのCDなんとかと言う物を寄越しなさい。」

(なにが、たいした事じゃないのよっだ、なめんじゃないわよ！  
このアマア〜と、口にだして言えたら良いのに。)

そんなことを言えばエレオノールの頬つぺたツネツネ攻撃が、炸裂するのでいえないのだった。

「あの、姉様、これは一台しかないとても貴重な物なので、あげる訳にはいかないの。」

それを聞いたエレオノールは、トンデモナイことを言ったのだ。

「ルイズの物はわたしの物。私のモノもわたしのモノなのよ！だからそれは私が所有者なの。判ったおちび！」

どっかの世界から

「あんたは、ジャイアンかー。」  
と、言った誰かの声が聞こえてくるのでした。

「なに馬鹿なこと言ってるのよーこれは、博士がわたしに買ってくれた大切な物なの、あげれるわけ無いでしょう。」

余りにも勝手な姉の言い分に、憤慨するルイズ。

「わ、わかったから、そんなに怒ること無いでしょう。」

余り反省していないエレオノールなのでした。

「判ってくれるならそれで良いけど。」

「あのね、代わりと言っては何だけど。これと、あれも、あ、そっ  
ちのほづが良いかな……。」



CDラジカセの代わりにエレオノールが要求したモノは。高級ブランドデー一本、麦焼酎二〇堂一本、缶ビールロングサイズ六本、高級蟹罐詰二個、コンビーフ二個、シーチキンファンシー二個、サケ罐二個、さんまの蒲焼き罐詰二個、フルーツミックス罐詰一個、白桃罐詰一個、みかん罐詰一個、フ〇タの徳用チョコ一袋、森〇チョコ一箱、明〇八〇ミ〇ク二枚。

食いしん坊なエレオノールさんなのであった。

「どんだけ持っていくのよ！ 姉様は。」

欲張り過ぎると言う妹に、言い返すエレオノール。

「違つもの。これはアカデミーの同僚にお土産として持っていくのよ。自分が楽しむためのものじゃないの、たぶん。」

これは人あげる物で、自分用じゃ無いと弁明するエレオノール。

本当かどうか、怪しいと思いつつも、まあ、良いかと思うルイズ。

「アカデミーの皆さんと一緒に召し上がってね。」

「あ、ありがとうルイズ。」

「それより、書き物の途中じゃ無かったのおちび。」

チヨット気まづくなつた雰囲気を変えるために、ルイズに尋ねるエレオノール。

「ああ、これは父様に出す領地改革に関する意見書なの。」

領地改革という言葉に興味を示したエレオノールは、更に詳しく聞くようにする。

「ねえおちび、それって、どう言うことなのか、この私に判る様に詳しく教えなさい！」。

ごまかしたら只じゃおかないと言う姉に、タジタジになるルイズ。

「判つたから、そんなに睨まないで、ねえさまあ。」

- 一つ煙草を栽培して紙巻きタバコを生産する。
- 一つ領内に平民用の汲み取り式公衆トイレを設置する。
- 一つトイレから出る汚物を集め発酵させ農業用の肥料とする。
- 一つ平民用の公衆浴場を設置する。
- 一つ領内に戸籍制度を創設する。

一つ平民の識字率普及の為に第一段階：初級学校三年間。第二段階：中級学校三年間。第三段階：上級専門学校三年間。別に職業訓練学校一年間。等の教育を施す。

(義務教育ではなく、やる気のある者中心の志願者制度)

一つコークス高炉、反射炉、ベッセマー転炉、蒸気機関等を使った、製鐵所を作る。

一つ製塩所を作る。

一つ医療制度を整える。

一つ造船所を作り海用の船と空用のフネを建造する。更に飛行船を建造して未開地域の探索に用いる。

一つ大豆を栽培して酢、マヨネーズ、醤油、味噌等を作り各種料理を開発する。

一つ道を新しく普請して領地内の街道を整備する。

一つ領地内の治安を強化する。

一つハルケギニア中から平民メイジを技術者として採用する。

(とくに、水メイジと土メイジ)

一つ既存の銃を改良進化させて、ボルトアクションライフル銃と回転式拳銃を開発する。

一つ駐退複座機を備えた後装式の大砲を開発する。

無煙火薬を開発する。

馬車鉄道を領地内に敷く。

王家から海辺を租借して入り浜塩田で製塩を始める。

一つ貴族や大商人用に水洗トイレを開発する。

一つ製紙工場を作り大量生産をめざす。

(低級和紙からちり紙を作る)

黒鉛筆や色鉛筆と消しゴム、小型鉛筆削り器等を作り売る。

「なによコレーこんなのお父様が、認めるわけないわよ！」

「父様が認めるんじゃ無くて、私が認めさせるの。」

自信満々の顔をして言い切るルイズ。

「あなのね、余り言いたく無いのだけど。これ総て実施したら膨大な位お金を注ぎ込むことになるんじゃないの。」

こう言うのに詳しくないエレオノールでも、莫大な資金を使う事になるのが判っていた。

「そんなの判っているわ、今は父様が健在だから良いけど、娘としては言うてはいけないけど、何時までも有ると思うな親と金。」

「おちび、お父様の事をそんなふうに言うなんて。」

エレオノールは物凄い言葉を使ったルイズを窘めるのでしたが。

「これは、父様への悪口じゃない！ 日本の諺なのよ。」

そう言われても、納得できないエレオノール。

「私が言いたいのは、十年先、二十年先のことを考えていて欲しい

の。」

ここまで言ってもまだ判らない姉に、更に言うルイズだった。

「簡単に言うと次期ヴァリエール公爵は、姉様の結婚相手になるのよね。その相手が領主として無能だとしたらどうするの。私は一人でも生活費を稼ぐ自信はあるけど、姉様達はできないでしょう。」

何気なく酷いことを言うルイズですが、箱入り娘として育ち世間知らずな姉達が心配でならないのでした。

「そ、そんなの結婚しなきゃ判らないわよ。」

「後から判っても手遅れなの。そうなくても大丈夫な様に今から盤石な体制を整えておくの。そうする為に意見書を書いているのよ。」

カスを捕まえても領地改革をして、有能な者を何人も起用して側に置けば後は何とかなると言うルイズ。

「ルイズが私達の先行きを考えられていることは嬉しいのだけど、何気に男を見る目がないと言いたいのかしら。」

「え〜だって、本当の事でしょう。姉様が何回も婚約破棄されてる

のは。」

あわわ、それを言ったらどう成ってもしりませんよルイズさん。

妹から婚約破棄の言葉がでた途端、エレオノールが地獄の鬼も裸足で逃げ出す程の恐ろしい顔をしてルイズに近寄り、両手を使い思い切り力を入れて両方の頬をツネって引っ張る高等技を繰り出すのであった。

「ねえひやま〜シヒヤイノ、ホベかしひやいの、ゆるじで、のういなひやいかだ。ホベか、いしやいのねえひやま〜。」

哀れルイズは、エレオノールの怒りをかい、頬つぺたツネツネ攻撃を受けるのだった。

「ねえ、わたしはなんて幸せなのかしら〜姉思いの妹を持って、こ・ん・や・く・は・き・の・事まで!!!!心配!!!!して!!!!くれる!!!!の!だから!!!!。」

そう言っつて、更に力を入れてルイズの両頬を捻りあげるエレオノールさんでした。

「いひやい、いひやい、もどにひよ、しわひやいかだ、ゆるじで、ねひやま〜。」

余りの痛みに涙がでながらも、姉に許しをこうルイズなのだが……。

「まだ駄目よ！ 可愛い妹にお仕置きと言つ名の、愛情をタップリしてあげているのだから！」。

まだまだ終りそうに無い、エレオノールのお仕置きなのでした。

トリステイン魔法学院の入学式を四日後に控えていたルイズは、今日ヴァリエール公爵家を旅立ち馬車で二日程揺られて、魔法学院へ向かうのでした。

屋敷前には六頭立ての豪華絢爛の馬車が用意されていた。

更に後ろにはルイズの服や身の回りの物を積み込んだ馬車が続き、それらを護衛するのがヴァリエール公爵家警備隊、副隊長のポルトス・ド・レイノー以下十五名のメイジに、平民の一般兵二十五名と四十人が待機していた。

ルイズを見送るためにヴァリエール公爵夫妻。カトレア（因みにエレオノールはアカデミーに戻っていて、いなかった）更に使用人全員が勢揃いしていた。

「しっかり、頑張ってくるのだ。父は…父は…淋しいぞ、せつかく帰って来たというのに、離れるなど嫌だあああー！」

ルイズと離れるのがいやで、駄々をこねるヴァリエール公爵でしたが……。

「あなた！何をしているのですか！ルイズの晴れの門出だというのに駄々をこねるなど、情けない！それに最近貴方は娘ばかりで、ちつとも私の事を構ってくれないのだから、今夜は久しぶりにたっぷり朝まで愛して貰いますからね。」

最初は夫を窘めていたのが途中から愚痴になり、最後は夜の奉仕を要求していたカーリー又だった。

「お、おまえ…そ、そんな、無茶苦茶なあ、ワタシに死ぬと言うのかあ……。」

一晩中やったら死ぬと、訴える公爵なのですが。

「貴方の意思など関係有りません。」

カーリー又に否定されるのでした。



（相変わらず、母様には頭が上がらないんだから、父様は。ハア〜）

情けない父親に、心の中でため息をつくルイズ。

「ルイズ、頑張ってください。これから何があっても貴女が決めた道だから悔いなくやりなさい。」

自分で決めたことだから、何があっても逃げずやり通せと言うカトレアでした。

「ちい姉様、頑張つて来ます。」

短い挨拶をして頭を少し下げるルイズなりました。

「ルイズお嬢様、そろそろ馬車に乗るお時間ですので。」

魔法学院まで付き添う侍女が早く馬車に乗るように言つのでした。

「もう、行くのですね。帰ってきたばかりで少し心配なのですが、ルイズが自身で決めた事なので母は何も言いませんが、頑張りなさい。」

頑張つてこいと言うカーリーヌでした。

「かあさまゝ行つて来ます。」

そう言つてカーリーヌに甘える様に抱き着くルイズなのです。

「しっかり、していると思えば。やはりまだまだ子供ですね。」

そう言つて、ルイズの髪を優しく撫でるカーリーヌのだが、もう子供じゃ有りません。才人と色々やっちゃっているのです。

(五月蠅いわねー外野のくせに！ せつかく、母様との感動的なシーンなのに、一回々に行かなきゃならないわね。)

何か恐ろしい事を心の中で考えているルイズさん。

女の子はコワイ、コワイ。

「母様、父様、ちい姉様、それでは、行つて来ます。」

そう言つて、馬車に向かうルイズに、ジェロームを筆頭に使用人総てが見送りの言葉を述べるのでした。

「『『気をつけてお行き下されませルイズお嬢様』』」

家族と使用人全員の見送りを受けて馬車に乗る寸前のルイズに声をかけるのは、魔法学院までの護衛隊の指揮をとる、ヴァリエール公爵家警備隊副隊長のポルトス・ド・レイノーだった。

「ルイズお嬢様、魔法学院までの警護をします。ポルトス・ド・レイノー以下四十名、道中の護りはしっかり致しますのでご安心ください。』」。

レイノーがそう言うのとルイズは、警護の者に向けてドレスの両端を少しだけ持ち上げて鮮やかな挨拶をすることでした。

挨拶を終えたルイズが、馬車に乗るのを確認したレイノーは大きな声で

「出発ー。」

と叫び、馬車の御者に動かす様に眼で合図するのです。

（漸く魔法学院に入れるのね〜これで一先ずは安心だわ。後はなるべく妊娠してるのがばれるのを遅らせなきゃイケないわけよね。）

妊娠の発覚をぎりぎりまで遅らせ様と、あの手この手と色々姑息な

事を考えているルイズですが、そんなに上手くいくほど世間は甘く有りません。

「うっさいわねーそこを上手く考えるのが、外野の仕事でしょうが  
あー。」

そう言いますが、中々難しいですよルイズさん。

暫くしてヴァリエール公爵邸を抜けて、ルイズを乗せた馬車は一路トリストイン魔法学院めざして進むのでした。

続く。

## 十二話魔法学院へ入学する？ その四（後書き）

次回から、ルイズの魔法学院での生活が始まります。

## 十三話魔法学院入学その一（前書き）

今回は最後の方に少しだけキュルケが登場します。

## 十三話魔法学院入学その一

此処はトリステイン王国の首都トリスタニアから東に馬で二時間程の所に、五つの高い塔を石の壁が囲む様にして建っているのがトリステイン魔法学院である。

魔法学院の門前に一台の豪華な馬車が止まり、更に荷物を大量に積んでいる普通の馬車や護衛の者が後ろに続いていた。

門の前では、学院所属の衛兵が豪華な馬車を警護してきた者の中から、一番偉い人に確認を取っていた。

「もう一度確認しますが、この馬車に乗っておりますのが、ヴァリエール公爵家ご令嬢、ルイズ・フランソワ様でございますか。」

衛兵が尋ねるのはもう、これで三回目であったから、流石に普段は礼儀正しいレイノーであっても憤慨していたので、

口調がきつくなるのも無理はなかった。

「何度同じことをいわせるのだあーこの馬車にお乗りになられるご令嬢は、ヴァリエール公爵家第三公女。ルイズ・フランソワズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール様だと、先程から言っているではないかあー」。

レイノアの迫力ある物言いにビビりながらも返事をする衛兵だった。

「そう言われましても、こちらも上から三回確認すると命令を受けておりますので。」

「誰がそんなふざけた命令を出したんだ！」

怒り心頭のレイノアに門前にいる数名の衛兵は完全にビビっていたが、あるひとりの者が不用意にもある言葉を呟くのだった。

「公爵家令嬢だと言っても、例の噂の三女様だろう。」

そう衛兵の一人が呟くのを聞いたレイノアは、烈火の如く怒り腰のベルトに装着していた杖を素早く引き抜き構えて、ブレイドの呪文を唱えていたのだった。

「誰だあー今言った奴は！」

ブレイドを衛兵達に向けて威嚇するレイノアだった。

威嚇するレイノアにビビり、不用意な言葉を発した衛兵はこの場か



ら逃げ出そうとしたが、それを許すほど甘くは無かった。だてに警備隊副隊長はしていないのであった。

「貴様かあールイズ様を悪く言ったのは！」。

普段冷静なレイノーとは思えないほど、眼は血走り頭から湯気が出るくらい怒っていたのだ。

レイノーに迫られた衛兵は、恐怖のあまり腰が抜けて地面に尻をつけて情けないことに失禁していたのだった。

それを見ていた他の衛兵達は声もあげずに震えているだけなのでした。

更にレイノー以外の護衛達もメイジ、一般兵関係なく集まって来て、衛兵達を睨むのだった。

このままだと、血の雨が降りそうになるのだったが、その時豪華な馬車から綺麗だが何処か毅然とした少女の声が聞こえるのでした。

「何をしているのーレイノー。」

そう大きな声で言いながら、馬車を降りて門に向かって歩いてくる

のは、白い豪華なドレスに身を包み少し開いた胸元には、ハルケギニアでは高価で珍しい金の鎖にプラチナの台座には、燦然と輝くピンクダイヤが嵌まっていた。その持ち主もまた鮮やかなピンクブロンドの髪を靡かせ、端正な顔をして華奢な身体をした。天使のような少女ルイズ・フランソワーズであった。

「ルイズ様、このような場所はあなた様には相応しくありません。どうぞ、馬車にてお待ち下さい。この不埒者の成敗はすぐに終えますので。」

無礼な衛兵を処分するから、少し時間が欲しいと言うレイノーに対してルイズは……。

「そんなことは止めなさい、なぜ、その人を処罰するのですか！」

そうレイノーに言って、止めさせようとするルイズですが。

「お言葉ではございますが、こ奴めはルイズ様の悪口を言っていたので、罰をくれてやらなければ、示しがつきませぬ。」

処罰しないとヴァリエール公爵家としての面子がたたないと言うレイノーだった。

「それはレイノーひとりだけの意思ではなくて、護衛の者総ての意思なのですか。」

「「「そのとおり皆の意思です、ルイズ様」」」

護衛の者全員がルイズを悪く言った衛兵の処分を求めているのだっ  
た。

「そう、皆同じ考えなのね。判ったわ、私はこの者を罰する事を許  
しません。」

ルイズの言葉に納得しない護衛の者達を代表して、レイノーがルイ  
ズに理由を尋ねるのだった。

210

「ルイズ様、なぜ、そんな奴を許すのですか！ そ奴はルイズ様を  
悪く言うような者ですぞ、助けるなどなりません。」

ルイズの悪口を言う奴は助ける価値は無いといったレイノーだった。

「この者は少し口が滑っただけで悪意はなかったのよ、そうでしょ  
う。貴方。」

そう言って、問題の衛兵を庇う発言をするルイズ。

ルイズに庇われた衛兵は、額を地面に擦りつけて涙を流しながら謝り更にお礼を言うのでした。

「別に良いのよ、お供の行き過ぎを諫めるのも主の家族者としてのつとめですから、気にしない様に。」

「ルイズ様、本当によろしいのですか、このような者を許して。」

無礼者を許すことに不満な様子のレイノーだった。

「貴族だからといって、チョットした過ちで平民に杖を向けるのは、余り良い事じゃ無いわ。」

何でもかんでも、杖を使って物事を解決するのは良くないと、レイノー達を諭すルイズなのでした。

（これだから、ハルケギニアは嫌なのよー普段は物事を冷静に判断するレイノーでさえ、頭に血が上ると杖を持ち出すのだから、トリステインに蔓延る魔法主義はもうどうにもならないわね。）

トリステインの魔法イコール貴族至上主義の考えは国中に行き渡っていて、もはや手のほどこし様も無いと感じるルイズなのでした。

「自分としては納得できないのですが、ルイズお嬢様が許すとおおせになるのですしたら、我等全員言うべきことはありません。ご判断に従います。ルイズが許すと決断したのなら、護衛の者達に言うことではないのでした。」

震えながら、成り行きを見ていた衛兵のひとりが、ルイズへの伝言を告げるのでした。

「そう、本塔にある学院長室に行けば良いのかしら。でも本塔は広いでしょう、私には初めての所だから判らないわ。」

ルイズが学院長室の場所を知らないと言つと……。

「それでしたら、自分がルイズ・フランソワズ様を学院長室まで、ご案内いたします。」

そう言ったのは、まだ若い衛兵のひとりであった。

騒乱の場をおさめたルイズは衛兵の伝言に従って学院長室をめざすのだが、その前にお付きのメイドや護衛者達に、女子寮がある塔三階の自分の部屋に荷物全部を運び入れる様に指示するのでした。

「後は頼むわ、レイノー私も話が終ったら行くから。」

そう言つて、荷物の搬入をレイノーに任せるルイズ。  
此処はトリステイン魔法学院本塔にある学院長室前の廊下に、豪華な白いドレスを着て、色鮮やかな赤いマントを纏いし美少女が佇んでいた。

（今から、オールド・オスマン学院長と初めての対面をするから、気合いを入れなきゃならないわ。）

オスマンと逢うので自然と力があるルイズなのでした。

（それに先程の騒ぎの元凶はこの扉の向こうにいる、変態なのだからひとつ懲らしめてやらなきゃ腹の虫が収まらないわ。）

先程の門前での騒ぎは、元はと言えばオスマン学院長の強引な命令が原因だから問いただしてやると意気込むルイズ。

『コンコン』

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールです。オスマン学院長が呼んでいると伺いまして、参上いたしました。」

┌

ルイズは呼ばれて来てやったんだから、早く部屋に入れると思っていたら…。

「入りなさい、鍵は掛けておらんよ。」

と言った、老人の声でしたので扉をあけて学院長室に入室するルイズでした。

「初めてお目にかかります。ヴァリエール公爵家三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールでございます。オールド・オスマン学院長。」

そう言って、ドレスの両端を少し持ち上げて挨拶をするルイズなのでした。

「うむ、儂がトリステイン魔法学院、学院長のオスマンじゃよろしくなのじゃよ、ミス・ヴァリエール。」

ルイズに向けて軽い挨拶をするオスマンでした。

「早速の挨拶、ありがとうございます。オールド・オスマン。ひとつ伺いたいのだけど良いかしら。」

言葉は静かな物言いなのですが、眼は冷ややかにオスマン学院長を見つめているのでした。

「何かね、儂に答えられることなら良いのじゃが。のう、モートソグニルや。」

そう言つて、自分の使い魔である白い小さなハツカネズミの身体全体を撫でながら、話しているオスマンなのであった。

「門に詰めている衛兵にあんな無茶な命令を出したのは、オスマン学院長ですか。」

先程の騒ぎの元凶はお前なんだろうと、指摘するルイズ。

「いかにも儂が命じたんじゃが、それがどうかしたのかのお。」

ルイズの言いたいことが、判つていて惚ける気満々のオスマンの爺であった。

(コノオ、じじいは全部判つていて惚ける気ね。そっちがそうなら、こっちも容赦しないわ変態には。)

「どうかしたかですつて、学院長が無茶な命令を出したせいで、危うく一人の衛兵の首と胴体が永遠にお別れするところだったと言つのに……。」



言っているうちにだんだんテンションが、あがっていったルイズな  
のでした。

「やれやれ、儂が念のために確認させただけなのに、あれくらいで  
怒るなど公爵家の者もたいした事が無いのお〜。」

自分を此処まで無事に護衛してくれた者達を侮辱されて、黙ってい  
るルイズではなかった。

「家の者達が悪いと言うのおー、仕える主家の者を悪く言われたら  
怒るのは当たり前じゃないのー、そう成る事が判っていて命令した  
のはあんたじゃないのよー。」

怒りでピンクブロンドの髪が波打ち、顔を真っ赤に染め上げていた  
ルイズ。それに対してオールド・オスマンは何事も無かったかの様  
にしているのだった。

「古い先短い爺をいじめんでくれるかなのお〜、ミス・ヴァリエー  
ル。」

チョットした事で怒らないでと言うオスマンですが、怒るなど言う  
ほうが無理なのですから。

「なにいつてんのよーあんななんて後、千年はくたばりそうに無い妖怪爺のクセに！」

物凄くガラの悪い言葉でオスマン学院長を詰るルイズでした。

「良いの、良いの、美少女にキツイ口調で責められるのが〜こんな気持ち良いとは思わなかったのじゃ〜。」

変なスイッチがはいって、身を悶えるオスマン学院長を見るルイズの眼は、ゾットする程の寒さを感じさせるくらい冷たかったのです。

（こんな変態がトップにいる位だから、他の教師のレベルなんてたいたことは無いはずよ。こんなんじゃ先の事を考えると頭が痛くなるわ。）

「いつまでやるつもりですか学院長、気持ち悪いのよーそれにさつきから私の足元をチヨロチヨロしている、ハツカネズミ踏み潰して良いかしら〜。」

ルイズがそう言った途端に、オスマンは……。

「モートソグニルを踏むのは、やめてくれんかぁーミス・ヴァリエールー。」

そう言つてオスマンは、ルイズに踏まない様に頼のんだのでした。

「おおーよしよし、モートソグニルや大丈夫だったかなのおー、ミス・ヴァリエールは狂暴じゃのおー、あの日かのおー。」

オスマンのそのその言葉を聞いた途端、ブチツという音がしてルイズはドロップキックをオールド・オスマンの顔面に炸裂させて、更に四のじ固めを喰らわせたのだった。

「ノー、ノー、止めてくれーミス・ヴァリエール。こ、こしがぁー砕けるのじゃー。」

ルイズの怒涛の攻撃によつて、オールド・オスマンはボロクズの様になつていくのであった。

暫くして元の様に何事もなく椅子に座っていたオスマンは、ルイズに告げるのでした。

「ミス・ヴァリエールの要求通りの研究室の建物は、ヴェストリ広場の端に建つておる。何時でも使えるようにしておるからのおー。」

そう、恩きせがましく言うオスマンだったが、あの建物はヴァリエール公爵が建てた物であって、オスマン学院長に礼等言う必要はなかった。

「そうですか、荷物を整理したいので、これで失礼させて貰います。

」

そう言つて、ルイズは学院長室を後にして女子寮にある、自分の部屋に向かうのでした。

本塔から女子寮のある塔までの間の廊下では、一年生から三年生の男女の学生からすれ違つ度に色々な噂がルイズの耳にはいるのでした。

「あれが、噂のヴァリエールの三女か。。」

「えっ、噂つてなんのこと、」

「知らないのか、君、十年前に神隠しにあつたヴァリエール公爵家の三女が突然帰つて来た事を。」

「ああ、あの事ね、帰つてきたらそれまでの十年間の記憶を無くしていた言つ、嘘つき三女のことよね。。」

「そんな都合の良い事があるものかよー、実際は何処かの国のある好色貴族に性奴隷として飼われていたらしい、それを捜し当てたヴ

アリエール公爵が怒り狂ってその貴族を家族ごと、いや使用人も含めてみなごろしにしたって聞いたぞー。」

「えっ、あたしが聞いたのはどっかの国の大商人のひひじじいが、困っていたという事なんだけど、ヴァリエール公爵に判って一族や使用人もみなごろしになったって言うのよ、怖いわねえ。」

その他の者も色んな根も葉も無い酷い事を本人に聞こえるように言うのだったが、ルイズは気にすることなく毅然とした態度をとって自分の部屋に向かって歩いて行くのでした。

女子寮にある自分の部屋の扉を開けるとそこには、ポルトス・ド・レイノーが待っていたのでした。

「お待ちしておりましたルイズ様、ベッドや箆笥に鏡台等はあらかじめ運ばれております。後は洋服等の身の回りの品は先程運んでおきました。それに例の荷物や備品はヴェストリ広場の端にある研究室に総て搬入しておきましたのでご安心ください。」

全部やったので安心してくれと言うレイノーだった。

「ご苦労様でした  
と言って

ルイズはレイノーに二百十エキュールのお金が入った袋を渡すのでした。

お金入りの袋を渡されたレイノーは。

「ルイズ様困りますこのようなものを頂くわけにはまいりませぬ。」

そう言って、受け取るうとしないレイノーにルイズはこう言っつのでした。

「先程の事はやり方は間違っていました。私のことを思っつてしてくれた事には、物凄く嬉しかったの、だからこれは感謝の気持ちとして皆に受けとつて欲しいのよ。」。

そうルイズに言われるとレイノーも気持ち良く

「それではルイズ様、皆で頂戴いたします。」

そう感謝の言葉をのべるレイノーだった。

レイノーが部屋を退室して、今まで張つていた気が抜けたのか、どつと疲れが出て椅子に座り暫くぼくとしてしていると、扉を

『コンコン』

と叩くと同時に女性の声があるのでした。

「隣の部屋の者だけど、挨拶がしたいから扉を開けて貰えるかしら。」

少しハスキーっぽい凜とした声だったので、興味が湧いて扉を開けるルイズだった。

扉を開けて相手を見ると、背は高く腰まである長くて赤い髪に褐色の肌と抜群のプロポーション（T171B94W63H95とくに胸の破壊力は凄い）という、十代後半の美少女が佇んでいたのだ。

（なにこれ、この胸はなんなのよー私にたいする挑戦、挑戦なのかしら。なにを食べたらこんなに大きく育つのかよー私だってこれ位ほしかったのよーこれがあれば、サイトにあんな事やこんな事もできたのにー不公平だあー。）

自分の胸とくらべて余りにも違うので心の中で文句を言うルイズ。

「わたしは隣の者でキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーよ、これからよろしくね、お隣さん。」

お隣さんと言われて、まだ名のついていないことに気づいたルイズは挨拶をするのでした。

「私の名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ、こちらこそよろしくね。」

これが色々な意味での終生のライバルであり、生涯の友に成る二人の美少女の初めての出会いであった。

続く。



### 十三話魔法学院入学その一（後書き）

後年内に出来るだけ書けると良いなと思います。

十四話魔法学院入学その二（前書き）

今回の今年は最後になると思います。

## 十四話魔法学院入学その二

「なんの様なの、ただ単に挨拶に来ただけじゃなさそうだし。」

本題を話せと言うルイズだった。

「貴女、頭は良さそうね、ズバリ聞くけど噂の三女でしょう。」

（先程も廊下で人とすれ違う度に色々囁く様に言われたけど、面と向かって言われるとこれはこれで、はらがたつわ。）

「私が噂の三女だけど、それがなにかあるの！ 貴女もそこいらにいるレベルが低い奴らと一緒になの。」

凜とした雰囲気には少しは期待していただけに、彼女もただの噂好きの貴族だと思っ、落胆しかけたのだが……。

「失礼なこと言わないで！ わたしをそこらの、レベルの低いトリステイン貴族なんかと一緒にしないで、これでもゲルマニア貴族よ！」

質の悪いトリステイン貴族と同列に見られて、少し怒っているキュルケなのです。

「私が悪かったわ、ごめんなさい。ミス・ツエルプストー。」

そう言って、自分の非を認めて頭をペコリと下げるルイズなのでした。

それを見たキュルケは少し驚きながらも、ルイズにこう告げるのでした。

「アハハハ、貴女面白いわ。とても、あのプライドだけは高いトリステイン貴族とは思え無いわ。気にいった！ 私のことはミス・ツエルプストーではなくてキュルケと呼んで下さるかしら、ミス・ヴァリエール。」

ルイズのことが気にいったのでキュルケと呼ぶ様にと言う、ミス・ツエルプストーだった。

「やっぱり、トリステインとは違うのね。考え方がはっきりしているのよゲルマニアの人は、私のほうこそ気にいったのよ！ だからキュルケと呼ばせて貰って良いかしら、そっちもミス・ヴァリエールじゃなくて、ルイズと呼んで貰いたいわ。」

キュルケを気にいったので、自分のことはミス・ヴァリエールでは

なくて、ルイズと呼んで欲しいと言ったのであった。

「早速、ルイズと呼ぶわね。さつきから気になっていたのよ、胸元でキラキラ光っているピンクダイヤモンドのペンダント。」  
そう言って、キュルケはルイズが首にかけているピンクダイヤモンドのペンダントを、瞳を輝かせて見続けているのであった。

「ウッフ、このペンダントが気になるの？」

ペンダントのことをキュルケに尋ねられて、嬉しそうなルイズでした。

「このペンダントは私にはとても大事なモノなの。」

少し感傷的な表情をしながら言うルイズに、キュルケはある言葉を口にするのでした。

「ルイズ、もしかしたらその品は大好きな彼氏からの贈り物じゃないの。」

キュルケに見事 言い当てられたルイズは、顔を朱く染めて  
「ち、ちがうの……これは、そう……じゃない……かん……ちがいない……でわ……たし……のかれ……し……じゃ……ない……か……ら……。」

なにを言っているのか判らない程、混乱しているのだった。

「可愛いわよルイズ、そんなふうにしてしまうと、こんな事したくなるじゃないの〜。」

そう言うと、同時にルイズの背中に両腕をまわして大きな胸に抱き寄せるキュルケなのであった。

「な、なにするのよ、は、はなし……ムグウ…キュ……………」

身体を離す様に言おうとしたルイズですが、キュルケの凶器みたいな胸に口を封じられて言えなくなり、意識まで遠のいてゆくのですが、最初は可愛い可愛いと言って、はしゃいでいたキュルケも声がしなくなっただので、見て診ると顔が蒼くなりぐったりしているのだった。

慌てるように、ルイズをベッドに寝かせて介抱するキュルケなのでした。

「うう……な、なにが、あったのかな。」

漸く気がついたルイズを見たキュルケはホツとしたのでした。

（そうだ、たしか顔にキュルケの胸を押し付けられて、離そうともがいてるうちに意識が無くなったんだわ。それにしもあの胸はなんなのよ、危うく窒息死に成りかけたわ、とんでもない代物ね。出来れば封印しとかなきゃいけないのはあのオツパイ型窒息製造器は。でも、チョットだけ気持ち良かったわ。チョットだけね。）

ルイズはチョットだけ気持ち良いと言いますが、チョットで下着がぬれ…『ズゴーン、ズジャジャザン、ドッガーン』  
ゴホ、ゲホ、ハア、ハア、もう少しであの世に行くところだった。

「外野ー判っているわねー、次にあんな恥ずかしいことをばらそうとしたら、その首叩き切るからねー。」

なんか恐ろしいことを口にするルイズさん。

「ねえールイズ、まだベッドで横になつてなさい、何も無い空に魔法を放つたり、大声でひとりで喋るのはまだ頭が本調子じゃないのだからよ。」

まだぼくとしているから休めと言うキュルケに、ルイズは

「私は大丈夫だから、さっきのあれは気にしないで何時もの事だから。」

言われたキュルケも

「何時ものことなら気にしなくても良いのかしら。」  
と言って、先程のペンダントの話しに戻るのです。

「安心して、もう彼氏のことだからかわないわ、それにしてもそのペンダントはハルケギニアでは見た事もない程斬新なデザインをしているわね。さぞかし高かったんじゃないの。」

見るからに精巧な造りのペンダントだったから、物凄い値段がしたのだろうと言うキュルケでしたが……。

「どう言えば良いのか判らないけど、値段は五十エキューくらいかな。」

ルイズの言葉に

「えっ、うそでしょう。」

咄嗟にそう呟く程、キュルケに取っては衝撃的なことなのです。

暫くア然としていたキュルケだったが、気を取り直してルイズに尋ねるのです。



「あのね、ルイズ。そんなことは有り得ないわ、わたしはこれでも宝飾品にはかなり詳しい方なのよ、この私が見ても最低一万エキューはする品なのよ、これは。」

少なくとも一万エキュー以上する筈の品物だと言うキュルケ。

「そうかも知れないわ、ハルケギニア製じゃないから。」

「やっぱり、そうだったのね。ひょっとして東方にあるロバ・アル・カリイェで作られた物だったのね。」

エルフに遮断されていて行き来が出来ない、東方の地で製作されたのではないかと言うキュルケなのですが、まさか異世界地球製の品とは言えないので

「そうね、ロバ・アル・カリイェで作られたのかも知れないわね。」  
そう言つて、微妙にごまかすルイズなのでした。

「ねえルイズ、チョットだけ話しを聴いてくれない。」

そう言うキュルケに対して、勘が良いルイズはだいたい判っていたが、話しの内容を聞くまで静かにしているのです。

「今すぐとは言わないのよ、もしも、もしもよ。ルイズがそのペン

ダントをとても大事にしている事は見ていて判っているつもりだけど、何時か気がかわったら、その品物を私に譲ってくれないかしらモチロンこれ位出すわ。」

そう言っつてキュルケは、五本の指をルイズに見せるのだった。

（困ったわ）このペンダントは一生手放す気はないのに、キュルケとは仲良くしていききたいけど、あのキラキラ輝く瞳をみると中々諦めてくれそうに無いわ。）

中々諦めてくれなさそうなので、これからどうかわしていくかと思うと、頭が痛くなるルイズでした。

実はキュルケは超がつく程、宝飾品が大好きなものでした。ましてや今まで見たことも無い程の素晴らしい逸品なので、諦めきれないのでした。

ルイズが典型的なトリスティン貴族だったら、決闘してでも手に入るのだが、ルイズが良い子で自分が気にいったので気長に待つつもりみたいですが何時まで待てるか、わかりませんねキュルケの性格なら……。

「キュルケには悪いけど、今は手放すつもりはないわ。」

ルイズがそう言って、やんわり断るとキュルケはニヤリとして、あの言を口にするのでした。

「今はと言うことは、何時かは良いとも取れるわね。」

「キュルケがそう思うならそれで良いわ、私としてはわね。」

今はこう言うしかないルイズだった。

「まあわたしもすぐについて、わけじゃ無いし待つつもりよ。」

少し気まぎれになった雰囲気を変えるために、キュルケはルイズから色んな事を聞き出そうとするのでしたが……。

「ふん、そうなの噂どおり十年間の記憶は無かったのね。」

そう言ってくれるキュルケなのですが、半分以上バレバレなのだった。

（ハア、表面上は記憶喪失だと認めてくれるらしいけど、勘の良さそうなキュルケだから半分以上ばれてるなコレワ。）

本当のことを聞き出したかったキュルケですが、会ったその日に重要な事を言う程。口が軽くないルイズなので真相を打ち明けてくれるのを待つみたいなのでした。

それから色々な事を語り合うふたりでしたが、そろそろ夕食の時間が迫っているのだった。

「ねえルイズ、もうすぐ夕食の時間だけど、どうする。行くなら一緒にどう食堂の場所は知らないでしょう。」

「そうねせっかくのお誘いだし、場所も知らないからお願いするわ。」

初めての場所での食事だから、ひとりでわ嫌なルイズはキュルケが誘ってくれたのは嬉しいことなのでした。

ルイズは学院の制服に着替えて食堂にいくのでしたが……。

（なんなのよ！ この制服は。上の白いブラウスは良いとしても、下のスカートはなんでこんなに短いのー、これって絶対にオスマンの変態ジジイの趣味だわああー、それに茶色のマントを着けると何処のコスプレイヤーって感じだし、もう頭が痛くなるわ。）

オスマンの趣味丸出しの制服にため息がでそうになるルイズだった。

「ルイズ気分でも悪いの、さっきから話し掛けても返事してくれないから、どうしようと思ったわ。」。

「それはゴメンナサイ、チョット制服について考えていたの。」

そう言っつて、キュルケに謝るルイズだったが、改めてみて見るとつくづく身体の造りが不公平なくらい違うと思えるのだった。

（さっきから擦れ違う男共はキュルケばかり見るわ、とくにブラウスの一番上ボタンをはずしてあらわに成っている、けしからん窒息製造器の胸に鼻の下を伸ばしながらね、これだから男って奴は――私なんかすれ違っつても、酷い事しか言われないのに！。）

「そうね、私もひとつ言いたいことが有るわ、このブラウスの窮屈さにはまいつているの。」

そう言っつて、これみよがしに胸元を強調するキュルケなのでした。

（なに、なにこれは、私に喧嘩を売っているの！でもさっきから見ているとどうも怪しいのよ。ひょっとしてキュルケって、大胆な発言ばかりしているけどまだ、男としたこと無いのかも。）



くわばら、くわばら、女は怖い。

「もう良いの、だったら早くアルヴィーズの食堂に行きましょう、すぐそこだから。」

そうキュルケに言われて、少し先の方を見ると学生達が次々に入っていくので、あそこがアルヴィーズの大食堂かと思うルイズなものでした。

キュルケと一緒に食堂に入って来たルイズを見た、貴族の坊ちゃんお嬢ちゃん達のひそひそ話しは聞くに堪えない程酷いものでした。

「おい、見るよあれが噂のヴァリエール家の三女じゃないか。」

「顔はかなり綺麗だが、身体の方はまだ未発達なのだな。」

「そこが良かったんじゃないのか。」

「えっ、どう言っことだ。」

「貴方達知らないの、あたしが聞いたのは、さらったのは良いけど足がつくの嫌って、ある所に娼婦として売り飛ばしたって話だよ。」

「え、それはデタラメだよ、本当はひとさらい達から逃げたところを平民に拾われて、貧しい暮らしをしていたのが事実さ。」

聞くに堪えないヒソヒソ話が、あちらコチラからルイズに聞こえる様に囁かれるのだった。

悪意に満ちた囁きを聴いていたキュルケはルイズに小声で

「良いの、こんな連中に好き勝手に言わせておいて。」

余りにも理不尽なことを言う、トリスティン貴族の餓鬼共やそれを知っただけでも窘めもしない、教師達に憤慨しているキュルケはルイズに何故言い返さないのかと、問うのだった。

「こんな品性のカケラも無い奴らになにを言っても無駄よ。それにキュルケは信じてくれてるんでしょう、噂が出鱈目だと言うのは。」

キュルケさえ信じてくれるのなら、後はどうでも良い感じのルイズであった。

「あなたを見ていたら判るもの、誇りに満ちあふれた眼をしているから。」



噂どおりなら、堂々としたりは出来ないと言うキュルケだった。

「そんな事よりもおながペコペコなの、私達は何処に座るの。」

くだらないことより、早く席に座って食事がしたいと言うルイズなのでした。

「ルイズはまだ知らないから言っておくけど、端から一年生、二年生、三年生と食事をするテーブルが決まっているから気をつけて、それに奥の中二階にあるテーブルは教師や職員の専用だからね。」

それぞれの立場によって、食事する場所が決まっているから気をつけなさいと忠告するキュルケだった。

「言ってくれて、有り難うキュルケ。」

そう言っただけでキュルケに感謝して、二人仲良く空いている席に座るのだった。

ルイズとキュルケは楽しくお喋りしながら食事をするのでした。

普段ならキュルケの廻りの席は彼女の信望者でいっぱいなのですが、今日の夕食は噂のルイズが横に居るので、二人の廻りの席には誰も

座っていないのです。

食事も終わり、デザートとお茶を待っているルイズとキュルケだった。

（食事は塩が多すぎることを除けば美味しいんだけど、量が多いのよ！ キュルケに言わせればこれでも、朝食や昼食に比べたら少ないと言っただから、驚きを通り越してあきれられるわ全く、でもさつきから気になるのは私達の少し先に座っている蒼い髪で身体が小さくて可愛いのに、食べる量が物凄いあの子は何者なの。絶対に普通じゃ無いわよあれは……。）

ルイズが心の中で色々考えていると、ワゴンにのせた各種類のデザートとお茶を各人に配り歩くメイドが、ルイズとキュルケの所に来て言うのでした。

「貴族様方、どれに致しましょうか。」

そう言っただけでルイズとキュルケにどのデザートにするのか尋ねたメイドは、ハルケギニアでは珍しい黒いボブカットの髪に張りのある肌を持った、どこか日本人に似た雰囲気をしている胸が大きい十代後半頃の女の子でした。

（このメイドの黒髪に顔立ちは、まるで日本人みたいじゃないの、こんな事ってあるの。）

ルイズがハルケギニアでは非常に珍しい黒髪のメイドを見て考えていると、横に居るキュルケがなにかを言ってくるのでした。

「ちょっと、ルイズなにぼろとしているのよ、どのデザートにするか早くきめなさい。」

「そ、そうね、私はクックベリーパイにミルクティーを貰うわ。」

慌てる様に好みものを頼むルイズ。

「わかりました。ミス・ツエルプスターが、アップルパイにレモンティーですね。えっ」とこちらの方は……。」

ルイズの名前を知らない黒髪のメイドは言い淀んでしまうのですが「ルイズ、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ。」

そう黒髪のメイドにフルネームを明かすルイズ。

「お名前を聞かせてくださり、ありがとうございます。ミス・ヴァリエール、わたしはシエスタと申し上げます。これからはシエスタとお呼びください。」

(なんか判らないけど、このメイドとは何かを巡ってライバルに成るように思うわ。)

勘の良いルイズであった。これが後に才人を取り合って火花を散らす関係になるルイズとシエスタの初めての出会いだった。

デザートを食べ終わった直後にキュルケはルイズに……。

「ねえルイズ、この後一緒にお風呂に行かない。」

「お風呂ねえ〜良いけど、自分の部屋でチョットだけ待っていてくれるキュルケ、用を済ませたら呼びに行くから。」

「良いわよすぐにきてね、待ってるわ。」

それからアルヴィーズの大食堂の前で、キュルケと別れたルイズは用のある厨房へ向かうのでした。

暫くして、厨房での用事を済ませたルイズはキュルケの部屋の扉をノックして中にはいるのだった。

「お待たせ、今からお風呂場に案内してくれるキュルケ。」

「待っていたわルイズ、早く行きましよう。」

そう言っつてふたり仲良く、本塔の地下にある女子大浴場に向かうのでした。

ルイズとキュルケは脱衣所で素早く服を脱いで裸になると風呂場に入るのだった。そうしないと噂好きの女子学生達がまたルイズのことをあれこれ言うのが鬱陶しいからである。

「どうルイズ、広くて大きいでしょう。一度に百人以上が入れるんだから。」

少し自慢したように言うキュルケだった。

（なんか大浴場と言うより、むしろ温水プールと呼んだ方が相応しいわ。）

「なにぼくと、突っ立っているのよ、こっちに来なさいお湯や水を出す、マジックアイテムの使い方を教えるから。」

そう言っつてルイズを呼ぶキュルケ。

キュルケの説明によると、木製の小さい桶を壁に有る動物の顔に似

せた注ぎ口の下にある台に置いて、あるキーワードを言うとお湯が出るし、別のキーワードを言うとお湯が止まるのだった。水の場合も専用の言葉で出したり、止めたり出来るのでした。

「ありがとうキュルケ、使い方が判ったわ。。」

「判ったなら良いわよこれくらい。」

友達同士で、畏まる必要はないと言うキュルケなのでした。

（それにしても、これに使われているマジックアイテムは、まるで日本の最新式の蛇口のシステムと同じような機能なのね。このマジックアイテムを使えば、ハルケギニアでもウォシュレットを備えた水洗トイレが作れるわ。）

マジックアイテムを利用して、ウォシュレットを作れるとわかり嬉しくなるルイズだった。

「なにしているのルイズ、早く身体を洗ってお風呂につかりましょ。う。」

キュルケが早くしろと言うので、持ってきた透明の防水性バッグに入れていた、ボディー洗い用のスポンジ二個に高級シャンプーン一つ、高級コンディショナー一つ、高級ボディーソープ一つ、高級洗顔石

皴二個を取り出すルイズだった。

それを見たキュルケは何なのかルイズに尋ねるのでした。

「それってなに、変なバッグを持ってくると思ったけど。」

「これは身体や髪に使う、シャンプーや顔専用の石皴なの。」

ルイズがそう言うのとキュルケは女の勘で、これは良い物だと見抜いて「ルイズ、チョットだけ使わせて。」

そう言うと、ルイズの手元から素早く取って、早速使うのでした。

キュルケの素早い行動力にア然としながらも、しょうがないと諦めて予備の洗顔石皴で顔を丁寧に洗うルイズ。

暫くして、ルイズとキュルケはシャンプーとリンス、ボディソープ、洗顔石皴等で総て洗い終えて大浴場の湯につかるのでした。

「ねえルイズ、さっきのアレまた貸して、リンスって最高よ髪の滑らかさが凄く良い感じなの、シャンプーも此処の備えつけの物と段違いよ、洗顔石皴も顔がスベスベになるし良いわ。」

ルイズの持ち物は最高だと褒め讃えるキュルケ。

「なによ！ キュルケたつら、ひとのだと思いタツプリ使って、あれらは特殊な物だから数は少ないの。多少の予備は有るけど。」

数が少ないから派手に使うなと怒るルイズに、言い返すキュルケ。

「別に減るもんじゃ無いし。」

「確実に減るの！！！」

即効でキュルケに突っ込むルイズだった。

「例え減ったとしても、私が使うのだから光栄に思いなさいルイズ。」

「あんたは何処の女王様なの！ 全く冗談じゃないわ。」

そう言っただけで怒りながらも、どこか楽しそうにルイズとそれを見てこちらにも楽しそうにしているキュルケ。そんな二人を少し離れたところから眺めているのは、今は髪を洗いストレートになっているが、普段は金色の縦髪ロールをしたかなりの美少女がさつきから、ルイズの持ち物であるリンス等を気にする様にチラチラと見ていたのがある。

湯舟に場面を戻すとトンデモナイ事になっていた。



「只じゃないんだから！ 利子は今からキツチリ、払って貰うわその胸でー。」

ルイズがそう叫ぶと同時に、素早くキュルケの後ろに廻り両手を前に出して、手の平を使い下から持ち上げるようにギュット、力をこめてたわわに実る巨乳をモミモミと揉むのでした。

「きゃゝなにするのールイズ、や、やめ、やめなさ……や……やめ……て……や……。」

「止めてと言われてやめる者はいないのでよくキュルケ。」

乳を揉むのをやめるように、ルイズに頼むキュルケだったので、言われた位でやめるわけもなくそれどころか更に、ヒートアップしていくのでした。

「ちよつ、そこは……だから……さきつ……つまま……  
で……あんぐだ……めえ……。」

ここからは凄い事になるので自主規制します、ご了承ください。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

突然の出来事に、大浴場に居る女子生徒の総てが硬直して動けず、このまま桃色パラダイスが続くかと思われた矢先に

「なにやっているの！ あんた達！！！」

ルイズとキュルケのピンク天国を強制的に終わらせたのは、何時もどおりにお風呂に入りに来たトリステイン魔法学院医務室勤務の水メイジ、マリー・クレール・ド・ベルモンドでありました。

この後一時間以上に渡り風呂場で、ミス・ベルモンドに説教されたルイズとキュルケは疲れはて、スゴスゴと自分達の部屋に向かうのでした。

自分達の部屋の間で少し話をするルイズとキュルケなのでした。

「ルイズのせいで酷い目に会ったわ。」

「私のせいだと言っのー。」

「そのとおりじゃ無い。胸は揉まれるわ説教はされるし、全部ルイズが原因じゃないの！ 違つとでも言っのかしら。」

キュルケにあんたのせいで酷いことになったと言われたルイズは反論するのでした。

「なに言ってるのよ、元はキュルケが私の物をいっぱい使うから、それに、そそそその胸が大きいのが悪いのよ！」

それを聴いてピンときたキュルケは少し声のトーンを変えてルイズに言うのであった。

「あーら、ルイズ〜ひよつとしてこの胸をモミモミしたかったのは、自分の小さくて揉んでもつまらないからなのね〜、ごめんなさい気づいてあげなくて〜これからは好きだけ揉ませて・あ・げ・る。オ、ホホホホ。」

キュルケのからかうような言葉に屈辱を感じたルイズは、小さな声で「この屈辱いつか、はらさないでおくべきか、このアマアーム！」。

「  
何時の日か胸を大きくしてキュルケを見返してやると心に誓うルイズですが、簡単に胸のサイズがアップできれば苦労しませんよ。ルイズさん。」

（黙れー外野！ あんたが後五サント私の胸を大きくしてくれたら良いのよ！。。）

無茶なことは言わないで欲しいですが、ルイズさん。

「また何時もの事なの、そんなのどうでも良いけど、フハア〜もう疲れたから眠るわ。おやすみ胸の小さいルイズちゃん。。」

最後までルイズをからかうキュルケなのでした。

「勝手に言ってなさいよーオツパイ魔人！ ふん。」

そう言っつて、舌をだすルイズでした。

「そういつとこが可愛いのもルイズは、じゃあ明日も宜しく頼むわね。」

突如キュルケに可愛いと褒められて、顔を朱くしてうるたえて……  
「ばかぁー。」  
と、キュルケに一言だけで、恥ずかしいのか素早く部屋に入るルイズなのでした。

（本当にキュルケって、ばかなんだから、でもそこが彼女の良いところなのよ、ありがとう。）

口でわなんやかんや言っつても、喧嘩してもすぐに仲直りする程。うまが合う二人なのであった。

「おやすみなさいサイト、チュウ。」

『パチン』

大切に隠し持っている才人の写真にキスをして、ベッドに入りマジックアイテムの照明を指を鳴らして切り、疲れていたのかすぐに深く眠りにおちるルイズなのでした。

続く。

十四話魔法学院入学その二（後書き）

来年もよろしくお願いします。

十五話魔法学院入学その三（前書き）

あけまして、おめでとございます。

本年もよろしく願います。

### 十五話魔法学院入学その三

此処はトリステイン魔法学院女子寮のルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールの部屋である。

疲れていたのか、日本に住んでいた頃からの日課である鉛入りの木刀による素振りを、今日は寝坊してやっっていないのであった。

「ううん、あれこそ、何処だっけ。」

まだぼくとしていて、廻りの状況がよく判っていないルイズでした。

暫くすると頭が段々とハッキリしてきたのか、此処がどこだか思いだすルイズ。

「あつ、そうだったわ昨日から私、ここの魔法学院に入学したんだわ。」

（さて、着替えるかな）この後は食堂であさごはんを食べて、それから研究所のある建物に行って、中の確認やいろいろ準備しなきゃね。）

ベッドの上で今日の予定を頭の中で組み立てるルイズ。



「さてと、着替え、きがえと。」

そう呟き今着ている、薄い水色のシンプルなデザインの前トホックブラをはずして、更に上のブラとお揃いの薄い水色パンツを脱いでそれらを洗濯籠にいれるルイズ。

下着を脱いで生まれたままの姿になったルイズは、朝日を浴びても神々しい雰囲気を漂わせていたのでした。

（今日はどれにしようかな〜。）

そうやってルイズが選んだのは、ブラは薄いピンクのフロントホックにパンツはシンプルなデザインの白であった。

それら上下の下着を装着して、更に学院の制服を着て後はマントをするだけでした。

（今日から念のために杖以外にも拳銃と雪風も一緒に持ち歩くかなあ〜、でも杖とワルサーPPKはマントの内側に装着できるけど、雪風はどうしよう……。）

なんか持ち歩く武器のことで色々悩んでいるルイズでしたが、急に部屋の扉を

『コンコン』  
と、扉を二回叩くノックの音とともに声もしてくるのでした。

「起きていますでしょうかミス・ヴァリエール。洗濯物の回収に参りました。」

（あれ、洗濯物って、メイドが一々各室をまわって回収するものなの。）

まだまだ貴族の生活に慣れないルイズ。

「待つて、今鍵を開けるから。」

そう言つてルイズは持っている万年筆の杖を扉に向けて、一言

『アンロック』

と、唱え鍵を開けるのでした。

「はいりなさい。」

ルイズの入室許可を得て部屋に入ってきたのは、ハルケギニアでは珍しい黒髪のメイド、シエスタであった。

「貴女たしか、シエスタだったわね。」

「お早うございますミス・ヴァリエール。わたしがシエスタです。」

シエスタは間違いなく本人だと名乗るのでした。

「それじゃ洗濯お願いするわ、シエスタ。」

そう言って洗濯物を入れた籠をシエスタに渡すのだった。

「承りました。出来上がりしましたらお部屋にお届けしますが、お留守の場合は扉の前に置きますので宜しいでしょうか。ミス・ヴァリエール。」

「プツ、ハハハ、可笑的い、可笑的いわ、あなた、可笑的いのよ。」

急に笑い出したルイズに、訳が判らないシエスタは不安になり尋ねるのでした。

「ミス・ヴァリエール、わたしが何か粗相をしましたでしょうか。」

「それよ、その時代がかった言い方がとても可笑的いのよ。ハハハ。」

シエスタの物言いが、ツボに嵌まる程可笑しいと言うルイズだった。

「そんなに可笑しい言い方なのでしょうか。」

更にルイズに尋ねるシエスタなのでした。

「そうじゃ無いのよ余りにもシエスタの言い方が、堅いからわたしにしたら、それが可笑しく感じるの。」

「そんなに私の言い方は堅いのでしょうか。」

自分としては、貴族に対して丁寧な口調で対応していると言うシエスタ。

「他の貴族にはその言い方は間違っていないけど、私の時はもっとくだけた言い方をしてほしいの。」

もっと気楽に言って頂戴とシエスタに頼むルイズなのですが。

「貴族様に対して失礼な言い方などできません。」

「だから、私はそんなの全然気にしないから良いの。」

そう言って、気軽に接してほしいと言うルイズだが。

「そう言われなくても……。」

「ああ、もうだめだめ、肩の力をぬいて気楽に、シエスタだって私の噂くらい聞いたことあるでしょう。」

「……え〜とそれはありますけど。」

ルイズに関しての噂は少しは耳にしていると言うシエスタ。

「世間に行われている噂は殆どデタラメだけど、貴族らしくないと言うのは本当のことなの。だから形式張る話し方をされるのは苦手なの。」

生まれは貴族だけでも、育ちは普通だと言うルイズなのです（異世界育ちを普通と言えるのかは、判らないが）。

「じゃあ噂は全部間違いなんですかあー。」

ルイズが語った真実に驚き、思わず大きな声をだしてしまったシエ

スタは……。

「大声をだしまして申し訳ありません。ミス・ヴァリエール。」

失礼なことをしたと言って謝るシエスタですが。

「別に謝らなくて良いわ。さっきみたいに喋ってちょうだい、その方がわたしも気が楽で良いから。」

ここまで言われるとシエスタとしても警戒心が薄れて、ルイズには気楽に接していくようになるのでした。

「ミス・ヴァリエールって、他の貴族様達と違い気さくな方なんですわね。」

そう言って少し微笑みをうかべるシエスタなのでした。

「気さくななんて言ってくれたのは、シエスタが初めてよ。気がキツイと言われることはあってもね。」

「わたしはそうは思わないわ、本当にルイズって可愛いもの。」

いつの間にか部屋に入って来て、ルイズのことを語るキュルケでした。

「な、ななに勝手に、人の部屋に入ってくるのよーっ。キュルケ  
!!!。」

無断で部屋に来て、あまつさえ可愛いとまで言われたルイズは、顔を朱く染めながらキュルケに抗議するのだった。

「扉が開いていたから勝手に入らせて貰ったわ、ルイズ。」

あっけらかんと言うキュルケなのでした。

262

その言葉を聞いたシエスタは

「すみませんルイズさん、扉を閉めるのを忘れていました。」

それを聞いたルイズは

「しょうが無いわね、シエスタも案外ぬけているのだから。そう言っ  
て、少し呆れるルイズなのでした。」

「そんなことよりも、もうすぐ朝食の時間だから一緒に行かないルイズ。」

そう言ってルイズを朝食に誘うキュルケだった。

「あの、ルイズさん。私はこれで失礼させて貰います。」

そう言って、洗濯籠を持って部屋を退室するシエスタなのでした。

「お願いするわシエスタ、ご苦労様。」

そう言って、シエスタを労うルイズ。

「早く行きましょうルイズ。」

早く食堂に行こうと急かすキュルケ。

「ちょっと待って。」

そう言って、キュルケを少し待たせてルイズは、タンスの中からある物を取り出してそれを左腕に装着するのだった。

それを見ていたキュルケは、その品はどうゆうものなのか尋ねるの  
でした。



「これは腕時計と言う物なの〜。」

ルイズは簡単に説明するだけでした。

「そんなこと言われても判らないわ、もっと詳しく言って。」

簡単に言われても判らないので、もっと深い説明を求めるキュルケなのでした。

「ハルケギニアにも時計はあるでしょう。それを更に高性能にして小型にしたのが、この腕時計なのよ！ 判ったキュルケ。」

ルイズにそう言われても、余り判っていないキュルケなのでした。

「一応納得したのなら、食事に行くわよ！」

そう言つて、キュルケを部屋から連れ出して、アルヴィーズの大食堂に向かうルイズ達だった。

アルヴィーズの食堂に入って、一年生のテーブルの昨日と同じ席に着いて食事をするルイズとキュルケでした。

「ねえ、私の眼の錯覚かも知れないけど、ルイズの分の朝食って少ないように見えるんだけど。」

廻りと比べてルイズの朝食は明らかに少ないと言うキュルケ。

「そらそうよ、きのう厨房にいつて、私の食事の量を減らしてくれる様に頼んだの。今日の朝食から。」

そう言つて、当然とした顔をしているルイズ。

「そんな少ない量で身体がもつのルイズ。」

心配してくれるキュルケ。

「これくらいの量が丁度良いの、それに今までだってこんなものよ。」

「ルイズって、少食なのね。」

そう言つて感心するキュルケでしたが……………。

ルイズの席近くに座って食事をしていた、まるこつゝい体型の少年が廻りに聞こえるような声で……。

「ああ、嫌だなあ〜これだから貧しい暮らしをしてきた者は

明らかにルイズの事をばかにする発言に対して、当事者の本人はその少年に辛辣な言葉を投げ付けるのでした。

「あんたみたいな無知な奴に言っても判らないと思うけど、私はそんなみつともない体型に成りたくないから、考えて食事の量をコントロールしているの！」

ルイズがその言葉を口にした途端、廻りが凍り付いた様になるのだった。

「お、おま……え…、い、いま、なんて言った、僕のことを……。」

まるこつゝい体型の少年は、ルイズに核心を突かれて物凄く動揺しながらも、なんとか言い返そうとするのだが…。

「あんた、耳も悪かったの。メタボと言ったの、メタボと！

」

廻りの連中は誰もが知っていても、言えなかったことをこの女はいいやがった、と、そうゆうふうな顔をしているのだった。

その時横に座っていたキュルケがなにかを口にするのでした。

「ルイズ、そんな事言ったら彼に悪いわよ、本当のことでも。」

そう言つて、ルイズを窘めるのですが、全く窘めにはなっておらずむしる輪をかけて、酷いことを言っているキュルケなのでした。

自分を馬鹿にする発言をしたルイズとキュルケに、怒りのあまりベルトに装着していた杖を取り出して、風魔法の呪文を唱えルイズとキュルケに向けて攻撃しようとした瞬間、まるこっぴ体型の少年の口には黒くて冷たい鉄の塊が突っ込まれていたのだった。

「ねえメタボ、いま私とキュルケに魔法を使おうとしなかった！！  
このクソ豚野郎があああー！！」

ルイズは自分とキュルケにキレて魔法で攻撃しようとした、まるこっぴ体型の少年に対して瞬時に、マントの中に装着していたワルサーPPKを抜き安全装置を解除して、スライドを引いて目的人物の口に押し込んでいたのです。

「ねえ、メタボ、今この引き金を弾いたらどうなるか、おつむの足りないあんたでも判るわよね。」

ルイズに言われてコクコクと頷く、まるこつい体型の……もう一々面倒なのでマルコと言う事にする。そのマルコはいま自分の口に入れている物が何かは知らないが、それが使われたらこの世からオサラバすることになるのは本能で判っていたのだった。

アルヴィーズの食堂に居る殆どの者が、このあまりにも早い展開について行けずにフリーズしていたのですが、奥に有る中二階の職員専用の席から慌てる様に飛び出して来たのは、頭が不毛地帯の中年教師でした。

「何をしているのですかぁーミス・ヴァリエール。そんな物騒な事はやめなさい！」

そう言って、マルコの口に銃口を入れているルイズにその行為をやめさせようとしている、頭が残念な教師なのですが……。

「もうそろそろ、良いんじゃないルイズ、そのばかも、死ぬ程反省してるでしょう。そうよねメタボ君。」

教師も駆け付けて来て、これ以上は面倒事に成りそうなのでメタボ

野郎も私達の恐ろしさが判ったみたいだから、ルイズに許してやれ  
と言うキュルケなのでした。マルコもコクコクと頷くのでした。

「キュルケがそう言うなら止めるけど、これで判ったわねメタボ！  
私達に逆らったらどうなるのか。」

ルイズはマルコに釘を刺して解放するのでした。

それを見てホツとした、頭が砂漠の中年教師がルイズに注意しよう  
とするのですが……。

「ミス・ヴァリエール、君は たった今同じ新入生を殺しかけたの  
ですよ！ その事に反省はしていますか。」

ひと一人を殺しかけて、何とも思っていないルイズを見てかなり怒  
っている、頭がツンドラみたいな中年教師でした。

事情も知らない頭が涼しい、中年教師に力チンときたルイズは反論  
するのでした。

「お言葉ですがミスタ……………」

頭が焼き畑農業の教師の名前が解らず言い淀むルイズなのですが。

「ジャン・コルベール、火の教師をしています。二つ名は炎蛇と言います。」

物騒な二つ名を持っている、ジャン・コルベール。

「そうは言っけど、ミスタ・コルベール、さっきのは正当防衛です！」

「正当防衛とはどうゆう事ですか。」

意味が判らないコルベールは思わずルイズに尋ねるのだった。

「マルコの方が先に私達に魔法で攻撃しようとしたから、される前に反撃した迄です。ミスタ・コルベール。」

相手が先に手を出そうとしたから、仕方なく反撃しただけと言うルイズなのでした。

そうは言っても余りにもルイズのやり方がキツイので、もっと穏やかに出来なかったのかと言う、ジャン・コルベールでした。

「ミスタ・コルベールは私とキュルケが、黙ってマルコにやられていれば良いと言つのですかぁー。」

あまりにも理不尽なコルベールの物言いに、眼をつりあげて怒るルイズ。

（なめんじゃないわぁぁーこの禿頭がぁぁー、

）

そう言つて状況も判らずに、上から目線で判断するコルベールに、心の中で罵るルイズなのだった。

「わたしが言いたいのはそうなのではなく、力で解決するのではなくて、もっとお互いに話し合つてはと思つのです。」

余りにも現実を知らない、まるで何処かの国の幼稚なことを恥ずかしげもなく言う政党の議員みたいなコルベールに呆れ返るルイズとキュルケだった。

現実も判らない理想論者のコルベールとこれ以上議論しても仕方ないので、朝食もまだだけど

「これからは気をつけますので、もう行っても良いですか、ミスタ・コルベール。」



そう言つて、アルヴィーズの食堂を去つて行くルイズとキュルケな  
のでした。

「あのメタボの汚い唾液でベトベトになつたから、後で分解して拭  
き取らなきゃならないわ。」

そう言つて、ワルサーPPKをハンカチに包んで嫌そうにもつてい  
るルイズなのでした。

「ハア、朝食を食べ損なつたわ、仕方ないアレに手をつけるしか  
ないわ。」

「アレって何のことルイズ。」

アレについて、わけの判らないキュルケはルイズに尋ねたのだつた。

「キュルケも一緒に食べる？ その前にメイドに頼まなきゃいけな  
いわ。」

そう言つてルイズは、歩いていたメイドに後から自分の部屋に来る  
ように頼むのでした。

部屋で待っていると、先程のメイドが来たのでご飯とカレー、牛丼のレトルトパック四個を沸騰したお湯に十五分から二十分位浸して深皿二枚とスプーン二つも一緒に此処へ届けてと依頼するのです。

「メイドに何を頼んでいたのルイズ。」

「後から言っわ、それよりデザートはどれにする。」

そう言っつて、キュルケの前には色んな種類のフルーツ罐詰がテーブルの上に並べられていた。

「ねえ〜ルイズこれなんなの。」

目の前に有る罐詰がどんな物なのか解らず尋ねるキュルケ。

「罐詰と言っつのは、果物や肉、魚等を長期間保存できるものなのよ。」

「へえ〜こんな良い物が有るの〜これもロバ・アル・カリイ工製なの。」

キュルケに東方の品なのかと聞かれたルイズは

「そ、そうよ。」  
とごまかす様に言うのだった。

「どれにする、わたしは白桃にするけど、キュルケはフルーツミックスが良いかも。」

そう言って自分の好みで選んだルイズなりました。

「ねえルイズ、デザートが有るんだから、勿論ワインも用意できるわよね。」

少しニヤつきながら言うキュルケ。

「有るけど、朝っぱらからお酒を飲むなんて何処の不良娘なのよ。」

日本ではルイズは未成年になるので、当然アルコールは飲まないの  
で、子供でも朝から平気でお酒を飲むハルケギニアの習慣には辟易  
していたのだった。

「別に良いじゃない、ワインなんて水みたいなものよ。」

ワインなどお酒には入らないと言い切るキュルケ。

ハルケギニアでは、生水はおなかを壊すので、代わりにワインを飲むからしょうがないかと諦めるルイズなのでした。

「この七十六年物のボルドーの白ワインで良いキュルケ。」

そう言って、テーブルの上に置かれた白ワインは、ルイズはお酒を飲まないから知らないが、日本でオークションに出すと一本数百万円はする品物なのであった。

早速ワインをあけて飲むキュルケでしたが……。

「なんなの、このワインはーボルドーの七十六年ものだと言うから絶対偽物のもと思っていただけ、七十六年ものは以前に飲んだことあるけど、このワインはそれよりも遥かに上質のモノじゃないのよーー。」

ハルケギニアのガリアにもボルドーの七十六年ものがあり、それを飲んだことの有るキュルケは今飲んだワインはそれとは比べものにならないほど、上物だと言うのでした。

「ルイズ！ 飲めないからといっても、お酒の価値を知らないにも程があるわよ！ これ国宝クラスのワインじゃないのよ！ オークションに出したら間違いなく十万エキュール以上するわー私にどうし

ると言うの、貴女に大きな借りができたじゃないの！」

こんな上質なお酒を気軽に出して、無知にも程があると言うキュルケなのでした。

「え〜と、このワインって、物凄く高いものだったの。あるひとから貰った物だから判らなかつたわ、そういえばまだ一本家にあつたわ。」

そう言うことを気軽に口にするルイズに少し呆れるキュルケなのでした。

「そう言うのは人前で、簡単に喋るんじゃないわ。それにしてもルイズの正体は何者なのかしら〜凄く、き・に・な・るの・よ〜。」

そう言つて、非常な程怪しい微笑みを浮かべ、手をワキワキと動かして、ルイズを真っ直ぐに見つめているキュルケなのであった。

豹変したキュルケを見て怯えた表情をしながらも、扉を開けて部屋から逃げだそうとしたルイズなのですが、時既に遅く背後から迫られ捕まり、あつという間にベッドに押したをされるのだった。

「ふふふ〜覚悟なさい、洗いざらい秘密を喋つて貰うわルイズ。」

そう言つて、淫靡なまでに妖しくルイズに迫るその姿は、まるで何処かの特撮モノの悪の美人女幹部そのものであった。

「ねえ、キュルケ、変なことするのは止めてお願いよ。私達友達でしよう。」

そう言つて変なことしない様に懇願するルイズでしたが。

「そうよ、昨日風呂場でされたことを今日はこっちがやる順番なのよ、だつて私達友達だから。」

そう言つてルイズに襲い掛かる妖しい雰囲気をしていたキュルケなのでした。

「や、やめ……て、そ……こ……は、だ……めえ……そん……  
な……と……こ……に……手……を……い……れ……ち……や……  
……ん……そ……こ……は……よ……わ……い……あ……っ……は……  
ん……だ……め……い……く……ん……  
……ここからは、十八禁展開になるので自主規制します了解下さい。」

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

ピンクな異次元空間と化したルイズの部屋に、先程頼まれた物をトレイに載せて運んで来たメイドがソックをして鍵がしていなかったので扉を開けて部屋の中を見ると、ベッドでは二人の美少女が着衣が乱れまくり裸に近い状態で上下に重なり合っていたのだった。

その光景を見たメイドは顔を真っ赤にしながらも

「たたたたたのまれて、いたいたものを、ここに、おいて、おきおきますので、ごごごごゆっくり。」

そう言つて、頼まれていた物をトレイごとテーブルに置いて逃げる様に部屋を出て行くのでした。突然の出来事にベッドの上でア然として抱き合つたまま固まっていたルイズとキュルケでしたが、暫くして正気に戻つたふたりは、女子寮中に響き渡るように絶叫したのだった。

続く。

### 十五話魔法学院入学その三（後書き）

マリコル又は変なスイッチが入り、M街道を突き進みます。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4897y/>

---

ルイズ：ハルケギニアに還る

2012年1月2日07時43分発行